Ⅴ　歴史研究

１　序論

「わが国における女性会計学者の現状と課題」を研究テーマとする本スタディ・グループでは、日本会計研究学会に初期に入会され活躍された女性会計研究者について、既に亡くなられた方も含め、その業績や足跡を辿ることは、本研究にとって不可欠な出発点となると考え、歴史研究として取り組むことになった。

その歴史研究の取り組みにあたっては、まず、研究対象の特定のために、一定の要件を定め、当該要件に合致する女性会計研究者を対象とすることとした。当該要件は、次の 4 点である。

① 日本会計研究学会に女性研究者が最初に入会してから 20 年間に入会した方（昭和 28 年～47 年）
② 教育歴 20 年以上の方
③ 本スタディ・グループ発足時（平成 26 年 9 月）に 70 歳以上の方
④ 日本会計研究学会への貢献がある方（受賞、特別委員会、スタディ・グループ、学会報告、司会等）

もとより、歴史研究をどう捉えるかについては、多様な考え方があり、これら 4 要件による研究対象の特定についても絶対的でないことは承知しつつ、研究対象の特定が必要であると考え、このような枠組みをとることとした。

そして、これら 4 要件に合致するのは、日本会計研究学会入会順で、故能勢信子先生、故眞野ユリ子[48]先生、故山浦瑛子先生、中川美佐子先生となった。

そこで、歴史研究では、上記の 4 先生を対象とし、各先生方について 3 つの側面から業績と足跡を辿ることとした。3 つの側面とは、経歴、研究業績および各先生と関係の深い方へのインタビュー調査であり、それぞれの構成は以下のとおりである。

① 経歴

経歴を一覧表にまとめるとともに、その経歴に至る事情や経緯、またその中での本人の思い等にも収集資料や後述するインタビュー調査結果も織り込んで可能な限り辿り、鮮明にするよう努めた。くわえて、研究生活に関する経歴だけでなく、必要な限りで私生活にも言及している。歴史研究の対象となっている先生方は、女性会計研究者としていわば開

[48] 図表Ⅴ-1-1 においては、入会時の氏名を記載しているため、旧姓である森村ユリ子（1963（昭和 38）年入会）と表記している。

拓の道を歩まれたことから、それゆえの苦難を乗り越えた足跡を明らかにするべく、全生活を辿ることが必要だと考えたからである。そのため、幾分情緒的かつ冗長になっているかもしれないことをご容赦願うところである。

② 研究業績

主たる研究業績を一覧表にまとめるとともに、研究業績の特徴や評価等については、主要な著書に対してこれまでに著されている書評やコメント等、および著書における著者自身による趣旨記述や特徴づけ等に基づき考察した。歴史研究の対象となっている各先生方の長年にわたる研究業績の評価を当スタディ・グループで行うことは到底なしえず、いわば第三者評価と自己分析に基づき考察したところである。

③ インタビュー調査

経歴に関して記述したとおり、歴史研究の対象となっている先生方は、女性研究者としていわば開拓の道を歩まれたことから、それゆえの苦難を乗り越えた足跡を明らかにするべくアプローチするところであるが、その足跡がより鮮明になることを意図し、各先生方と関係の深い方々にインタビュー調査を行うこととした。インタビュー調査において話題は広範囲に及んだが、基本的に次の 3 項目を中心に整理しとりまとめた。

・研究継続に対する原動力
・女性研究者としての苦労や職場での様子
・家庭と職場との両立の工夫や家庭での様子

なお、インタビュー調査に基づく研究については、会計分野において多くの成果[49]が出されている。本歴史研究では、研究対象の各先生方の足跡をより鮮明にすることを意図し、資料の裡にある来歴や思い等も伺うべく、インタビュー調査を実施したところであるが、当インタビュー調査では、先行研究に学びつつ、先行研究の意図とは異なることもあり、独自のまとめを試みた。すなわち、インタビュアーとインタビュイー間の一問一答に基づくものではなく、上述のように 3 項目を中心に再構成している。

また、今回実施したインタビュー調査にあたっては、古くは 60 年余り前の資料等も探していただきながらご対応くださったり、わざわざお知り合いに確認いただいたうえで対応くださったこと等、多大な労とご配慮をいただいたことに感謝したい。さらに中川先生については、これまであまり表わされなかったというご自身の越しかたと研究業績について、2 度にわたりインタビューに応じてくださったことに心からの謝意を記しておきたい。

歴史研究では、以上のような構成で、研究対象の各先生方の業績と足跡について、明らかにするべく努めたところであるが、そのために収集し辿った資料・情報等、またインタ

[49] 田中代表編集［1990］、税務経理協会編［1999］、日本会計研究学会スタディ・グループ（中野常男主査）［2006］およびこれに基づく中野編［2007］、日本簿記学会簿記理論研究部会（橋本武久部会長）［2012］等がある。

ビューに応じていただいた方のいずれにも事情に応じて多寡や偏りが生じている。そのため、各先生方のとりまとめに幾分かの違いがみられることをご容赦いただきたい。

中間報告では、研究対象の 4 先生のうち、日本会計研究学会入会順に能勢先生および眞野先生についてまとめ、この段階での小括をくわえた。最終報告では、能勢先生および眞野先生についても必要な加筆・推敲をくわえるとともに、新たに山浦先生および中川先生についてまとめ、最後に歴史研究として研究対象となった 4 先生に関する考察に基づき総括を試みたところである。なお、研究対象の特定のために定めた第 1 の要件「日本会計研究学会に女性研究者が最初に入会してから 20 年間に入会した方」（図表Ⅴ-1-1）を踏まえた全体状況については、次年度の科研費における研究課題とする。

図表Ⅴ-1-1　日本会計研究学会に女性研究者が最初に入会してから 20 年間に入会した方*

西暦	和暦	年	入会時の氏名（所属）
1953	昭和	28	**能勢信子（神戸大学）**
1959	昭和	34	別枝ゆき（日本女子経済短期大学）
			畠山あき（別府大学短期大学）
1961	昭和	36	二村敏子（東京大学博士課程）
1963	昭和	38	**森村ユリ子（龍谷大学）**
			頭師啓子（神戸商科大学）
1964	昭和	39	山本敬子（慶應義塾大学）
1965	昭和	40	野本文子（明治大学）
1966	昭和	41	関ちか（日本女子経済短期大学）
			古谷久子（日本女子経済短期大学）
1967	昭和	42	佐藤千代子（日本大学）
			寺田富子（日本大学）
1969	昭和	44	田中さみ子（慶應義塾大学）
1970	昭和	45	馬場理代（香川大学）
			米田敬子（中央大学）
			山浦瑛子（高崎経済大学）
1971	昭和	46	**中川美佐子（関東学院大学）**
1972	昭和	47	嶺　輝子（日本大学大学院商学研究科博士課程）

* 研究対象となる先生の名前は太字で示している。

出典：『日本会計研究学会会報』に基づく調査結果

２　能勢信子先生の業績と足跡

（1）経歴

能勢信子先生は、1926（大正 15）年 9 月 25 日、神戸元町で出生された。

1944（昭和 19）年には大阪女子経済専門学校（現大阪経済大学）に進まれ、1947（昭和 22）年には神戸経済大学（現神戸大学）入学、同学女子学生第一号となられた。同大学で新庄博[50]先生のゼミナールに所属し、国民所得論を専攻され、1950（昭和 25）年に神戸経済大学研究科に入学された。この間の事情について、能勢先生ご自身が次のように記されている。

「旧制の高女を出るとき挺進隊か進学かという選択で偶々入学した大阪女子経専（戦時下のため男子募集を止め偶々二年間だけ女子を募集した）で、大北文次郎先生（旧神戸高商、東京商大卒）に習い、本学に入学したおり大北先生が旧知の新庄博先生に推薦して下さって新庄ゼミに入った。」（能勢（信）[1990] 9 頁）

そして、その新庄先生について、次のように述べておられる。

「初めて兼松記念館の新庄先生の研究室にお伺いしたとき、後にオックスフォードで経験するような、アカデミックな雰囲気に身の引き締まる思いがしたものである。そしてそれ以来、ゼミナールでの三年間、その後の研究生活を通して、先生は私にとって常に偉大なプロフェッサーであられた。中々以て男子学校に適応できなかった私に対して、先生が特に女子扱いもされず、また男子扱いもされず、淡々としかも親身に指導して下さったことも、本当に有難かった。こうした先生の寛闊の学風を受けて、女子学生も多く育っていった。」（能勢（哲）[2000] 11 頁）

「春風駘蕩の紳士であられた新庄先生に、私の処女論文の草稿を見て頂きに上ったとき、非常に厳しく的確に批判され、ダウン寸前になったことを覚えております。」（能勢（信）[1990] 8 頁）

1952（昭和 27）年には、神戸大学経済経営研究所[51]助手として国立大学経済系の女性教官第一号となられた。その経緯と思いを、次のように記されている。

「経済経営研究所に助手として採用して頂くことができましたのは、学部時代の恩師故新庄博先生と、当時新しく研究所に着任されました故渡辺進[52]先生のご推挙の賜物です。

---

[50] 新庄博（1902-1978）先生は、1928（昭和 3）年に母校である神戸高等商業学校（現兵庫県立大学）に着任された。その後、広島文理科大学（現広島大学）等を経て、1944（昭和 19）年 11 月に神戸経済大学（現神戸大学）に移り、1967（昭和 41）年に同大学を停年退官し、名誉教授の称号を授与された。

[51] 神戸大学経済経営研究所は、1949（昭和 24）年 5 月、新制神戸大学に唯一、付置研究所として設置された。当該研究所は、神戸経済大学の経済研究所と経営機械化研究所を統合したもので、国際貿易、経営機械化、経営経理の 3 研究部門から成り、経営学の研究部門を置いている点が特色となっている。また、2 つの研究所の研究・調査活動を受け継ぐとともに、経済学部門と経営学部門の両方を持つにいたった統合の成果を生かして、「横の学際研究を総合実施することを理念」としていた（神戸大学百年史編集委員会編 [2005] 1012 頁）。

[52] 渡辺進（1903-1977）先生は、名古屋商業学校教諭等を経て東洋紡績株式会社に勤められた後、1950（昭和 25）年より停年を迎えるまで 17 年間、神戸大学に勤務し、名誉教授の称号を授与された。

渡辺先生は、神戸新聞のインタビューに「能勢さんは男の助手でも議論を説き伏せるほどアネゴ膚の

当時の女性の地位は今と比べますと非常に低く、女性の潜在能力についての見とおしも至って不確かな時代に学問をつづけるよう推挙して下さり、また指導して下さった両先生のご厚情には、いま考えましても感謝の言葉もないほどです。」（能勢（信）[1990]8頁）

同研究所では渡辺進先生の講座に所属され、ブレイ、ヒックス[53]、ピーコック等と読まれ企業会計上の諸概念の国民経済的分析を試みられた[54]。当該研究は経済学と会計学の接点である新しい学問領域「社会会計」の体系化を図られたものであり、その学際領域の取り組みについて、

「新庄先生と渡辺先生から、経済学と会計学の学際領域をするよう示唆を頂き、いまも私の専攻しております社会会計を勉強することになった。」（能勢（信）[1990]8 頁）

と回顧しておられる。また、所属されることになった渡辺先生とその下での研究の日々について、次のように述懐しておられる。

「渡辺先生からは、先生のご退官まで公私ともに錬えて頂きました。お噂どおり渡辺先生は、厳しい躾けをして下さる方でした。‥‥『学者は棺に入るまで研究をするものだ』と折にふれてつぶやかれたお声は、いまも私の頭の中に残っております。…（中略）…

助手から助教授までは専門分野の土台を堅める学者にとっての本源的蓄積時代であります。ところで先輩とりわけこうした古き良き時代の方々とちがいまして、戦時中、軍用機のエンジン製作に工場動員の日を送った私どものクラスにとりましては、学者に普通常識とされる語学や論理学などの習得というハードルをもこなさねばならず、この本源的蓄積時代は、なかなかハードであったといま思い出します。学者というのは随分博識だと驚いたカルチュア・ショックは、その後かなり長く続きました。」（能勢（信）[1990]8頁）

1956（昭和 31）年に神戸大学助教授に昇任され、経営学部、大学院経営学研究科も担当された。1961（昭和 36）年には『社会会計論』を白桃書房より刊行され、これにより経営学博士を女性として初めて取得され、日本会計学研究学会上野・太田賞を受賞された。こ

人で非常にカンがするどい。最近能勢さんの論文「社会会計」がソ連の学説に引用されたこともあって前途有望で、夫君との仲も円満なようだし、二人ともこれからしっかり伸びていくと思う」と答えられている（神戸新聞　1956（昭和 31）年 5 月 25 日「おしどり助教授誕生　全国で初の経済学　学生の人気者　神大の能勢信子さん」）。

[53] John Hicks（1904-1989）教授はノーベル経済学賞を受賞した折、イギリスのタイムズ紙で「明晰にして倦むことなき思想家、広範囲の読者を持つ学者、明解な解説者（A clear and tireless thinker, a widely read scholar and a lucid expositor）」と評価された。能勢先生は、教授の学風を一言に要約する名言としている（能勢（信）[1974]9 頁）。

[54] 能勢先生の恩師渡辺先生もまた、所得会計の有力な典拠となった経済学関係の書物、たとえばフィッシャーやヒックス、ブレイの書物、また国民所得分析に関するクズネッツやバァナ等の論文を精読され、吟味されていた（能勢（信）・武田[1967]89-90 頁）。

の間のめざましい研究業績に関して、ご夫君である能勢哲也[55]先生（以下、哲也先生と表す）は、

「研究所は唯一の女性研究者に対して極めて好意的であったが、信子自身も女性なるが故に人一倍の仕事をという使命感を持っていたことは確かで、この著作（学会賞をいただいた『社会会計論』）もその産物だろう」（能勢（哲）[2000] 20 頁）

と記され、またご息女の廣野桂子[56]先生は、

「*当時、やはり女性研究者っていうのは、まず地位を固めることが非常に難しい時代でしたので、とにかく早く博士号を取得するということを考えておりました。・・・・・本当に苦労して、かなり努力して、早く博士号を取ったと思います。*」（インタビュー140 頁）

とインタビューで話されている。

また、留学も多く経験されている。1964（昭和 39）年より 1 年間、オックスフォード大学へ行かれ、G.ステューヴェル教授のもとで国民所得論をご研究された[57]。ステューヴェル教授のもとでの研究に関する記述は、印象深い。

「この大学でステューヴェル博士という社会会計のパイオニアの一人の指導を受けることができたのが、私には決定的な印象であります。というのは、この大学の教育制度は、テュートリアル・システムで、先生と学生が一対一で報告し、批判や励ましを受ける方式です。当然英語で考えを説明しなければならないので、イヤでも考えに考えて準備せざるを得ないわけです。社会会計という分野に夢をもつことができるかどうかさえ不確実な当時の私には、ステューヴェル博士の手きびしい質問や批判が恐怖の的でありましたが、反面、博士との対話を介して、社会会計はやりがいのある楽しい学問だという確信を得ることができました。」（能勢（信）[1990]8-9 頁）

1972（昭和 47）年には再度同大学に留学され、そのリナカー･カレッジに研究員として在籍され、J.ヒックス教授との共著となる *The Social Framework of Japanese Economy*（1974（昭和 49）年に出版）に従事された。これに至る事情については、後述のとおりである。その後、1977（昭和 52）年にヨーク大学の客員研究員となられ、A. T.ピーコック教授、J.ワイズマン教授とも交流された。

---

[55] 能勢哲也（1927-2015）先生のご専門は財政学、金融論。1950（昭和 25）年より 3 年間、神戸大学経済学部で勤務された後、1953（昭和 28）年に神戸商科大学（現兵庫県立大学）へ移られた。1994（昭和 59）年に同大学を定年退職され、同大学の名誉教授となられた。

[56] 廣野先生のご専門は住宅政策。現在は、日本大学経済学部に勤務されている。

[57] この時の外地留学について、哲也先生は「信子が、こんにち此処に現れることとなったいきさつについては、多くの人々の支えがあった。彼女は、さる国立大学の研究所の助教授の任にあって、このたび大学所有の基金による留学を承認されることになった。しかし留学者の選出ルールは、依然年功序列型で、当面信子の番ではなかったが、それを説得して呉れたのは、講座主任の渡辺進教授と国際派の早川武夫教授であった。折角旦那が行っているからという配慮もあった、と後で聞いた。」（能勢（哲）[2007]131 頁）と記されている。哲也先生は、1962（昭和 37）年よりオックスフォード大学に留学されていた。

こうして積まれた研究業績は研究業績一覧表のとおり単著・共著をあわせ 20 篇以上、論文は 100 篇以上であり、ご自身で紀要を含め 1 年に 2 篇は書くという目標を立て、精力的に研究に打ち込まれた。

このような研究生活の一方で、私生活では 1950（昭和 25）年に神戸大学・大学院の同級生であった哲也先生と結婚された。神戸大学・大学院での同級生であったことから、互いの研究内容について理解し合い、妻としても研究仲間としても支え合える関係であった。それは、能勢先生の研究の原動力にもなったようで、廣野先生によれば、

「*父は若い時に、今より病弱でして*[58]*、最終的には財政学会の理事にもなりましたが、なんとか支えていきたいという気持ちが母を動かしていたと私は思います。*」（インタビュー137 頁）

とのことである。両先生について、能勢先生の若い頃に経済経営研究所の同僚でおられた小林哲夫[59]先生には、

「*おそらく支えというのは哲也さんだと思います。*」（インタビュー138 頁）

と話していただいた。また、能勢先生ご自身、

「主人が財政をやっていますのでお互いに協力しやすいですが、反面二人いっしょに研究スランプがきたときはみじめなほどゆううつになります。でもどこまでも研究生活をつづけていきます。」（神戸新聞朝刊 1956（昭和 31）年 5 月 25 日「おしどり助教授誕生　全国で初の経済学　学生の人気者　神大の能勢信子さん」）

と語っている。互いに支え合い、相互研鑽する研究者夫婦の姿が鮮やかである。

また、1959（昭和 34）年には、母となられる。育児については、

「大学の特別の配慮により一年のあいだ育児に専念。またヘルパーさんとの養育連けい体制を固めて、これが永く続くことになる」（能勢（哲）[2000] 18 頁）

という形であったようであるが、インタビューでの廣野先生の言葉は暖かい。

「*私自身はそれほど母が働いていることが嫌ではなくて、かえって出かける時の母が着替えている様子が、好きでした。*」（インタビュー146 頁）

「*夕食の後の時間、よく毎日一緒に過ごして本当に四方山話ですが、一緒に話をしていました。・・・・・私と母と二人でよく話をしていました。本当に普通の時間ですけれども、それはやっぱり、かけがえのない時間だったと思います。*」（インタビュー146 頁）

このように育児にあたられながら、あるいはあたられたからこそ「ベビー産業」について経済学者らしい鋭いコメントを表わしておられる。

---

[58] 能勢先生は、ご夫君である哲也先生の 6 度にわたる入退院により、その看病と病後の食生活等に生涯、神経を配られたようである（能勢（哲）[2000] 14, 57 頁）。

[59] 小林哲夫先生のご専門は管理会計論、原価計算論。1960（昭和 35）年に神戸大学経済経営研究所に着任された後、1966（昭和 41）年に同大学経営学部に移られた。1999（平成 11）年に同大学を停年退官され、名誉教授の称号を受けられている。

「私のいうベビー産業とは、いま流行中のお子様向け商品やサービス一般の供給業のことである。親には子に対する一種のアニミズムがあるので、フトコロの許す限りベビー産業の良き買手となり、近所が買ったからつられて買うというデモンストレーション効果がこれ程強く働く産業はない。かくてベビー産業は花ざかりとなる。しかしベビー産業の繁栄は必ずしも子供の幸福を意味しない。親の都合で子供が不平等になることもあるし、過剰のおけいこを子供自身いやがることが多い。ベビー産業の繁栄を正常なものにする手はただ一つ―両親のえい（叡）知だけである。」（能勢（哲）[2000] 19 頁）

勤務先の神戸大学経済経営研究所でも育児に対する配慮があったが、能勢先生ご自身も勤務時間が夜間になることを憂慮され、色々な組織の長になる話しをお断りになるなど、家庭と研究の両立を図られていた。

しかし、学内行政として、ご自身の役割として研究体制の強化や国際交流のため活躍され、また学外でも、1971（昭和 46）年にご自身の専門分野とのかかわりを踏まえ兵庫県建築審査委員会委員に就かれる等、各種委員を務められた。このような神戸大学の 38 年間の奉職の後、1990（平成 2）年に停年退官され、神戸大学の名誉教授となられた。同年、姫路独協大学教授に就任され、社会会計の手法による日本経済分析を日本経済論において講義された。

1998（平成 10）年 7 月、その直前まで講義や研究指導をされておられたが、脳内出血のため自宅で倒れ、突然の逝去となった。享年 72 歳、『夏の日の翔び去る如く』（能勢（哲）[2000]）であった。

以上の能勢先生の略歴を、神戸大学経済経営研究所編［1990]、能勢信子教授退官記念論文集刊行委員会編［1990]、能勢（哲）[2000]、そして『國民經濟雑誌』および『経済情報学論集』所収の「略歴」等の先行研究に基づきまとめると、次頁の図表Ⅴ-2-1 のとおりとなる。

図表Ⅴ-2-1　能勢信子先生の略歴

西暦	和暦	年	月	学歴・職歴	私生活
1926	大正	15	9		神戸市にて出生
1944	昭和	19	3	親和高等女学校卒業	
1944	昭和	19	4	大阪女子経済専門学校（現大阪経済大学）入学	
1947	昭和	22	3	大阪女子経済専門学校卒業	
1947	昭和	22	4	神戸経済大学（現神戸大学）入学 同学女子学生第1号	
1950	昭和	25	3	神戸経済大学経済学科卒業	能勢哲也氏と結婚
1950	昭和	25	4	樟蔭高等学校にて社会化教諭として勤務 神戸経済大学（現神戸大学）研究科入学	
1952	昭和	27	3	樟蔭高等学校退職，神戸経済大学研究科修了	
1952	昭和	27	4	神戸大学助手（経済経営研究所）	
1956	昭和	31	5	神戸大学助教授（経済経営研究所「経営経理部門」）	
1959	昭和	34			出産
1964	昭和	39	4	イタリア、スイス、オーストリア、ドイツ、フィンランド、ノルウェー、フランス、イギリスの各国へ出張（オックスフォード大学社会科学部特別研究生として留学）（1965（昭和40）年8月まで）	
1965	昭和	40	11	経営学博士（神戸大学）	
1967	昭和	42	4	神戸大学教授（経済経営研究所） 国立大学経済学系女性教授第1号	
1971	昭和	46	8	兵庫県建築審査委員会（1975（昭和50）年8月まで）	
1972	昭和	47	7	イギリスへ出張（オックスフォード大学リナカー・カレッジに研究生として在籍）、および研修旅行（1973（昭和48）年3月まで）	
1977	昭和	52	7	イギリス、ノルウェー、オランダへ文部省在外研究員として出張（ヨーク大学客員教授）（1977（昭和52）年9月まで）	
1978	昭和	53	8	国民所得・国富国際学会（IARIW）にて研究発表（至ロカ・ディ・パパ）	
1979	昭和	54	4	神戸大学環境保全委員会委員（1984（昭和59）年1月まで）	
1980	昭和	55	7	大阪府営水道事業懇談会委員（1989（平成元）年3月まで）	
1980	昭和	55	10	シンガポール研修旅行	
1982	昭和	57	4	日米文科系学術交流委員会委員（1985（昭和60）年3月まで）	
1985	昭和	60	4	神戸大学一般情報処理教育委員委員（1986（昭和61）年3月まで）	
1986	昭和	61	3	神戸大学附属図書館審議会委員（1988（昭和63）年2月まで）	
1986	昭和	61	9	兵庫県地方職業安定審議会委員（1989（平成元）年3月まで）	
1987	昭和	62	4	神戸大学六甲台後援会評議員（1989（平成元）年3月まで）	
1987	昭和	62	8	イギリス、イタリアへ研修旅行	
1989	平成	元	4	神戸大学六甲台後援会理事（1990（平成2）年3月まで）	
1990	平成	2	3	神戸大学を停年により退官	
1990	平成	2	4	神戸大学名誉教授	
1990	平成	2	4	姫路獨協大学教授（経済情報学部）	
1998	平成	10	7		神戸市にて逝去
					正四位勲三等宝冠章授与

(2) 研究業績

能勢先生の研究業績は後述の図表Ⅴ-2-2 のように、単著・共著あわせ 20 篇以上、論文は 100 篇を超える膨大なものであるが、主要な研究分野は社会会計であり、能勢先生といえばわが国における社会会計を構築した、その第一人者である。

社会会計とは、能勢先生ご自身の説明によれば、

「ある年度に一国の経済組織全体またはその部分たとえば地域のなかで遂行せられた経済活動の大きさを、勘定システムまたは行列の形式によって計算・表示する会計であって、対象が企業会計と異なりマクロ的な国民経済であるためにマクロ会計または国民会計ないしは国民経済計算ともよばれる」(能勢(信)[2001a] 638 頁)

ものである。

能勢先生がこのような社会会計に取り組み、第一人者となられた道筋について、先生が長年勤められた神戸大学経済経営研究所を停年退官されるに際し編まれた『能勢信子教授退官記念論文集』において、当時の山本泰督[60]所長が次のように献辞を表わしている。

「先生が研究所経営経理部門の助手に着任された昭和 20 年代後半の時期は、戦前にその種子が播かれた社会会計の研究が、戦後にいたってようやく発芽し、めざましい成長期を迎えようとする、まさにその時期に当たっていた。学部、研究科を通じて経済学に取り組んでこられた先生が、経済学と会計学の交渉・相互浸透ともいうべき社会会計に強い関心と研究意欲を抱かれたのは至極当然のことであった。社会会計論の発展の初期に新進気鋭の研究者として登場された先生は、当時比較的なおざりにされ勝ちであった社会会計論の理論的骨格を明らかにするために努力を重ねられた。昭和 36 年に公けにされた御著書『社会会計論』が翌年に日本会計研究学会から学会賞(上野・太田賞)を授与されたのは、この分野の研究深化のために先生が果たされた御貢献が高く評価されたことを物語っている。わが国における社会会計論の研究において主導的地位を占められるにいたった先生は、国内、国外の研究者との研究交流を深めつつ、社会会計論の研究進展が生み出した新しい理論的実践的課題に精力的に取り組んでこられた。」(神戸大学経済経営研究所編 [1990]「献辞」)

そこで、この道筋に顧み、以下能勢先生の研究業績について、なによりもまず、①社会会計の構築—『社会会計論』について—、続いて「社会会計論の研究進展が生み出した新しい理論的実践的課題」に対する取り組みとして、②社会会計論を超えて、としてまとめ、くわえて、能勢先生ご逝去後短期間に、能勢著の貴重な 4 著作が哲也先生の編集により上梓されているので、それを③研究業績の再結晶、として整理することにする。

---

[60] 山本泰督(1931-)先生は、1954(昭和 29)年から 40 年間神戸大学に勤務され、1994(平成 6)年に停年により退官し、名誉教授の称号を授与された。

① 社会会計の構築―『社会会計論』について―

能勢先生が取り組んでこられた社会会計は、1961（昭和 36）年に公刊された名著『社会会計論』として、集大成をみる。本書の学界における貢献ならびに評価については、以下に示すように倉林義正先生の端的なコメント、本書によって博士号取得をされたことから、その学位論文審査結果の要旨、また酒井正三郎[61]先生、西川清治[62]先生による書評により明らかであり、さらに本書は、公刊の翌 1962（昭和 37）年には日本会計研究学会より上野・太田賞を受けることとなったので、その受賞に対する小西康生[63]先生による紹介がなされている。

[倉林先生のコメント]

「『社会会計論』は、わが国における最初の国民経済計算の専門的著作として永遠に記憶されるべき業績である。それまでには国民所得の概念と計測を巡って、都留重人、鎌倉昇、市村真一といった当代屈指のエコノミストによる著作が知られていた。しかし更に進んで R.ストーン教授によって指し示された「国民所得から国民勘定へ」という国民経済計算の研究方法の発展を、1960 年代初頭に明示されたのが『社会会計論』に他ならないからである」（能勢（哲）[2000] 20-21 頁）。

[学位論文審査結果の要旨]

「社会会計論に関する研究の歴史は新しく、その研究の成果の発表は、ごく最近においては目新しいものがあるとはいえ、本論文のように体系だった研究業績は、わが国においては初めてのものである。本論文は、社会会計論に関する固有の分野に属する文献はもちろん、近代経済学、マルクス経済学、企業会計論の諸文献まで、極めて広汎かつ綿密に検討することによって、従来社会会計論の研究対象が国民所得計算の領域にのみ限定されていたことを不満とし、これ以外に投入産出表、資金循環表、国民貸借対照表などとの関連づけを行い、もって新しい社会会計論を打ち出そうとしている。著者によるこのような徹底した学説検討は、将来斯学の研究に資するところ決して少なくないと考える。

社会会計論に対する従来のわが国の文脈は、経済学的視点からの検討に終始し、会計学からする十分な検討は殆んどなされていなかったといってよい。この点に関して本論文ほど詳細に研究した文献はわが国においては他に類を見出すことができない。これは特筆すべき本論文の特徴である。さらに本論文は文献批判において内在的批判を行なう

---

61 酒井正三郎（正兵衛）（1901-1981）先生は、1925（大正 14）年より名古屋高等商業学校（現名古屋大学）に着任され、1964（昭和 39）年に停年により退官された。

62 西川清治（1909-1979）先生は、1936（昭和 11）年より大阪商科大学（現大阪市立大学）で勤務され、1973（昭和 48）年に大阪市立大学を停年により退官され、名誉教授となられた。

63 小西康生（1944- ）先生は、神戸商科大学（現兵庫県立大学）を経て 1984（昭和 59）年から 23 年間、神戸大学経済経営研究所で務められ、2007（平成 19）年 3 月に停年により退官され、名誉教授の称号を受けられた。先生は、能勢先生の持たれていた講座の実質後継者であった。

とともに、労働価値説の立場からの批判もあわせ行ない、労働価値説の立場からする著者独自の社会会計論の内容に対する基本的な構想を示している。労働価値説の立場からするこのような業績もまた、社会会計論の分野においては著者独特のものである。少なくともわが国においては唯一の業績であるといいうる。

著者が社会会計論の体系樹立のためにとった態度は、単に寄せ集め的に諸種の計算領域を含ましめるといったものではなく、社会会計における勘定体系と勘定行列との内容上の恒等性を証明したうえ、それぞれの計算体系が勘定行列として表現しうるかどうかの検証を根拠としているのである。著者は、これによって独自の社会会計論の体系を示している。この点もまた本論文の功績といいうるであろう。

会計学の見地からみて、本論文は「会計」と呼ばれるものの本質の究明を試み、社会会計が企業会計の計算構造の一適用であることを明らかにし、また逆に社会会計原理を企業会計へ導入せんとする学説を整理紹介することによって、企業会計自体に反省、再検討の機会を提供したものといいうる。もとより、個別企業に必要な会計方法として生成発展した伝統的会計学の定説からみる限りでは、本論文に盛られた諸提案を直ちに企業会計に導入することは不可能であろう。しかし今後の会計学研究に対し重要な研究課題を示すにふさわしい成果として、その会計学研究に与えた大きい貢献は高く評価されなければならない」（「社会会計論：社会会計の本質および適用に関する研究」（博士論文・論文内容・論文審査結果の要旨）17-18 頁）。

[酒井先生による書評]

「社会会計という学問は1940年代において経済学と会計学の接触点において起こって来た新しい分野であるが、その後の 20 年間における進歩は極めて目覚しい。かくして今日では社会会計はその最初の発現形態である国民所得会計のみでなく、その他の各種の計算体系を含んで考えられなければならないことは、当然である。そこで、著者は本書においてこれらの新しい各種計算体系を包括的に社会会計の体系としてとらえ、しかもそれらが社会会計の基本的形式のそれぞれの変種であることを論証しようと努力している。このように社会会計についての包括的、一般的な著書を私はまだ見たことがない。これは著者の社会会計への多年のたゆまざる関心と研究との結果に外ならないのであるが、この点で私はまず本書を社会会計に関する最も進んだ概説書として高く評価したい。

第二に本書の特徴と見られるものは、本書が社会会計の発生する実践的基盤と理論的背景を深く探求していこうとしている意図である。そして著者は前者については、1940年以降の積極的国家の要請にあるとし、後者については主としてケインズ経済学の諸範疇とそのオペレーショナルな性質のうちに見出そうとしている。この点についてはおそらく何人も著者と所見を異にするものはないであろう。しかし、これらの関連を著者がきわめて克明に描き出し、さらに近時技術的洗練化の方向へもっぱら進みつつある社会会計に対して、その基礎にある理論的背景と実践的基礎について反省を促そうとする著

者の意図に私も同感を禁じえない。

第三に本書において問題となるのは、著者が社会会計に対する消極的な批判から進んでその積極的な展開を試みようとしている部分である。著者は社会会計が結局現代資本主義国家に奉仕する用具であることをその理論的支柱としてとられるケインズ経済学の諸範疇についていたるところで批判し、もっと全国民性と公共性をもった社会会計の樹立可能性を探ろうとする。このさい、著者が消極的にはその批判の武器とし、積極的にはこのような意味の社会会計設定のための用具として用いようとしている諸範疇は、いうまでもなくマルクス経済学のそれである。この点になると私はいささか著者の見解に疑問をもたざるをえない。マルクス経済学の諸範疇は、そのような全国民性と公共性とをもった社会会計の支柱として 100 パーセントの信頼をおきうるものであろうか。またそれらは果してすべてオペレーショナルな性質をもって、社会会計にはめ込むことができるような統計値を十分な正確性をもって与えることができるであろうか。

著者は巻末においてみずから、この経済学に則る社会会計の形式的枠組を与える試みをも展開していられるのであるが、このような社会会計が日本の経済に対して果たして具体的に作製可能であろうか。もしそれが可能だとしたら、それは日本の経済構造の診断に対してまことにユニークな寄与を与えることができるかも知れない。私はこの点について著者がここに展開せられた社会会計の新しい形式に具体的な内容を盛る試みをさらにおしすすめられ、それが他日刊行せられてわれわれをもっと即事的に説得される日の近からんことを期待しておきたい」（酒井 [1962] 105-106 頁）。

[西川先生による書評]

「このたび神戸大学の能勢信子氏の時誼をえた力作『社会会計論』に接しえたことは、硬直した理論がマンネリズムの大作が横行しているきらいのある学界に、清新の気をおくりこんだものとして、喜びにたえない。…（中略）…

これを要するに、一面では現代の社会会計論の検討を通じて、それの技術的利用価値を認めつつも、他面では近代経済学の流通主義的・弁護論的性格を顧みることによって、同時にそれの利用の限界が明かにされる。より具体的にいえば、その有用性については、よりよい社会会計模型をつくり、この視点を応用して日本経済の構造を実測し、さらには経済計画立案と政府に対する勧告を可能ならしめ、他面では官製の国民経済予算や国民所得白書を批判するに役立てることもできると結論される。著者自ら言われるように、「社会会計の分析用具としての卓越性と利用上の問題点を究める」ことに限定するならば、著者の意図は実現されており、いまだ未開拓のこの領域における先進的な好著であることは疑問の余地はない」（西川 [1962] 56, 61 頁）。

[学会賞受賞に対する小西先生による紹介]

「本書は、翌 1962（昭和 37）年に日本会計研究学会より上野・太田賞を受けることにな

った。先生の学問に対する姿勢は、ともすれば精緻な技術のみに関心が寄せられ、その結果の背後に埋没されてしまいがちな理論こそ最大の関心事であること、分化した個々の詳細に共通するところの一般性を発見すること、そして、技術の役割を現実の利用レベルにおいて見定めることを旨とされていた。これは、アメリカ型の企業会計実務の研究が尊重された当時の会計学会にあっては、一見いかにも地味であるかのような印象を与えた。しかし、本書が学会賞を受賞したのは、そのような姿勢が学会での共感を呼ぶものであったことを示唆している」（小西［1990］86-87 頁）。

能勢先生の社会会計の研究は、以上のような衝撃的ともいえる、多大な評価を受けた『社会会計論』で 1 つの結実をみているが、オックスフォード大学で師事し、「社会会計はやりがいのある楽しい学問だという確信を得ること」（能勢（信）［1990］9 頁）になった、ステューヴェル博士の著書 3 冊を精力的に翻訳しておられる。このことについて哲也先生は、次のように記しておられる。

「40～60 歳の最も充実した時期に、信子は専門領域の幾つかの先端的課題に取り組んだが、その間にステューヴェル博士の著書 3 冊を翻訳して、自らの軌跡を確かめる手だてともした。『社会会計の構造』は一般的基礎理論、『国民経済計算』は科学的計測の手法に関し、『経済指数の理論』は資産価値計算に関連する。こうした社会会計は単に国民所得の内容を正確に計算する診断の学に止らず、それを以て経済計画の方向を示唆する治癒の学であるという確信を深めていった。」（能勢（哲）［2000］28 頁）

② 社会会計論を超えて

ここで取りあげたいのは、「社会会計論の研究進展が生みだした新しい理論的実践的課題に精力的に取り組んでこられた」成果として、日本経済の特色の分析を試みている *The Social Framework of the Japanese Economy —An Introduction to Economics*—、企業会計との相互交流を考究した『経済会計の発展—会計思考の新展開—』、さらに家庭生活も背景にされた『家族経済学』である。

[J.R. Hicks and Nobuko Nosse, *The Social Framework of the Japanese Economy —An Introduction to Economics*—, Oxford University Press, 1974（酒井正三郎監訳・山本有造訳『日本経済の構造』同文舘、1976 年）]

本著書に至るヒックス教授との関係について、能勢先生ご自身による詳細で、実に興味深い記述がみられる。

「この度はヒックス教授の *The Social Framework* を日本経済に適用し、*The Social Framework of the Japanese Economy* を各作業の補助者として、彼の指導下にこの 1 年を送るはずであり、その第一回目の訪問がその日なのである。原稿の一部を持って、迷路に似たオールド・ライブラリーの中を歩く私の足は、我にもなくふるえた。彼のイン

タビューが―この公明な碩学に対面することへの気おくれと、彼の短期と彼の言葉が些か吃音で聞きとり難いことの故に―どれほど気を使う代物であるかは、これを入学時に経験した友人や、また夫から聞いていた。こうした立場にあって、誰も気の高ぶりを覚えない者は無かったであろう。

『お前が道を間違えると思った』といって階段まで出てこられた先生の案外フランクな態度に些か安心しながら後に続いて室内に入る。教授の予定が立てこんでいるので、再会のあいさつもそこそこに原稿を手渡すと、日本の労働力バランスの数字にまず目をとめて、“Interesting, quite interesting”と呟かれる。何しろ戦後、イタリーよりも早い速度で農業から工業へと労働力が大移動した日本のことであるから、この間ほとんど変わらないイギリスからみれば無理はない。頁をどんどん飛ばすと思うと、突然視線が止まり、『この註は重要な註になる。もう少し選んで事例を追加すべきだ』と指摘される。ドラフトを読み飛ばす間に、電話が二、三度鳴り、また扉口ですむ訪問客がやって来る。『お前は調子を上げて、どんどん前進すべきだ。1 年はごく短いからね』と念を押され、予定を打ち合わせて漸く気のつまるインタビューは終わった。こうした繰り返しが、教授のノーベル賞受賞のための旅行、日本を含む二、三の国への訪問の期間を除いて、至って規則的に続いた。…（中略）…

教授から『何月何日何時にオールスルーズに』という通知が来ると、とたんにパニックに陥いる。ただしテュートリアルに出ても別段烈しい叱責や批判の言葉がそこにあるわけではなかった。教授の退官記念論文集“Value Capital, and Growth”の編者ウォルフ教授がヒックス教授のクラスの空気についていみじくも指摘しておられるように、ヒックス教授のもの静かさ、パブリックスクール出身者独得のシャイネスがその一因をなしているのであろう。また他人の論法を聞くなり当の本人よりもその長所と欠点を遥かによく洞察できる卓越した能力の所為でもあろう。テュートリアルは静かに、しかし私には不断の緊張の中で進行する。彼の批判と一見意表をつく質問を待っていることは、大きい知的興奮であるとはいえ、投げかけてくる直球を受けとると同じく至難の業であったから。原稿を手早くめくりながら要所要所でジッと見る眼光は、まことに恐ろしかった。一見何の奇もない数字の列の中から 1 つの数字―1927 年実質国民所得の落ち込みを指摘され、『この数字は異常ではないか？状況について想像力を働かせばこうなるはずがあるだろうか』と聞かれて、即座にはタイプのミスかデータの質以外に思いつかず、大川一司教授の御好意によって貸与された当時未刊の改訂数字を指標化して次回に説明し、ヒックス教授の創造能力とこの改訂数字の含意がピタリと合って漸くほっとしたこともあった。この時私は、社会会計という診断の理論には、恰も医師が病人をみとる場合と同じく豊な想像能力が不可欠であると痛感したのである。」（能勢（信）[1974] 8, 11-12 頁）

また、当時の能勢先生の様子を哲也先生は以下のように記している。

「しかし、この作業を通じて、彼女の社会会計論が遥かに大きな視野をもつことができ

たようだ。ヒックスの本の構想は、通常の狭義の社会会計システムである国民所得会計と国民貸借対照表に限られておらず、人口及び労働力のバランスや物価、所得分配、交易条件の長期変動を含み、またこうした計測可能な数値に影響を及ぼすと考えられる教育の経済効果、税制などの制度的変化及び技術革新にも論点が及んでいる。

成長期の日本について、これらの論点を数字で確かめるのが信子の仕事であり、更に日本の特徴を明らかにするための、国際比較の手法や論点について、社会会計の先駆者ピーコック教授（ヨーク大学）を尋ねたり、ペヴズネル博士（ソビエト科学院）と交流するなど、光陰正に矢の如くであった。」（能勢（哲）[2007] 133-134 頁）

こうして公刊された本書の趣旨について、能勢先生ご自身次のように記されている。

「本書は、J. R.ヒックス教授による『経済の社会的構造』第 4 版（*The Social Framework*, 4th edition, Oxford, 1971）を翻案した日本版であり、1955 年から 1970 年にいたる日本経済の社会経済的状況を取り扱っている。

ヒックス教授の書物の‘構造的’諸章（第 1～3 章、第 7～9 章、第 11～13 章）は、日本経済にかかわる例証および統計を除いて、ほとんどそのまま残されている。第 6、10、14 章についても同じことがいえる。しかし、第 16 章および第 18 章については、広範な変更が行われた。すなわち、第 16 章は、戦前期日本の国民所得および経済成長の簡単なサーベイを含み、第 18 章では、民間企業部門の所得分配についての説明が与えられている。第 4 章においては、東洋および西洋諸国の人口とならんで、過去と現在の日本の人口がイギリス版の対応する章におけると同じ仕方で取り扱われている。

…（中略）…私が希望するのは、この仕事が、そもそもヒックス教授の手ではイギリス経済に対してのみ応用された社会会計的方法の諸原理が、いかにすれば国際的にも応用しうるか、を示す証左となることである。今日、社会会計の研究に利用することができ、しかも信頼に値する情報の量が増加しつつあるのだから、他の研究者たちもまた、この方法をおのおの自国に応用しようとする刺激を受けているであろう。…（中略）…私は、本書『日本経済の構造』が、こうした国際化の次元において、さらに新しく寄与することを希望している。」（J. R. Hicks and Nosse 著・酒井正三郎監訳・山本有造訳 [1976] ix - x 頁）

また、本書に対して、小西先生による次の紹介がある。

「本書では、社会会計体系の基礎概念は、J. R. Hicks の原書が、そのまま用いられ、例示とか統計は日本の数値によって置き換えられている。イギリス経済を対象に書かれた原書を日本経済へ適用するに当たっての細心の注意を払われたのが能勢先生である。

…（中略）…

本書は、このようにして J. R. Hicks の原書の大要を維持し、社会会計という手法によって示された数値から日本経済の特色の分析を試みようとするものである。このように、

本書は元来社会会計の手法によるマクロ・エコノミックスの概説を目指したものであり、日本経済論だけを目標としたものではない。J. R. Hicks の原書が公けにされた時に、このタイプの接近を日本に適用しようと思いついた人は少なくなかったようであり、実際になんらかの形をそれで実現した試みもある。しかし、この試みを理想的に行なうためには、原著者と日本の社会会計の専門家の協力を待たなければならなかった。その意味で、本書の出現はたいへん望ましいものであり、社会会計の基礎知識の習得のためばかりではなく、日本経済分析の発展のためにも大きな寄与をするであろうと評価される所以である。」（小西［1990］98 頁）

[『経済会計の発展―会計思考の新展開―』同文舘、1990 年]

社会会計と企業会計の交流が、日本会計研究学会レベルではじめて取り組まれたのは、昭和 43 年 6 月に結成された日本会計研究学会・スタディ・グループ「企業会計と社会会計」である。その研究成果をまとめ公刊された『企業会計と社会会計』において、

「このスタディ・グループの研究目標を、もっぱら、会計学的研究の一環として社会会計をとりあげること自体の意義を明らかにするところにおいた。すなわち、第一に、社会会計は会計学に対していかなるインパクトを与えたか、第二に、こうしたインパクトによって会計学的研究にいかなる積極的方向が付加されたか、を現段階的に整理してみること」（合崎・能勢（信）［1971］「序」1 頁）

としている。

その後 20 年近くを経て 1986（昭和 61）年度から 1987（昭和 62）年度の 2 年間、能勢先生を研究代表者とし、「経済会計の発展と企業会計への適用の研究」をテーマとして、文部省科学研究費補助金（総合研究 A）を受け共同研究が行なわれた。その研究成果として公刊されたのが、本著書である。本著書の特徴を、能勢先生ご自身、次のように記されている。

「会計思考にかぎらず理論は時代と社会によって進化して行く。改訂された現行 SNA の刊行とほぼ同時期に、経済成長を至上とする風潮にたいして反省が現われ、一連の社会報告作りの試みが始まった。社会会計は、市場試向の経済会計の発展と並行して、新たな分野を測定する方向に向かった。そしてそこでは公害防除計算や福祉試向計算、時間予算などが検討され、他方、企業会計では企業社会会計という分野が研究され始めたからである。この面では、企業会計と社会会計のリンクが実現する事例が出て来た。

…（中略）…

社会会計の研究グループの大半は、合崎先生を中心として企業社会会計、環境汚染の研究、さらに地域生態会計まで研究の活動範囲を拡げた。他方、現行 SNA は、刊行後の 20 年間に概念のいくつかの古くかつ新しい問題や、各国の実施面の問題のほかに、1970 年代以後現われたインフレーションの経済会計の取扱いに遭遇している。…（中略）…

本書は、二年間の共同研究とはいえ実はこうした地味な研究のつみ重ねの上に成り立っている。経済会計プロパーの書物とりわけ国民経済計算の著書は、少なくない。また企業社会会計の書物も同様である。本書の特徴は、この両者とことなり、問題を会計思考の新しい展開として捉え、とりわけ企業会計のフロンティアの積極的な拡大を経済会計の視座から行うことにある。」（能勢信子教授退官記念論文集刊行委員会編［1990］「はしがき」2 頁）

こうして社会会計と企業会計の相互交流の歴史は刻まれているが、能勢先生の捉える社会会計でいえば、直截な交流は現在さほど多くはないように窺える。両者の最初の交流の成果である『企業会計と社会会計』の序において、

「端的にいえば、多くの会計学徒が企業の枠から脱皮して進んで社会会計をその研究領域にうけいれるまでには、まだまだかなりの時間を要するであろう。その道はけわしく、なお遠い、といわざるをえない。」（合崎・能勢［1971］序 2-3 頁）

との言は、今なおの感があるのかもしれない。

しかし、能勢先生が、その道を見事に拓かれ、多方面にインパクトを与え、大きな足跡を残されたことは、確かである。

[『家族経済学』有斐閣、1963 年]

能勢先生の研究の拡がりは、身近な家庭生活にも鋭く及んで本書の公刊となっているが、「その初版が著わされた昭和 38 年では、経済学者が著わした先駆的な書物であったといっても過言ではない」（小西［1990］96 頁）とともに「大いに高い評価を博している」（小西［1990］97 頁）と評されている。

本書の序文は、能勢先生の恩師新庄先生の筆であり、次のように恩愛あふれるものである。

「『家族経済学』の著者としての十分な資格を備えるに至った・・・・・二人の女性の長き協力と苦心によって本書が上梓される日を迎えたことは、著者にとってのよろこびはもとよりとして、本書の出版に機縁を与えた私としても、ひそかに誇りとするものを感ぜざるをえない。

本書は、かようにして二人の著者の思索と体験を基礎として文字どおり苦心の協働によるユニークな内容のものとなり、家族経済学の一つの体系がここに試作されたのである。…（中略）…

著者は、従来の二つの型の家族経済学を検討することによって『新しい家族経済学』が、少なくとも次の諸点を内容とすべきであると考えた。

一、家族経済と全体経済は、いかなる変遷を経て現在のごとき社会的関係に至ったか。

二、現代の資本主義社会において、国民経済の循環構造と家族経済との関係はいかなるものか。

三、景気変動および経済成長は何故起り、家族経済がこれによっていかなる影響を受けるか。
四、国家のまた地方の財政――課税、公債発行、財政支出の如何が、家族経済に対してどのような関係をもつか。
五、家族経済、とくに日本の生活水準はいかに推移し、国際的にいかなる現状にあるか。
六、家族経済の福祉を向上させるために、いかなる努力がなされて来たか、また今後、婦人としていかなる目標と手段を選ぶべきであるか。
…（中略）…以上のような構成によって、能勢、小玉両君の意図は、本書によって十分に達せられたといいうるのであり、私は両君の努力に対して深く敬意を表するとともに、その成功を祝したい。本書は女子大学の『家族経済学』の教科書たるにとどまらず、大学における経済学概論の教材としても立派に役立つものと信じている。」（新庄［1963］「序」1-5 頁）

そして、共著者の小玉佐智子先生による次のような、生き生きとしたコメントがある。
「能勢先生は、『家族経済学』のプラン作りや執筆がとても楽しそうで、特に第 7 章『家族経済と福祉の向上』を短時間に書き上げられ、私に目を通すように原稿を頂いた。自由闊達な筆致で分り易く、しかも広い学識が随所に輝いていて、私は圧倒される思いであった。」（能勢（哲）［2000］21 頁）

③ 研究業績の再結晶

能勢先生の没後わずか半年後に相次いで、4 著作が哲也先生の編集により刊行されている。能勢先生の長年にわたる論稿から選び出され類別されて、その 4 著作として編まれているのであり、それぞれのはしがきの要旨と「初出一覧」を、以下にまとめて示したい。ここに、哲也先生と相携えて歩まれた研究の軌跡を見る思いである。

[『企業会計の経済学』 アロエ印刷、1999 年]

「本書は、著者が、企業会計への経済学的接近を試みたもののうち、その代表的な論稿を選んで一遍としたものである。

著者の関心は、企業会計をミクロ経済会計として捉えることによって、企業の多面的な経済行動と会計との関連を明らかにすると共に、その社会経済的意義をも問わんとすることにある。

このため、第Ⅰ部では、マクロ経済会計である社会会計の分析方法の、企業会計への導入の可能性とその意義を考察する。これを承けて第Ⅱ部では、企業会計に用いられる諸概念が、それぞれ企業の経済活動の中で、どのような意味をもつかを検討する。そして、これらの諸概念は、究極のところ、企業所得と資本価値の確定に関連すると考えても過言ではないが、第Ⅲ部においては、特に最近の関心である、貨幣価値変動下の、動

的企業会計の準則と勘定システムを、マクロの社会会計としても統合可能な形で構想している。」（能勢（哲）[1999a]「はしがき」ｉ頁）

初出一覧

第１章	社会会計と企業会計の同型性	『會計』80（5）	（1961）
第２章	企業会計と社会会計	日本会計学会『近代会計学の展開』（黒澤清先生還暦記念論文集）森山書店	（1963）
第３章	所得会計の経済学的考察	山下勝治編『所得会計論』（渡辺進先生還暦記念論文集）中央経済社	（1964）
第４章	使用者費用と資本消費	『企業経營研究年報』5	（1955）
第５章	成長経済と減価償却	『企業経營研究年報』7	（1957）
第６章	特別償却の経済的効果	『國民經濟雑誌』96（1）	（1957）
第７章	加速償却の機能と効果	『経済経営研究年報』13（2）	（1963）
第８章	累積費用の概念と測定	『國民經濟雑誌』113（3）	（1966）
第９章	インフレーション会計への経済学的接近	『國民經濟雑誌』101（4）	（1960）
第 10 章	インフレーションの社会会計再論	『経済経營研究年報』37（1・2）	（1988）
第 11 章	大都市圏住宅地地価インフレーションと地域資本調整勘定	『國民經濟雑誌』157（2）	（1988）

[『社会会計の構造と発展』 六甲出版、1999 年]

「本書の目的は、国民経済計算の基礎となる、社会会計の原理と構造を解明し、論点と問題点を考察すると共に、その将来の方向を探ろうとするところにある。また、著者は、新 SNA の公表以前に『社会会計論』（1961 年）を刊行したが、本書はそれ以後の議論に基づく、謂わば『第Ⅱ社会会計論』をも意図するものである。

このために全編は 3 部から成り、第Ⅰ部では、戦後 50 年に亘る社会会計の発展のなかで、その理論・構造がいかに進展してきたか、またその各段階で問題とした点がどのように解決されたかを跡付けると共に、現行 SNA を中心とするシステムの今後の展開の糸口を見出そうとする。そして第Ⅱ部で扱うのは、上の社会会計システムを、一貫して間接的に支える原理についての詳論である。スクリーン勘定の役割と機能などが、ここで検討される。最後に第Ⅲ部では、とくに 80 年代以後に登場した多面的な政策課題について、社会会計がどのように対応し整備されたか、その問題点はどこにあるかを見たのち、今後の発展の方向を示唆することを試みる。」（能勢（哲）[1999b]「はしがき」ｉ-ⅱ頁）

初出一覧

第１章	社会会計の理論構造	『大阪経大論集』84 （大北文次郎先生追悼論文集）	（1971）
第２章	最近における社会システムの潮流と問題点	『経済経営研究年報』26（2）	（1976）
第３章	新 SNA の構造と問題点	『産業経理』40（6）	（1980）
第４章	新 SNA10 年の論点と続く 10 年の課題	『経済経営研究年報』33（1・2）	（1983）
第５章	市場勘定＝取引カテゴリー勘定の構造－社会会計における古典派的接近―	『國民經濟雑誌』117（4）	（1968）
第６章	資金循環分析の理論と形態	『國民經濟雑誌』109（5）	（1964）
第７章	社会会計の統合問題再論	『経済経営研究年報』18（2）	（1968）
第８章	国民経済計算における二分法の問題	『経済経営研究年報』35（2）	（1985）
第９章	国民経済計算への社会的挑戦	『國民經濟雑誌』144（4）	（1981）
第 10 章	発展過程分析の用具としての SAM システム：構造と問題点	『國民經濟雑誌』140（5）	（1979）
第 11 章	インフレーションの社会会計	『國民經濟雑誌』160（6）	（1989）
第 12 章	国際比較の方法論の現状と方向	『経済情報学論集』2	（1992）

［『非市場活動の国民経済計算－教育・福祉・環境の収支バランス－』 同文舘出版、1999 年］

「市場評価の難しい非市場活動の計算には、2 つの点で、国民経済計算の原理を超える考え方を導入しなければならない。第 1 に、市場価値基準に代って、そのアウトプット（成果、便益、目標、達成度など）について推定可能な社会的指標を設定することであり、それとバランスするインプット（費用、必要額、手段など）についても非経済的選択を余儀なくされる。第 2 に、その指標や必要コストの背景には、人口、時間、社会環境等の社会的要因を考慮すべきことである。

この故に筆者は、社会的要因を導入する国民経済計算という意味で、主題のシステムを含む成熟した社会会計を、『社会経済計算』と名付けている。その意図は、ヒックスの言う“価値の理論としての社会会計”を目指そうとするものである。

そこで本書の意図は、上述の関心と問題の背景のもとに、政府活動そのものと、教育、社会福祉および環境（汚染）の分野を対象として、これらの非市場活動のマクロ的な影響さらには経済部門への準マクロ的な効果をいかに計算体系として組立てうるか、その論拠と枠組みを明らかにすると共に、問題点と将来への解決の方向を探ることにある。」（能勢（哲）[1999c]「はしがき」ⅰ-ⅱ頁）

初出一覧

第１章	社会人口統計の新しい枠組	『國民經濟雑誌』143（5）	（1981）
第２章	非市場的活動の社会勘定	『國民經濟雑誌』134（2）	（1976）
第３章	政府勘定の改訂と問題点	『経済経営研究年報』17（1）	（1966）
第４章	国民経済計算における政府生産物	『國民經濟雑誌』153（3）	（1986）
第５章	社会会計における人的資本形成	『経済経営研究年報』27（1・2）	（1977）
第６章	教育経済計算の累型	『経済経営研究年報』28（2）	（1979）
第７章	社会福祉勘定の現状と問題点	『國民經濟雑誌』137（4）	（1978）
第８章	非市場活動計算と時間予算	『経済経営研究年報』32（2）	（1982）
第９章	マクロ環境会計の意図と方法	『産業経理』37（2）	（1977）
第 10 章	公害防除支出勘定の意図と問題点	『産業経理』38（8）	（1978）
第 11 章	環境汚染の社会会計	『経済経営研究年報』29（2）	（1979）

本書については、桂明政先生による次のような書評が表されている。

「本書は、70 年代の成長ひずみ現象を眼前にして豊かさや環境問題といった社会経済問題の高まりとともに登場してきた教育、環境、福祉等のソシオエコノミックな分野の社会会計、あるいは社会経済計算について包括的、かつ深く検討を行っている我が国で唯一といってよい研究書であるということである。次に、本書で取り上げられているソシオエコノミックな社会会計は、教育、環境、福祉等のソシオエコノミックな分野の計量が SNA をはじめとする現行の公式国民経済計算の慣行に抵触することから（例えば教育支出について国民経済計算では投資ではなく消費として取り扱われる、また企業の公害防除支出は国民経済計算では中間投入ゆえに明示されない等)、あるいはこれらのソシオエコノミックな分野は一般的には市場価格を持たないことから SNA をはじめとする現行の公式国民経済計算の方法論で処理することができず、それから独立した社会会計として展開せざるをえなかったという特徴をもっている。しかし、現在では SNA をはじめとする現行の公式国民経済計算の慣行に抵触するこれらソシオエコノミックな分野の社会会計は、SNA の環境勘定である SEEA のように SNA のサテライト勘定として展開する方向に進みつつある。…（中略）…

本稿は･････70 年代の成長ひずみ現象のたかまりとともに登場してきた揺籃期のソシオエコノミックな社会会計を着実に、幅広くフォローし、深く内容を検討している貴重な著作であることが分かる。しかし、現在では本書でとりあげられたソシオエコノミックな社会会計のうち、環境会計のように、数段進歩、発展しているソシオエコノミックな社会会計の分野がある一方、MEW、NNW のような社会福祉勘定にみられるようにそれ以後の展開が緩慢な分野もみられ、今後は能勢先生の揺籃期のソシオエコノミックな

社会会計に対する検討を通じて獲得された知見（例えば時間予算の研究成果等）をいかして、特に後者の分野のソシオエコノミックな社会会計を発展させていくことが望まれる。」（桂 [2000] 58-59, 62 頁）

[『日本経済の社会会計分析』 有斐閣学術センター、1999 年]

「本書は、著者が、社会会計の手法を用いて、日本経済の構図を描き出そうとしたものを選んで、一輯としたものである。

ここで本書での分析を貫く考え方は、特定の仮説を数字で以て検証するというよく用いられる方法とは異なり、あくまでまず現実の数字を以て語らしめ、徒らに勇み足の推論を行わない、ということである。つまり、イギリスの古典学派以来の伝統である経験主義（Empiricism）の立場に拠っているわけである。このため、本書では、社会会計の基礎概念（生産・支出・資本の諸勘定、及び労働・資本のバランス）とその形式を援用し乍らも、何よりナマの数値を以て現実を解剖する手法をとっている。

また特に、本書での関心は、国民所得とその成長（第 1 章～第 4 章）および平等と不平等（第 5 章～第 8 章）の問題にあり、そこで必要に応じて、期間比較と国際比較分析を行うことによって、日本経済の時間・空間的特徴を画き出すことを意図している。」（能勢（哲）[1999d]「はしがき」 i 頁）

初出一覧

第１章	社会会計アプローチによる明治以降日本経済の分析	『國民經濟雑誌』119（4）	（1969）
第２章	社会会計アプローチによる1995 以降日本経済の分析	『経済経営研究年報』22（2）	（1972）
第３章	国民支出の構造変化—昭和 30 年国民勘定と昭和45 年国民勘定の比較分析－	『経済経営研究年報』24（2）	（1974）
第４章	社会勘定群による成長期日本経済の分析	『國民經濟雑誌』131（5）	（1975）
第５章	発展期日本経済における産業別・企業格差の測定	『國民經濟雑誌』103（2）	（1961）
第６章	家計セクターにおける移転取引の分析	『経済経営研究年報』21（1）	（1971）
第７章	個人セクターの所得分布	『國民經濟雑誌』108（5）	（1973）
第８章	大都市圏の住宅地価分析のFSDS—ストック分析への試論的アプローチ—	『経済経営研究年報』36（2）	（1987）

上記を含む、能勢先生の著書・論文等を『国民経済雑誌』所収の著作目録の分類に基づき、『経済学研究』所収の著作目録および国立国会図書館、国立情報学研究所等のデータベースで確認した結果をくわえて一覧にまとめると、次頁以降の図表Ⅴ-2-2のとおりとなる。なお、論文タイトルは国立情報学研究所の表記にあわせている。

図表Ⅴ-2-2　能勢信子先生著作目録

単著・共著

番号	西暦	和暦	年	月	著書名	出版社	共著／単著等	共著者	備考
1	1961	昭和	36	12	社会会計論	白桃書房	単著		
2	1963	昭和	38	4	家族経済学	有斐閣	共著	小玉佐智子	
3	1971	昭和	46	1	企業会計と社会会計	森山書店	共編	合崎堅二	
4	1974	昭和	49		*The Social Framework of the Japanese Economy: An Intoroduction to Economics*	Oxford University Press	共著	Hicks, J. R.	序文(Preface)の記載は3月。
5	1981	昭和	56	2	家族経済学：女性の社会的英知を養う	有斐閣	共著	小玉佐智子	有斐閣選書
6	1990	平成	2	3	経済会計の発展：会計思考の新展開	同文舘	編著	河野正男・矢部浩祥・上田俊昭・原田富士雄・関口秀子・小口好昭・中村宣一郎・小関誠三・玉田啓八・合崎賢二	
7	1999	平成	11	3	企業会計の経済学	アロエ印刷	単著		
8	1999	平成	11	6	社会会計の構造と発展	六甲出版	単著		
9	1999	平成	11	9	非市場活動の国民経済計算：教育・福祉・環境の収支バランス	同文舘	単著		
10	1999	平成	11	12	日本経済の社会会計分析	有斐閣学術セン	単著		

分担執筆書

番号	西暦	和暦	年	月	タイトル	編者等	著書名	出版社
1	1953	昭和	28	7	F.S.ブレイ著　社会会計と国民経済における企業部門	神戸大学経済経営研究所編	『経済原理の諸問題』(経済経営研究年報(神戸大学経済経営研究所)Ⅲの市販本)	森山書店
2	1958	昭和	33	1	社会会計による国際比較とその問題点	新庄博編	『貨幣経済と経済構造』(宮田喜代蔵博士記念論文集)	同文舘
3	1958	昭和	33	5	社会会計論の諸問題	横浜市立大学商学部会計学研究室編	『近代会計学ハンドブック』	同文舘
4	1960	昭和	35	1	国民資金表の構造について	柴田銀次郎博士還暦記念編集委員編	『柴田銀次郎博士還暦記念編集』	柴田銀次郎博士還暦記念編集委員会

分担執筆書

番号	西暦	和暦	年	月	タイトル	編者等	著書名	出版社
5	1960	昭和	35	3	社会会計の課題--特にその形式的側面	山下勝治・古林喜楽編	『会計学の発展と課題』	中央経済社
6	1963	昭和	38	3	企業会計と社会会計	日本会計学会	『近代会計学の展開』(黒澤清先生還暦記念論文集)	森山書店
7	1964	昭和	39	8	所得会計の経済学的考察	山下勝治編	『所得会計論』(渡辺進先生	中央経済社
8	1967	昭和	41	12	社会会計の報告	神戸大学会計研究室	『利潤会計と計画会計：会計学の現在と将来』(山下勝治先生還暦記念論文集)	千倉書房
9	1968	昭和	42	1	社会会計論の諸問題	横浜市立大学会計学会計学研究室	『現代会計学体系Ⅲ』	同文舘
10	1968	昭和	42	9	国民所得会計	黒澤清編	『財務会計論』(近代会計学体系Ⅴ)	中央経済社
11	1971	昭和	45	6	財務諸表の社会会計的応用	神戸大学会計学研究室編	『近代報告会計の基礎と発展』(久保田音二郎先生還暦記念論文集)	同文館出版
12	1974	昭和	47	5	経済計算と貨幣	則武保夫・藤田正寛編	『現代金融論の新傾向』	東洋経済新報社
13	1980	昭和	53	12	社会会計の体系	黒澤清編	『社会会計』(体系近代会計学Ⅻ)	中央経済社
14	1986	昭和	61	2	社会会計の誕生	合崎堅二編	『経済会計：その軌跡と展望』	中央経済社

論文（邦文）

番号	西暦	和暦	年	月	タイトル	雑誌名	巻号	備考
1	1953	昭和	28	3	F.S.ブレイ著「社会会計と国民経済における企業部門」	企業経営研究年報	3	
2	1954	昭和	29	3	社會會計論の基本的性格	企業経營研究年報	4	
3	1954	昭和	29	5	國民經濟會計と部門分割：社会会計論の一方向	國民經濟雜誌	89(5)	
4	1955	昭和	30	2	使用者費用と資本消費	企業経營研究年報	5	
5	1956	昭和	31	3	社会会計と勘定設計の理論	企業経營研究年報	6	
6	1956	昭和	31	3	社會會計の方法について	國民經濟雜誌	93(3)	
7	1956	昭和	31	6	社会会計と企業会計	産業經理	16(6)	

論文（邦文）

番号	西暦	和暦	年	月	タイトル	雑誌名	巻号	備考
8	1956	昭和	31	11	企業利益の分配基準について	産業經理	16(11)	
9	1957	昭和	32	3	社会会計と企業部門	企業経営研究年報	7	
10	1957	昭和	32	5	減価償却と成長模型	産業經理	17(5)	
11	1957	昭和	32	7	特別償却の経済的効果	國民經濟雜誌	96(1)	
12	1957	昭和	32	11	減価償却模型について	企業会計	9(12)	
13	1958	昭和	33	3	加速償却効果について	企業経営研究年報	8	
14	1958	昭和	33	5	国民資金会計の構造	産業經理	18(5)	
15	1958	昭和	33	7	社会会計、国民所得	企業会計	10(8)	
16	1958	昭和	33	9	企業会計における社会会計原理導入の意義	國民經濟雜誌	98(3)	
17	1958	昭和	33	12	付加価値･国民資金会計	企業会計	10(14)	
18	1959	昭和	34	3	社会会計と企業会計の連関について	企業経営研究年報	9	
19	1959	昭和	34	3	社会会計の形式的特徴	産業經理	19(3)	
20	1959	昭和	34	7	国富･国民貸借対照表	企業会計	11(9)	
21	1959	昭和	34	12	国際比較の具体化とその観点：社会会計体系の国際化の側面	國民經濟雜誌	100(6)	百巻記念號 經營學篇:会計学
22	1960	昭和	35	2	国民資金表の構造について	企業経営研究年報	10	
23	1960	昭和	35	3	電子計算機による国民経済予算の作成	経営機械化叢書	3	日下部知子と共著 経営事務機械化の諸問題
24	1960	昭和	35	4	貨幣価値変動会計への経済学的接近	産業經理	20(4)	
25	1960	昭和	35	4	インフレーション会計への経済学的接近	國民經濟雜誌	101(4)	
26	1960	昭和	35	11	ケインズの費用範疇	産業經理	20(11)	
27	1960	昭和	35	12	経済会計-会計ターミノロジー	企業会計	12(16)	能勢信子他
28	1961	昭和	36	1	発展期日本経済における産業別・企業格差の測定	国民経済雑誌	103(2)	
29	1961	昭和	36	3	社会会計の視点	企業経営研究年報	11	
30	1961	昭和	36	3	社会会計企業部門における標本調査法の適用について	経営機械化叢書	4	経営機械化と経営機構
31	1961	昭和	36	5	同型性論に関する考察	國民經濟雜誌	103(5)	
32	1961	昭和	36	5	社会会計と企業会計の同型性について	産業經理	21(5)	
33	1961	昭和	36	7	経済会計-会計ターミノロジー	企業会計	13(9)	能勢信子他
34	1961	昭和	36	11	社会会計と企業会計の同型性に関する考察	會計	80(5)	
35	1961	昭和	36	11	経済学と会計学との間	企業会計	13(13)	
36	1961	昭和	36	11	経済会計-会計ターミノロジー	企業会計	13(14)	能勢信子他
37	1962	昭和	37	3	国民所得会計への一試論：生産的労働概念を国民所得分析の基調とする意義	企業経営研究年報	12	

論文（邦文）

番号	西暦	和暦	年	月	タイトル	雑誌名	巻号	備考
38	1962	昭和	37	6	社会会計における綜合問題について	國民經濟雜誌	105(6)	
39	1962	昭和	37	6	社会会計における綜合化の意義	産業經理	22(6)	
40	1962	昭和	37	7	発展期日本経済における主導産業の格差の測定（経営機械化とシステム研究）	経営機械化叢書	5	
41	1962	昭和	37	9	社会会計における二つの論争	企業会計	14(11)	
42	1962	昭和	37	10	社会会計の現状と発展方向	國民經濟雜誌	106（4）	
43	1963	昭和	38	10	発展期日本経済における五大産業の格差の測定	経営機械化叢書	6	EDPSの発展と経営上の課題
44	1963	昭和	38	3	加速償却の機能と効果	経済経営研究年報	13(2)	
45	1963	昭和	38	5	国民経済会計における綜合問題	國民經濟雜誌	107(5)	
46	1963	昭和	38	11	社会会計の綜合化に対する考察	経済経営研究年報	14(1)	
47	1963	昭和	38	7	社会会計における資本消費概念	會計	84(1)	
48	1963	昭和	38	7	社会会計における資本維持概念	産業經理	23(7)	
49	1964	昭和	39	3	経済会計への現実認識-経済会計と会計学	企業会計	16(3)	
50	1964	昭和	39	5	資金循環会計の理論と形態	國民經濟雜誌	109(5)	
51	1966	昭和	41	11	政府勘定の改訂と問題点	経済経営研究年報	17(1)	
52	1966	昭和	41	3	累積費用の概念と測定	國民經濟雜誌	113(3)	
53	1967	昭和	42	5	社会会計の綜括デザイン	國民經濟雜誌	115(5)	
54	1967	昭和	42	6	社会会計の構造-海外会計論調	企業会計	19(8)	
55	1968	昭和	43	2	社会会計における資本消費概念	産業經理	28(2)	
56	1968	昭和	43	3	社会会計の統合問題再論	経済経営研究年報	18(2)	
57	1968	昭和	43	4	市場勘定=取引カテゴリー勘定の構造：社会会計における古典派的接近	國民經濟雜誌	117(4)	
58	1968	昭和	43	6	社会会計における取引勘定の構造	會計	93(6)	
59	1968	昭和	43	12	累積費用の概念と測定	経済経営研究年報	19(1)	
60	1969	昭和	44	4	社会会計アプローチによる明治以降日本経済の分析	國民經濟雜誌	119(4)	
61	1970	昭和	45	7	家計セクターの所得分布	國民經濟雜誌	122(1)	
62	1971	昭和	46	6	家計セクターにおける移転取引の分析	経済経営研究年報	21(1)	
63	1971	昭和	46	8	青書・白書・SNA：多元的綜合社会会計の方向と意義	國民經濟雜誌	124(2)	
64	1971	昭和	46	11	社会会計の理論構造	大阪経大論集	84	
65	1973	昭和	48	1	社会会計アプローチによる1955年以降日本経済の分析	経済経営研究年報	22(2)	
66	1973	昭和	48	11	個人セクターの所得分布	國民經濟雜誌	128(5)	

論文（邦文）

番号	西暦	和暦	年	月	タイトル	雑誌名	巻号	備考
67	1974	昭和	49	8	国民支出の構造変化：昭和30年国民勘定と昭和45年国民勘定の比較分析	経済経営研究年報	24(2)	
68	1974	昭和	49	11	ヒックス教授のプロフィール	産業経理	34(12)	学問と人
69	1975	昭和	50	3	経営経済情報制御分析システムのデータ・バンクの統計資料について	経済経営研究叢書.経営機械化シリーズ	16	経営･経 済情報分析システムの新展開
70	1975	昭和	50	5	社会勘定群による成長期日本経済の分析	國民經濟雜誌	131(5)	
71	1975	昭和	50	10	ヒックシャン・フォルマによる所得・支出勘定の国際比較	経済経営研究年報	25(2)	
72	1976	昭和	51	3	最近における社会会計システムの潮流と問題点	経済経営研究年報	26(2)	
73	1976	昭和	51	5	会計と経済 (会計学の学び方--会計学の方法とその拡がり)	企業会計	28(6)	会計とその周辺
74	1976	昭和	51	8	非市場的活動の社会勘定	國民經濟雜誌	134(2)	
75	1976	昭和	51	11	会計責任に関する研究--中間報告要旨(スタディ・グループ報告)	会計	110(5)	
76	1977	昭和	52	3	社会会計における人的資本形成	経済経営研究年報	27(1/2)	
77	1977	昭和	52	2	マクロ環境会計の意図と方法	産業経理	37(2)	
78	1978	昭和	53	3	ノルウェーにおけるミクロデータ・ファイルシステムの現状と問題点	経済経営研究叢書.経営機械化シリーズ	18	経営機械化研究の展開
79	1978	昭和	53	4	社会福祉勘定の現状と問題点	國民經濟雜誌	137(4)	
80	1978	昭和	53	5	社会福祉勘定の意図と問題点	會計	113(5)	
81	1978	昭和	53	8	公害防除支出勘定の意義と問題点	産業経理	38(8)	
82	1979	昭和	54	2	教育経済計算の類型	経済経営研究年報	28(2)	
83	1979	昭和	54	11	環境汚染の社会会計	経済経営研究年報	29(2)	
84	1979	昭和	54	11	発展過程分析用具としてのSAMシステム	國民經濟雜誌	140(5)	
85	1980	昭和	55	6	新SNAの構造と問題点	産業経理	40(6)	
86	1981	昭和	56	3	発展過程分析の用具としてのSAMシステム：構造と問題点	経済経営研究年報	30(2)	
87	1981	昭和	56	5	社会人口統計の新しい枠組	國民經濟雜誌	143(5)	
88	1981	昭和	56	10	国民経済計算への社会的挑戦	國民經濟雜誌	144（4）	
89	1982	昭和	57	7	非市場活動計算と時間予算	経済経営研究年報	32(2)	
90	1982	昭和	57	8	SNA10年の論点	國民經濟雜誌	146(2)	
91	1983	昭和	58	3	新SNA10年の論点と続く10年の課題	経済経営研究年報	33(1/2)	

論文（邦文）

番号	西暦	和暦	年	月	タイトル	雑誌名	巻号	備考
92	1984	昭和	59	8	インフレーションの社会会計：現状と問題点	経済経営研究年報	34(2)	
93	1984	昭和	59	1	インフレーションの社会会計	國民經濟雜誌	149(1)	
94	1984	昭和	59	12	インフレ-ションの社会会計	会計	126(6)	
95	1985	昭和	60	1	会計学と経済学--社会会計の新展開と企業会計	企業会計	37(1)	昭和60年代の会計理論をもとめて--隣接諸学は会計学に何を示唆するか
96	1985	昭和	60	9	国民経済計算における二分法の問題点	経済経営研究年報	35(2)	
97	1986	昭和	61	3	国民経済計算における政府生産物	國民經濟雜誌	153(3)	
98	1986	昭和	61	8	インフレ会計データファイルの作成：企業比較財務データベース研究	経済経営研究叢書.経営機械化シリーズ	19	関口秀子と共著 経営情報処理の研究
99	1987	昭和	62	3	大都市圏の住宅地価格分析のFSDS：試論的アプローチ	経済経営研究年報	36(2)	
100	1988	昭和	63	3	インフレーションの社会会計再論	経済経営研究年報	37(1/2)	
101	1988	昭和	63	2	大都市圏宅地地価インフレーションと地域資本調整勘定	國民經濟雜誌	157(2)	
102	1988	昭和	63	9	大都市圏の宅地地価上昇とキャピタルゲイン：資本調整勘定からの発見	生活経済学会年報	4	
103	1989	平成	1	3	地域資本調整勘定とその分析的利用	経済経営研究年報	38(1/2)	
104	1989	平成	1	12	インフレーションの社会会計：現状と展望	國民經濟雜誌	160(6)	
105	1992	平成	4	3	<論文>国際比較の方法論の現状と方向	経済情報学論集	2	

論文（英文）

番号	西暦	和暦	年	月	タイトル	雑誌名	巻号	備考
1	1953	昭和	28	12	A Research of Wage Income in Post-War Japan	Kobe economic & business review	1	
2	1954	昭和	29	3	On the Structure of the National Income Distribution in Japan	Kobe economic & business review	2	
3	1956	昭和	31		On the Model-Building for Social Accounting Design	Kobe economic & business review	3	発行月の記載なし
4	1957	昭和	32	10	More on the Structure of National Income Distribution in Japan	Kobe economic & business review	4	
5	1958	昭和	33		On the Effect of Accelerated Amortization for Tax Purposes	Kobe economic & business review	5	発行月の記載なし

論文（英文）

番号	西暦	和暦	年	月	タイトル	雑誌名	巻号	備考
6	1959	昭和	34	11	On the Application of the Social Accounting Principle to Business Accounting	Kobe economic & business review	6	
7	1960	昭和	35		Some Reflections on Inter-Comparability of Social Accounting	Kobe economic & business review	7	発行月の記載なし
8	1962	昭和	37		National Income Concepts：Reconsidered	Kobe economic & business review	9	発行月の記載なし
9	1963	昭和	38		Social Accounting as an Instrument of Policy	Kobe economic & business review	10	発行月の記載なし
10	1964	昭和	39		On Integration in Economic Accounting	Kobe economic & business review	11	発行月の記載なし
11	1965	昭和	40		A Note on Economic Accounting for Government Sector	Kobe economic & business review	12	発行月の記載なし
12	1966	昭和	41		Cumulated Cost Ratios for the Japanese Economy in 1955	Kobe economic & business review	13	発行月の記載なし
13	1967	昭和	42		Cumulated Cost Ratios for the ECAFE Countries	Kobe economic & business review	14	発行月の記載なし
14	1968	昭和	43		A Note on the Redistribution of Profits	Kobe economic & business review	15	発行月の記載なし
15	1969	昭和	44		Functions of Screen Account	Kobe economic & business review	16	発行月の記載なし
16	1970	昭和	45		Japanese Economic Growth since the Meiji Restoration：A Social Accounting Approach	Kobe economic & business review	17	発行月の記載なし
17	1975	昭和	50		National Income and Expenditure at Factor Cost in Japan 1955-1970：A Macro-Accounting for Growing Economy	Kobe economic & business review	21	発行月の記載なし
18	1977	昭和	52		Alternative Approaches to the Accounting for Education	Kobe economic & business review	23	発行月の記載なし
19	1981	昭和	56		Accounting Systems of Non-Market Oriented Activities	Kobe economic & business review	27	発行月の記載なし
20	1988	昭和	63	4	A Reconciliation Account for Analying Hyperinflation in Land Price	Discussion Paper Series (English)	13	
21	1989	平成	1		Recent Inflation of Land Prices in Metropolitan Areas of Japan：A Case Study of Regional Accounting	Kobe economic & business review	34	発行月の記載なし

(3) インタビュー調査結果

能勢信子先生に関して、能勢先生のご息女である廣野桂子先生、能勢先生の若い頃の同僚であった小林哲夫先生、そして能勢先生の 40 代後半からの同僚であった山地秀俊[64]先生、能勢先生が姫路獨協大学に移られた後、親交のあった小津稚加子[65]先生にインタビューを行った。インタビュー日程は、以下のとおりである。廣野先生には、2015（平成 27）年 4 月 6 日に、日本大学にある先生の研究室にてインタビュー調査を行った。インタビュアーは井原理代、兵頭和花子、津村怜花の 3 名である。小林先生には、同年 5 月 1 日に先生のご自宅にてインタビューに応じていただいた。インタビュアーは井原理代、兵頭和花子、津村怜花の 3 名である。そして、山地先生には同年 6 月 8 日に神戸大学にある先生の研究室にてインタビュー調査を行った。インタビュアーは井原理代、兵頭和花子、澤登千恵、津村怜花の 4 名である。また、小津先生には同年 7 月 26 日に高松大学においてインタビュー調査に応じていただいた。インタビュアーは井原理代、兵頭和花子、津村怜花の 3 名である。これらのインタビュー調査の結果を、前述のとおり、①研究継続に対する原動力、②女性研究者としての苦労や職場での様子、③家庭と職場（神戸大学経済経営研究所）との両立への工夫や家庭での様子という 3 項目に整理してまとめると、以下のとおりとなる。

① 研究継続に対する原動力

[廣野先生インタビュー]

――女性の会計研究者としての地位を初めて築かれる中で、研究職を継続された原動力は、お嬢さまの廣野先生からご覧になって何だったと思われますか。

私は母親としての受け止めしかないので、あまり母の研究については申し上げられないので、申し訳ないのですが、原動力や支えとしましたら、やはり父・能勢哲也を支えていきたいという気持ちだったと思います。二人の出会いは神戸大学で、今で言えば、大学・大学院の同級生です。父は財政学、母は社会会計を研究しておりましたが、二人とも最初は経済原論を学んでいました。父は若い時に、今より病弱でして、最終的には財政学会の理事にもなりましたが、なんとか支えていきたいという気持ちが母を動かしていたと私は思います。自分がなんとか頑張ろう、支えていこうという気持ちはあったと思います。

また、研究者としてのモチベーションとしては、コツコツ努力する人だったものですから、年に紀要も含めてですが、2 本は必ず論文を書くということを自分に課していました。

---

[64] 山地秀俊先生のご専門は情報ディスクロージャー論。1979（昭和 54）年に神戸大学経済経営研究所に着任され、現在も同研究所に勤務されている。

[65] 小津稚加子先生のご専門は国際企業分析。現在は九州大学に勤務されている。

[小林先生インタビュー]

――女性の会計研究者としての地位を築かれる中で、研究職を継続された原動力は、若い頃の能勢先生をご存知の先生からご覧になって何だったと思われますか。

何でしょうね。それはよく分からない。おそらく支えというのは哲也さんだと思いますけれどね。神戸大学の新庄ゼミでの同級生でしょう。そこで知り合って結婚されて、と思いますけれど。だから他の人で特にずっとサポート役に徹したという人はいないのではないかという感じがしますけれど。お互いに励ましてもらえたのだと思います。

[山地先生インタビュー]

――山地先生が能勢先生と研究所で一緒に仕事されるようになったのは、能勢先生が確固たる地位を築かれてからだと思いますが、そこまで研究職を継続された原動力は、先生からご覧になって何だったと思われますか。

能勢先生が研究所でポストに就かれた当時、勿論経営学部の会計学者の方々を意識されたと思いますがそれ以外にも、先生の研究領域の特徴上、経済学者の存在も意識しなければならなかったと思います。当時経済学部には置塩（信雄）[66]先生や則武保夫[67]先生をはじめ多くの経済学者がおられたので、そうした方々との競争を意識しなければいけないとなると、それは、良い意味で刺激になったと思います。経済学者の先生方は数理的側面にも長けておられましたからね。能勢先生も有能な方でしたが、意識したと思います。

【山地先生が 30 代か 40 代の初め頃、能勢先生や、兼担の置塩信雄先生そして研究所の先生方と撮った写真を見せてくださりながら】

置塩先生はマルクス経済学を基礎としてそれを数学的に展開されるという業績をお残しになられて、やっぱり理論経済学者では、当時著名な方だったと思っています。さらに若手の理論経済学者として、豊田（利久）[68]・新庄（浩二）[69]・足立（英之）[70]という三羽烏

[66] 置塩信雄（1927-2003）先生は、1950（昭和 25）年より 40 年間、神戸大学経済学部に勤務された。この間、1986（昭和 61）年からは経済経営研究所教授も併任されている。1990（平成 2）年に停年退官を迎えられ、神戸大学名誉教授となられた。

[67] 則武保夫（1925-2002）先生は、1950（昭和 25）年より 39 年間、神戸大学経済学部に勤務され、1989（平成元）年に停年退官を迎えられ、神戸大学名誉教授となられた。

[68] 豊田利久（1940- ）先生は、1966（昭和 41）年より 28 年間神戸大学経済学部で勤務され、1995（平成 7）年より神戸大学大学院国際協力研究科へ移り、2004（平成 16）年に停年退官を迎え、名誉教授となられた。

[69] 新庄浩二先生は、新庄博先生のご子息であり、ご専門は産業・社会政策論。2004（平成 16）年 3 月に神戸大学を退官された。

と言われた先生方がいました。また金融論では田中（金司）[71]・新庄（博）・八尾（次郎）[72]という著名な先生方がおられました。能勢先生は金融論の新庄（博）ゼミ出身ですから、能勢先生もどちらかというと、会計学のグループにいたけれども、彼らとの競争も意識して自分は経済学者だという気持ちもやっぱり強かったのかもしれません。教官食堂での食事の時でも、置塩先生あるいは経営の松田（和久）[73]先生とご一緒されて話し込む姿をよくお見かけしたように思います。あくまでもだいぶ前のことで定かではありませんが。

[小津先生インタビュー]

―――女性の会計研究者としての地位を築かれる中で、研究職を継続された原動力は、先生からご覧になって何だったと思われますか。

私が感じているのは、信子先生が大学院に入学され、研究を始められた 1952 年という時代背景が大きいと思います。戦後を知る世代で、1926 年生まれですよね。神戸空襲も経験されているかもしれない。戦後荒廃している日本の現状を見ておられて、その中で大変才能を持っていらっしゃって、信子先生だけでなく、皆さんが日本を元に戻さなければならないという使命感を持っていたと思うのですよね。それゆえに、どういう形で元に戻せるかという中で、職業としての学問の中で貢献をしようという思いがどこかにあったのだと思います。それは信子先生に限らず、その当時お勉強されていた方々は共通して持っていたと思います。それをどこで発揮するかということは、それぞれ選んでいたのだと思います。だから、本から入ってこの研究は面白いからというのではなく、とにかく日本を元に戻さなければいけないという思いがあったのではないでしょうか。すごく頭の良い秀才・才媛が集まった時に、そういう若い力や思いがあって、その中で経済学と会計学の学際的領域に出会って、国民経済計算という形で、統計的にきちんと見なければどこが日本の経済の弱点なのか、これから伸びつつあるのかを判断できないので。この後、どんどん日本は経済成長に入っていきますから、先生の研究も進んで、また出会った人もいて、少しずつ変わっていくのかなと思います。

経済学でいえばマクロですよね。経済成長論であるか経済発展論であるか、1950 年代の日本の状況を考えると、どちらにしても戦後復興からやっと戻ってきたところから国民所得をどう上げていくかなので、私は、信子先生の研究の原動力は時代背景の影響が強いと

---

[70] 足立英之（1940- ）先生のご専門は理論経済学。2004（平成 16）年 3 月に神戸大学を退官された。

[71] 田中金司（1894-1985）先生は、1919（大正 8）年より神戸高等商業学校（現神戸大学）に勤められ、1957（昭和 32）年に神戸大学を停年により退官され、名誉教授の称号を受けられた。この間、香川大学教授を併任されていた。

[72] 矢尾次郎（1916-？）先生は、1940（昭和 15）年より神戸商業大学（現神戸大学）に勤務され、1980（昭和 55）年に神戸大学を停年退官し、名誉教授となられた。この間、神戸大学経済経営研究所の教授も併任されていた。

[73] 松田和久（1924-1995）先生は、1948（昭和 23）年に神戸経済大学（現神戸大学）に勤務され、1988（昭和 63）年に神戸大学を停年により退官され、名誉教授の称号を受けられた。

思います。

② 女性研究者としての苦労や職場での様子

[廣野先生インタビュー]

――女性研究者として苦労されたことなど伺っていますか。

そうですね。当時、やはり女性研究者っていうのは、まず地位を固めることが非常に難しい時代でしたので、とにかく早く博士号を取得するということを考えておりました。そして、大学院卒業早々だったと思うのですが、本当に苦労して、かなり努力をして、早く博士号を取ったと思います。非常にそこは苦労していたという話を聞きました。やはり何かないと女性研究者というのは認めてもらえないという時代だったと思います。

また、母はコツコツ努力してきた人ですが、リスクへの感覚というのは日々、非常にあって、博士号を取ったというのも、きたるリスクに備えたという意味があったのだと思います。女性だから、もしかしたら大学から出されるかもしれないとか、そういう何か危機を持っていて、それに対応する力は非常にあったと思います。当時は就職後、停年まで大学に勤めるというわけではなかったと思います。当時は、男性であっても助手で採用されても、その中から残るのは数人であって、他の方は他の大学に移るという状態だったと思います。

[小林先生インタビュー]

――能勢先生の最初のポストが不安定だったと伺っているのですが、どうでしたか。

僕もそうですけれど、研究所では、当時は、最初からテニュアとしては採用していないと思います。会計学者からいうと、上村（久雄）[74]さん、東北に行かれてこの間、松山で亡くなられたのですけれど、上村さんもですから、3 年から 5 年ぐらいおられて移られたのですが、能勢哲也さんもそうですね。あと、武田隆二[75]さん、小野二郎[76]さん、私、いずれも途中で変わっているわけですね、学部のほうへ。助手で採用されてその後定着する人もい

[74] 上村久雄（1931-？）先生は、1955（昭和 30）年より 3 年間、神戸大学経済経営研究所に勤務された後、甲南大学を経て、1963（昭和 38）年に東北大学へ着任され、1994（平成 6）年に同大学を停年退官され、名誉教授となられた。

[75] 武田隆二（1931-2009）先生は、1957（昭和 32）年より 3 年間、神戸大学経済経営研究所助手として勤務され、1960（昭和 35）年に同大学経営学部に移り 32 年間勤務された。1992（平成 4）年には停年退官を迎え、名誉教授となられた。

[76] 小野二郎（1931-1984）先生は、1958（昭和 33）年より約 13 年間、神戸大学経済経営研究所に勤務され、1971（昭和 46）年に同大学経営学部に配置換えとなられた。1984（昭和 59）年に 53 歳の若さで逝去された。

るし、移動する人もいるけれど、移動するほうが多かったですね

1963 年、昭和 38 年には能勢先生が経営計測研究部門[77]という組織の主任教授になっておられて、それを見る限り、地位が不安定ということはないと思います。研究所は経済と経営とに分かれていて、どっちかというと、能勢先生は経営関係のほうに属しています。

そして、『神戸大学部局史』のこの辺に能勢先生の名前が挙っています。

「また研究所における会計学研究の注目すべき特徴として、社会会計の研究があり、当時まだ数が少なかった国立大学の女性教官としても注目された能勢信子が担当した。こうした社会会計研究とコンピュータを融合させて、定道宏[78]が、実証研究を支援する統計ソフトの開発とデータ分析を行った。小西康生は、データ化の困難な質的社会特性を数値化し、そのうえで経済分析を試みている。」（神戸大学百年史編集委員会編［2005］1023 頁）

経済関係の中ではなくて、経営関係の中に属していて、少しその辺の事情は、能勢先生はどう思ったか分からないですけど、経済と経営のバランスというか、上司の渡辺進先生は、税務会計の研究者で、もともとの所得概念を問題とされていたので、能勢先生は、そのために自分が呼ばれたと思っておられたのではないですかね。

――女性研究者だからこその苦労を感じられたことはありますか。

それは感じましたよ。先生らしくさらりとですが、ベビーシッターとのお話がありましたね。

[山地先生インタビュー]

――研究所の会計グループで採用された経緯はご存知ですか。

私も学部は関西学院で小寺武四郎[79]という金融論の先生のゼミでしたが、大学院では大き

---

[77] 神戸大学経済経営研究所は、当初、国際貿易、経営機械化、経営経理の 3 研究部門が置かれていたが、これにくわえ国際金融部門、海運部門、産業労働部門、産業労働部門、産業合理化部門、国際法規並びに商慣習部門が設置予定として挙げられていた。さらに、国際経営研究部門、経営計測研究部門、国際資金研究部門、オセアニア経済研究部門が加わり、それぞれに主任教授が置かれていた。能勢先生が主任教授を務めた経営計測研究部門は、1967（昭和 42）年 6 月に増設された部門であり、情報システムならびに統計分析という、経済経営研究所の特色に根差して設置された研究部門の 1 つであった（神戸大学百年史編集委員会編［2005］1012-1014 頁）。

[78] 定道　宏（1935-）先生は、和歌山大学での勤務を経て、1971（昭和 46）年 4 月より 23 年間、神戸大学経済経営研究所に勤務され、1995（平成 7）年より停年を迎えられるまで京都大学経済学部に務められた。経済経営研究所では経営計測講座や国際産業調整講座をご担当された。

[79] 小寺武四郎（1912-2004）先生は、1939（昭和 14）年より 42 年間、関西学院大学に勤務され、1981（昭和 56）年に停年により退官し、名誉教授の称号を受けられた。

く専攻を変更して、井原先生の後輩として谷端（長）[80]ゼミを専攻いたしました。能勢先生も金融論の新庄先生の弟子ですが、研究テーマと研究所のポジションとの兼ね合いで、両者の条件を満たすべく経済学と経営学の中間的な研究を行うのならば、社会会計をやろうということになったのではないかと、あくまでも若造だった私の推測ですけれど。（能勢信子教授退官記念論文集にも）書かれていますように、「学部、研究科を通じて経済学に取り組んでこられた先生が、経済学と会計学の交渉・相互浸透ともいうべき社会会計に強い関心と研究意欲を抱かれたのは至極当然のことであった」（神戸大学経済経営研究所編［1990］「献辞」）と思います。

余計な事ですけれど、能勢先生を始め、小林（哲夫）先生、武田（隆二）先生あるいは小野二郎先生も一時ここ（山地先生の研究室）におられたと聞いております。ここに 4 つか 5 つの机を並べてね、ここで勉強されていたようです。

――能勢先生の社会会計を引き継がれた先生をご存知ですか。

年齢的な上下関係は存じ上げないのですが、能勢先生からよくお名前をお聞きしたのは、横国の合崎（堅二）[81]先生です。この能勢先生の退官記念論文集[82]の編者がたぶん・・・・・【能勢先生の退官記念の著書『経済会計の発展―会計思考の新展開―』同文舘（1990 年）をご確認されて】合崎先生ですね。科研なんかもこのグループで取られていたと思います[83]。

今は、社会会計を専攻に挙げる研究者は少ないのではと思います。そういう意味では、

---

[80] 谷端長（1920-2001）先生は、松下電器産業株式会社等を経て 1951（昭和 26）年よ 33 年間神戸大学経営学部に勤務され、1984（昭和 59）年に停年により退官され、名誉教授の称号を受けられた。この間、香川大学の経済学部の講師を併任されていた。

[81] 合崎堅二（1921-1993）先生は、1947（昭和 22）年より約 3 年間、明治学院専門学校に勤められたのち、1950（昭和 25）年より約 27 年間、中央大学経済学部に勤務された。1977（昭和 52）年に横浜国立大学経営学部に移られ、1986（昭和 61）年に停年退官された。

[82] 能勢先生の「退官記念論文集」は 2 冊存在する。1 冊は神戸大学経済研究所編『能勢信子教授退官記念論文集』（非売品）神戸大学経済研究所（1990 年）である。もう 1 冊は能勢信子教授退官記念論文集刊行委員会編『経済会計の発展―会計思考の新展開―』同文舘（1990 年）であり、刊行委員は合崎堅二先生、上田俊昭先生、河野正男先生、小口好昭先生、小関誠三先生、関口秀子先生、玉田啓八先生、中村宣一朗先生、原田富士雄先生、矢部浩祥先生が務められた。

[83] 能勢先生は、1978 年度から 1980 年度にかけて一般研究（B）において「経営経済データバンクを利用するソフトウエアの開発」（研究課題番号：X00080----345050）、1982 年度から 1983 年度かけて試験研究において「国際比較を目的とする企業財務データ・ベースの作成」（研究課題番号：57830002）、1986 年度から 1987 年度にかけて総合研究（A）において「経済会計の発展と経営分析への適用に関する研究」（研究課題番号 61301077）というテーマで科学研究費助成事業からの研究費を取得された。

合崎先生とは、1968（昭和 43）年頃より知り合われ、同先生の門下の諸先生のグループと知的交流が始まったとされる（能勢信子教授退官記念論文集刊行委員会編[1990]203 頁）。上記、科学研究費助成事業による研究費「経済会計の発展と経営分析への適用に関する研究」では、合崎堅二先生の他、横浜国立大学の河野正男先生、経済経営研究所の民野庄造先生、関口秀子先生との共同研究である。また、合崎先生との共著としては、『企業会計と社会会計』森山書店（1971 年）が挙げられ、これは合崎先生が主査を務めた日本会計研究学会のスタディ・グループ「企業会計と社会会計」（1968 年度～1970 年度）による研究成果をまとめたものである。この他、合崎先生が編集された『経済会計―その軌跡と展望―』中央経済社（1986 年）で能勢先生は「社会会計の誕生」について分担執筆されている。

やっぱり能勢先生の社会会計は、実際上、産業連関分析であったり、国民経済計算として継承されていると考えることができます。能勢先生は晩年は家族経済学もやっておられますね[84]。

――女性であること等から、研究所での立場が不安定ということはありましたか。

いや、そのようなことはなかったのではないかな。神戸大学の出身ですしね。

研究所長はなさらなかったです。研究所長職を自ら辞退されていると周りが推測して言っていたのだと思います。本当はどのようなお気持ちだったのかは、若造だった小生に先生が心情を吐露されるはずもなく、分からないです。

授業については大学院と学部両方を担当されていたと思います[85]。特に我々研究所の教官には、授業にたくさんの学生さんが来てくれないけれども、能勢先生のところはさらに特殊な専攻だから余計に授業に出られる学生は少なかったと思います。しかし大学外ではずいぶん活躍されていたのではないかと思います。例えば能勢先生のご葬儀は内々で行われたと記憶しておりますが、後日の偲ぶ会の時には相当な数の人が来られたのではないかと思います。女性の経済系組織や、あるいは消費者組合とか、そういうところの相談役みたいなものをたくさん引き受けておられましたから[86]、たくさんの方が先生を中心に輪を作られていたような気がします。

---

[84] 能勢先生は、小玉佐智子先生と共著で『家族経済学』有斐閣（1963 年）を発表されている。能勢（哲）[2000] において、同書の共著者である小玉先生は「能勢先生は、『家族経済学』のプラン作りや執筆がとても楽しそうで、特に第 7 章「家族経済と福祉の向上」を短時間に書きあげられ（能勢（哲）[2000] 21 頁）」たと記されている。そして、『非市場活動の国民経済計算：教育・福祉・環境の収支バランス』同文舘出版（1990 年）等においても、『家族経済学』で取り扱われていた福祉やインフレーション等を研究テーマとして取り扱われている。このように、能勢先生は市場価格では計れない活動を国民経済計算として計測する方向へと関心を移されたため、1977（昭和 52）年にヨーク大学に客員教授として赴き、社会経済研究所（ISER）を拠点に研究された（能勢（哲）[2000] 36 頁）。

[85] 能勢先生が助教授に昇進された 1956（昭和 31）年の前期までは、学部の講座は持たず、渡辺先生と新庄先生のゼミナールを手伝いだけであったが、後期からは経営学部または経済学部の依頼で講座を持つことになっていた（神戸新聞 1956（昭和 31）年 5 月 25 日「おしどり助教授誕生　全国で初の経済学　学生の人気者　神大の能勢信子さん」）。

[86] 能勢先生は神港新聞の「日曜訪問リレー対談」で、兵庫婦人少年室長の坂本孝子さん、神戸市交通局自動車課運輸事務員の井元照子さんと「女性の職場での地位は守れているかどうか」について対談されている。その中で能勢先生は「仕事に対する女性の意欲は必ずしも男性に負けていないけど、現在の職業婦人に背負わされているハンディが男性に比べて余りにも重いから力一パイ出し切れず、つい環境にイ縮しまう」との考えを示されている（神港新聞夕刊 1955（昭和 30）年 11 月 27 日、12 月 4 日）。また、読売新聞の「座談会　生活文化の解剖」では、京都大学人文科学研究所の加藤秀俊先生および主婦の宮井思葦子さんと対談し、日本の衣食住の問題に対して白書の数字を挙げながら見解を述べられている（読売新聞朝刊 1958（昭和 33）年 11 月 3 日）。このような新聞での対談の他、兵庫県建築審査委員会、兵庫県地方職業安定審議会委員、大阪府営水道事業懇談会委員といった、学外での委員を引き受けられていた。

――能勢先生は何度も海外学会の報告や外地留学に行かれていますが、当時、研究所として当然に与えられた権利だったのでしょうか。

私が先生とお知り合いになった以後について、何かの競争資金でお金を取られたこともあったかもしれませんが、そのあたりのことは分りません。六甲台や研究所にもいくつかの資金があってその資金で海外出張され、その成果報告を伺った記憶があります。何か競争資金で行かれたのは、もうちょっと若い時には行かれたかもしれませんが、私が知っている限りでは大学の資金で行かれていました。（回数的に多く見えるのは）長期出張以外にもわりと短期で学会出張された回数が多いのではないでしょうか。研究所では授業の駒数が少ないので、同僚に迷惑をかけないで行くことができるというので、回数が多い可能性はあります[87]。直近でも研究所に所属していて、年の半分ぐらい海外にいる方がいまして、それは困るからルールを決めて、3 分の 1 ぐらいはこっち（日本）にいてもらわなければ困る、というようなルールを決めたぐらい、行きやすいのです。学部の先生はやっぱり授業を担当しないといけないので、頻繁には行けないのだけれど、研究所は研究上の必要に迫られて、自分の給料で行けばなんとかなります。そういう意味では行きやすかったのは確かだと思います。ただし今と違って、円の価値が格段に低かったので、そうした意味では頻繁にということにはならなかったとも思います。

若い時代の（イギリス留学では）G.ステューヴェルや（J. R.）ヒックスに師事されていましたが、そういう人と知り合い、新しい社会会計の領域を開拓し、必然的に業績もたくさん増えるというのは、もちろんそうだと思います。（ヒックス教授との接点については）我々には詳しくは語ってくれませんでした。ヒックスとの共著などは、日本中が大騒ぎしてもおかしくないと思いますけれど、（なぜ大きく騒がれなかったのかは）良く分からないです[88]。

---

[87] 能勢先生は、神戸大学六甲台後援会の援助によりオックスフォード大学に 2 度留学されている。一度目は、1964（昭和 39）年 4 月 15 日から 1965（昭和 40）年 8 月まで、イギリスの他、イタリア、スイス、オーストリア、ドイツ、フィンランド、ノルウェー、フランスの各国を回られた。二度目は、1972（昭和 47）年 4 月から 1973（昭和 48）年 3 月までであった。この他、1977（昭和 52）年 7 月から 9 月まではヨーク大学へ留学されるとともに、ノルウェー、オランダの各中央統計局に出張された折は、文部省短期留学補助によるものであった。いずれも 1 年以内の短期の留学であり、この他、1980（昭和 55）年 10 月にはシンガポールへ研修旅行、1987（昭和 62）年 8 月には、イギリス、イタリアへ研修旅行に行かれている（神戸大学経済経営研究所編［1990］「能勢信子博士略歴・著作目録」1-2 頁；能勢信子教授退官記念論文集刊行委員会編［1990］203-204 頁）。

[88] 能勢（哲）[2000] において、コメントを寄せられているヨーク大学名誉教授 A. T.ピーコック教授は「経済会計というのは、ただ単に国民所得や国民産出物を計測するための、統計的な手法に止らず、それを以て経済を治癒する学問として重要である、と主張したのは、ノーベル経済学者のジョン・ヒックス教授卿で、近年になってからです。彼の意図は、経済政策の立案者が、マクロ経済の中での恒等関係を分類して、それによって意味のある政策の枠組みを作ることができれば、ということにありました。こうして信子さんがオックスフォードに魅力を感じたのは当然であり、そこでヒックス卿自身の仕事と共に、彼の同僚である G.ステューヴェル博士の研究に精通することになりました。」（能勢（哲）[2000] 54 頁）と記されている。

能勢先生ご自身は退官に当たって、最初にオックスフォード大学へ認証研究生として留学した際に師事した G.ステューヴェル教授を紹介してくれたのは、故レディ・ヒックスであると記されており（能勢

[小津先生インタビュー]

———能勢先生は行政関係の委員も務められておりましたが、これらの職を引き受けられた理由等をご存知であればお教えください。

信子先生は兵庫県の建築審査会の委員を 1971 年からされていますが、これは神戸大学の先生がされていた委員会だったという理解ですが、信子先生がなぜ選ばれたかというと、今であれば、なるべく女性の数を増やさなくてはいけないから、女性だからという選び方をする事もあるかと思いますが、この時は女性だからという理由では選んでないと思います。信子先生だから選ばれたと思います。そこにジェンダー差のようなものがあるとは思っていません。1971 年のこの前後、信子先生は、兵庫県という中で建築審査会では街の発展が確実に目の前に見えるということと、広い意味での住民の構成が上がるのですね、建築審査会の案件を 1 つ 1 つ見ていくと、これを認めると良くなるに違いないとか、こちらを先にすべきであるとか判断していかなければいけないのです。この時期、信子先生は、不動産関係のお仕事をされていたはずだと思います。1970 年代ごろの研究ともぴったりとあっていると思います。1971 年からすると少し後ですが、1988 年に英文のディスカッションペーパーで“A Reconciliation Account for Analysing Hyperinflation in Land Price”があります。建築審査会の仕事は、先生の中では自然なもので、女性だから呼ばれたとか、先生も女性だからやらなければならないと引き受けた行政職ではないです。専門領域や問題意識の中で委員を引き受けられていました。なぜ断言できるかというと、私が信子先生と過ごした時期は、私が大学院の博士課程から講師になるという時期だったのですが、その時期に信子先生が女性研究者の心得をいただきました。その中の 1 つに、女性だからあなたにはこれから色々な委員がくるかもしれないが、女性だからと言って任命されているのであれば、それはやってはいけないとはっきりとおっしゃいました。私は、最近は時代が違いますので、人がいないとなれば引き受けますが、それをずっと守ってきました。これはすべての女性研究者に残してよい言葉だと思いますので、お話しさせていただきました。

（信）[1990] 9 頁）、哲也先生はヒックス教授も自身の指導教官であったレディ・ヒックスが能勢先生に紹介したと記されている。哲也先生は能勢先生よりも 1 年早くオックスフォードに留学されていた（能勢（哲）[2007] 130-132 頁）。ただし、能勢（哲）[2000]では、この時もヒックス教授の指導を得ていたとの記述もみられるが（能勢（哲）[2000] 72 頁）、能勢先生ご自身、この折にはヒックス教授の講義に出席していただけであり、個人的接触はなかったと回顧されている（能勢（信）[1974] 8 頁）。

③ 家庭と職場との両立への工夫や家庭での様子

[廣野先生インタビュー]

――家庭と職場の両立はどのようにされていたでしょうか。

神戸大学経済経営研究所では、どこの勤務先でも同じでしょうが、色々な組織の長にならないかというようなお話が何回かあったと思うのですが、それは母の場合、断っていたと思います。母は家庭と研究の両立ということをメインテーマにしていたと思います。研究面ではもちろん、一分野を築いたと思うのですが、管理職は自分はやりたくないというようなことを言っていました。それは、今とは時代が違うかもしれませんが、当時の大学の管理職というと、夜飲み会も多く、男性も大変だったのかもしれません。そのあたりは、自分は女性だからということで区別というか、自分で区切りをつけていたところがあると思います。

――能勢先生が働かれているということを、廣野先生はどのように思っていましたか。

家庭では、職場が研究所だったものですから、学部よりは多少家で過ごす時間がありました。私自身はそれほど母が働いていることが嫌ではなくて、かえって出かける時の母が着替えている様子が、好きでした。それと、父の考え方も母の考え方も、女性が働くのはもう当然という家だったので、私も不思議に思ったことがないです。お手伝いさんがいたということもあるかと思うのですが、あまり追及して考えたことはありませんでした。

――家庭での能勢先生の様子を詳しく教えていただけますか。

そうですね。夕食の後の時間、よく毎日一緒に過ごして本当に四方山話ですが、一緒に話をしていました。それが一番の思い出ですね。父は本当に研究に一直線で、夕食の後、書斎に行って、もうとにかく論文と本を書いていました。ですから、私と母と二人でよく話をしていました。本当に普通の時間ですけれども、それはやっぱり、かけがえのない時間だったと思います。

夕方以降、母は家のことが中心で、夕食の後、よく私と一緒にいました、話をするだけでしたが、私にとっては良い時間でした。母にとってもそれはストレス解消であったと言っていました。子供とのスキンシップというか、スキンシップといっても話をするという意味で、ですけれど。本当に何でもない話をするというのが、お互いに良い時間、大事な

時間でした。母が私に愛情があるよということを伝えてくれていたことが一番良かったのかなと思います。

――能勢先生はベビー産業について言及されていましたが[89]、家庭での教育方針などはありましたか？

塾に行かせたりしないということでしょうか。私は塾には行かなかったです。それはある意味、他の子に対しては、少しハンディを負ったところはありました。塾には行かなければ良いというものでもないと思います。自分で私は努力して、なんとかしましたけれども、他の競争相手の子供たちに対して、高校時代はちょっとハンディを負っていたとは思います。もちろん塾に行かないことに良い点があるのですけれども、現実はやはり教育産業は必要だと私は思うのですよね。

――折角の機会ですので、草分け期の女性研究者のご息女として、女性研究者の道を歩まれている先生から、これからの女性研究者に向け、コメントをお願いします。

女性研究者としてと言いましても、特に普段は女性だと意識しないことが大事だと思います。ですから、職場でも女性だと思われないような状況の方が望ましいとは思います。しかし、反面女性と男性の違いというのも、どこかで考えていないといけなくて、男性がよくできること、得意なことと、女性のほうが得なことというのも分かっていて、欲張りですけど、男性が得意なことも吸収するということが大事だと思います。例えば、社会性が女性よりは、平均的に男性はあると思うのですよね。職場の中で上手にやっていくということを含めて、そういうところは、女性の良さも保ちつつ、見習っていくことも大事だと思います。

そして、た研究の面では、私はアメリカに留学していたのですけれども、アメリカでは、日本でも言われていると思うのですが、“Publish or Perish”という言葉がありまして、パブリッシュするか、朽ち果てるのかという言葉が、経済学者であれば、全員思っている言葉なのです。なので、それを頭の中において、研究を続けていくことも 1 つの方法だと思います。母の場合は年に 2 本書くぞと自分に決めていました。私の場合は、ちょっと自分が研究しなくなってきたら、“Publish or Perish”という言葉を思い出しています。やらなかっ

[89] 能勢先生はベビー産業に関して、前述のとおりベビー産業の繁栄が必ずしも子どもに良いとは限らないと指摘するとともに、「近ごろ私ぐらいの世代の人が寄れば、必ずといっていいほど出るのが、子供のおけいこの話である。聞き役の私は、なるほど教育ママがふえたものだとあきれる。経済学には国民所得がふえる比率以上にサービス産業がふえるというペティの法則がある。しかし、日本の場合、そのサービス産業がふえる以上に教育サービス産業の需要がふえているようだ。教育ママが多いためなのか。」（能勢（哲）[2000] 19 頁）とも考えられていたようである。

たら朽ち果てるぞっていう言葉を思い出してモチベーションにするということなのです。

ちなみに、アメリカの場合も女性の研究者の方が、環境的には非常に厳しいです。いわゆるアジア人扱いというのですか、アジア人というと、大学での就職の時に一段も二段も下になるのですけれども、特殊扱いです。女性も特殊扱いでして、その代りマイノリティーとして大学に何パーセントかは置いてもらえるのですよね。

日本における女性枠というものは特にはいらないと思います。それよりは、各女性研究者が自分を客観的に見て、男性の優れたところも取り入れてやっていくとかのほうがより良いというふうに思います。ただ、家事・育児との両立についてですが、育児との両立は相当大変で、特に子供が小さい時はやはり大変だと思うのですよね。それについては、例えば在宅勤務の時間を長くするなどという配慮が有効だと思います。私も子供が 5 歳までは大学では週 3 日の出勤で他の日は在宅勤務にさせていただいていました。それから、7 限目の夜間枠を取っていただきました。それは気配りでしてもらったのでしょうけれど、制度的に育児と両立できるような夜の時間をなくすとか、在宅勤務時間を増やすとか、留学の免除といった実質的な支援がいると思うのです。能力がないのに採用するというのはおかしいと思うのですが、力を出せるような実質的な支援を制度的にしてもらうということが大事だと思います。

それから、若い研究者の方は、自分の分野を確定していくことが大事だと思います。自分の強みとか適正や、その分野で競争相手がどれくらいいるかとか、それから自分にはどれくらい手持ちの時間があるか、データ収集に時間がかけられるのか、それから大学で何を求められているかとか、どういう人とつながりがあるかとかを考えて、うまく分野を固めることが、研究者として、1 つ大事なことだと思います。異動することもあると思いますが、そうしたらそこで自分の出せるところを切り売りする考え方も必要ですし、異動先でしか出来ないことを研究に追加していく強さも大事だと思います。自分が何を出せるのか、それぞれの所で何を追加できるのかということを客観的に考えることが大事だと思います。

私から、さらに、申し上げることとしたら、働いているから多くは時間が取れないのですけれども、若い方には是非スポーツを何か、水泳は大変でも、フィットネスクラブなどで何かなさることをやっていただくと、体力がついて結局研究も伸びるし、家庭もうまくやっていけますので、時間をなんとか取るということが大事だと思います。

子供ができました時には、スモールステップという考え方があるのですけども、あまり高い水準のことをお子様に要求しないでください。我々は、大学人ですから、すごく目線が高いのですよね。それは子供にとってはすごく負担なので、少しずつやっていこうねという、少しずつ小出しにする配慮というのも、大学に勤める女性で子供がいる人には大事だと思います。最初からパーフェクトを要求しないというのも大事なのかなと思います。このことは、学生への指導においても同じことが当てはまると思います。

[小林先生インタビュー]

――家庭と職場の両立に関して、能勢先生について何かご存知のことがありましたら、教えてください。

（ご息女）桂子さんが生まれたのが昭和 34 年。僕が 35 年に助手になっていますから。ベビーシッターの話をいっぱい聞かされた。そんなにガヤガヤいう人ではなく、さらりと。

（研究所の中での取り扱いや処遇も学部と）一緒です。国立大学の中ですから。女性だから差別されたということもないと思う。僕が知っている限り、赤ちゃんが生まれたところでしたから、その面で、みんなカバーしていたと思いますけれど。部局史、『神戸大学百年史』を見る限り、能勢先生がどういう状況に置かれていたかというと、こういう先生方で、悪い先生はいないと思います[90]。能勢先生は、差別を受けるような職場じゃなかったと思いますね。研究所は、能勢先生にとっては良かったと思います。赤ちゃんを育てたりなんかして、そんなに雑用は当てなかったし、それは配慮したと思います。初めてのケースだから、みんな気を遣ったと思います。

[山地先生インタビュー]

――能勢先生のご家庭のこと等伺ったことはありますか？

能勢先生は、私より 25 歳年上の女性ですからね。そんな若造のしかも男性の私に対してその心情を吐露するとか、そういうことはなかったです。したがって家庭のお話をした覚えはありません。（子育てにはシッターさんに協力してもらっていた点については）そうでないとできなかったのでしょうね。

[小津先生インタビュー]

――家庭での能勢先生の様子を教えていただけますか？

ご自宅では、ヒックス先生の話が多かったです。ヒックスご夫妻と能勢先生ご夫婦、そして私たち夫婦の関係は、まず夫が哲也先生のゼミ出身だったので、哲也先生のお家に行く時、私も同行させてもらっていました。哲也先生はオックスフォード大学で博士号をとられています。指導教官がレディ・ヒックスです。レディ・ヒックスのご主人がサーヒックスで、レディ・ヒックスと哲也先生は完全な師弟関係で、サーヒックスと信子先生も師

[90] 神戸経済経営研究所の発足当初の主任教授として、川上太郎先生、古林喜楽先生、柴田銀次郎先生、新庄博先生、平井泰太郎先生、米花稔先生、渡辺進先生の名前が掲載されており、このうち、川上先生、古林先生、新庄先生、平井先生は学部と併任されていた（神戸大学百年史編集委員会編［2005］1013 頁）。

弟関係ではありますが学位論文の指導といった師弟関係ではなく、ある種の師弟関係というか共同研究という関係が出来上がるわけです。お 2 人にとってみれば、レディ・ヒックスとサー・ジョン・ヒックスは非常に大事な恩師であり、共同研究者であったということですよね。なので、ヒックスがというのは、いつも普通に話題に出ていました。信子先生が一番よくお話しされていたのは哲也先生のことだったと思いますし、よくヒックスの話をされていました。

お家における信子先生について心に残る思い出がいくつかあります。信子先生はお料理もされていました[91]。ご出勤される前にまな板の上にこんにゃくを切って置いてあるのを見たことがあります。ご自宅に帰られてきてからお料理をしようと思って、つまりお夕飯の準備をされてから外にでられて、お家に帰ってからもう一度ということだったと思います。

また、信子先生はお家にお帰りになられた時はキリっとした感じで、偉大な研究者ですし、すごく怖く思うこともあったのですが、先生のためにお茶を入れてケーキをお出しして、そうするとお茶を飲んでケーキを食べて、だんだんと緩んでこられる、そういう時もありました。お家の中は本当にきれいでした。お嬢さんの送り迎えをされたり、おばさん（ヘルパーさん）がお家のこともきれいにされて、この 3 人体制だから、おばさんを頼りにされていました。

その他に、哲也先生は小食でいらして、お味噌汁とかを半分残される時には最後まで全部飲みなさいと言われていて、すごく哲也先生の健康に気を遣われていました[92]。このように、信子先生は、お家のこともヘルパーさんと 3 人体制できちんとされていました。

（4）小括

以上、歴史研究として対象とした能勢先生の足跡と業績について考察してきたが、その結果、①研究者になられた、また専門分野・研究テーマの専攻のきっかけ、②研究継続の原動力と研究業績、③学内行政、ならびに社会貢献活動、④研究教育（仕事）と家庭の両立という形でまとめると、次のようにいえると考える。

① 能勢先生が研究者となられたきっかけは、学部時代の恩師大北文次郎先生の進学のススメであり、そうして進学した大学院ゼミの新庄博先生と勤務先の渡辺進先生のご指導により、両先生それぞれの専門分野である経済学と会計学の学際領域としての社会会計研究に取り組むことになった軌跡が窺える。

---

[91] オックスフォード大学に留学中の話になるが、哲也先生は「サマータウンの市場やコーンマーケットの日本食料品店から集めた食材を、『洋風和食』に仕上げるのが専ら信子の仕事であった。彼女自身も本を書き乍ら、私の仕事を支え、子供と付き合うなどの八面六臂の活躍は、正に彼女でなければできなかったであろう。」（能勢（哲）[2007] 136 頁）と述懐されている。

[92] 哲也先生は、「50 年近くのあいだ信子は私の体調について十分に知り、またどう対処するかをいつも考えていた。殊に食事については常に細心の配慮をしていたように思う。『なんでも不味そうに食べるわね』と小言を言いながらも、折角作った味噌汁を半分でも捨てようとすると、私の口に押し込むようなこともままあった。が、これらのことは、私への限りない思いやりがなければできなかったに違いない。」（能勢（哲）[2000] 57 頁）と記されている。

その意味で、社会会計研究者、能勢先生の道筋は、恩師や指導者によるところが大きい。

② 能勢先生は、そうして取り組み始めた社会会計研究一筋に歩まれ、わが国における社会会計研究の構築に貢献され、その第一人者として生涯活躍された。

そのような研究継続と業績の原動力としては、なによりも国立大学初の女性経済研究者として社会会計研究を究めるという強い意志があり、くわえてくわえて研究仲間といえるご夫君哲也先生との関係も窺える。能勢先生ご夫妻は、同じ大学院ゼミ所属であったことから、専門分野について相互に理解され、相互研鑽を積む研究者ご夫妻であった。能勢先生ご逝去後わずか半年にして、哲也先生の編集により能勢先生著の 4 編が上梓されたことは、その姿を端的に表わしていると思われる。

③ 学内行政については、ご家庭等ご自身のおかれた環境を見極め、その中で所属長ではなく、研究体制の強化や国際交流等自らの役割に徹して務められた。

また学外では、ご自身の専門分野とのかかわりを判断され、その中で行政の各種委員を務められるという姿勢をとられた。

④ ご家庭は理想的な学究家族といえ、専門分野について相互に理解し合えるとともに、細やかな心配りあふれる私生活があり、仕事と家庭の両立そのものである。

能勢先生のご逝去後、哲也先生が心を込めて編まれた『夏の日の翔び去る如く―信子のアルバム』の帯表紙には、「女性研究者の先陣を駆ける：家庭を掌中の宝物のように慈しみながらも、国立大学初の女性経済研究者として、学問一筋に戦後を駆け抜けた健気な人生」とあり、まさにそのとおりである。

３　眞野ユリ子先生の業績と足跡

（1）経歴

眞野ユリ子先生は、1935（昭和 10）年 5 月 4 日、大阪市北区で出生された。

大阪経済大学経済学部を経て、1958（昭和 33）年、神戸大学大学院経営学研究科に進まれた。同研究科に進学後、指導教授であった山下勝治[93]先生から提示されたことをきっかけとして、損益計算書論を基礎としたペイトン学説の会計理論構造論の研究に取り組まれることになった。このことについては、眞野先生ご自身、次のように述べておられる。

「筆者が･････ペイトン学説の会計理論構造論の研究に着手したのは、故山下勝治博士の御教導によるものであった。昭和 33 年春、神戸大学大学院で博士の門を敲いた筆者に先生が提示されたのは、･････Paton and Paton, JR., *Corporation Accounts and Statements* の損益計算書を中心として研究をするようにとの御言葉であった。」（眞野[1978]「序」2 頁）

その後、神戸大学大学院経営学研究科博士課程後期課程を経て、1963（昭和 38）年、龍谷大学経済学部に専任講師として着任された。その 2 年後、1965（昭和 40 年）、北海学園大学経済学部の経営学科増設に伴い、同大学同学科に会計学担当教員として就任された。

同年の 7 月には、眞野脩[94]先生（以下、脩先生と表す）と結婚され、その後、二人のご息女をもうけられている。 その結婚について大学院時代同期であった小林哲夫先生は、インタビューで次のように語られた。

「とにかく旦那（眞野脩）さんと仲が良かった。･････それ以前に（神戸大学大学院に入学する前から）仲良くなられて眞野（脩）さんがいたから来たという話で。眞野（ユリ子）さんは龍谷へ行かれた後、北海学園に移動されましたが、その時に北大でしたから、眞野（脩）さんは･････だから、眞野（ユリ子）さんのケースはご主人と離れられない立場で、研究活動の支えになっていたのが、たぶんご主人だと思います。」（インタビュー 161 頁）

結婚後も、眞野先生は、一貫してペイトン研究をテーマに研究活動を継続的に積み上げられ、1978（昭和 53）年には、それまでの研究の集大成として、著書『損益計算書論－ペイトン学説研究－』（森山書店）を出版されている。ほぼ毎年、1 篇以上の論文を発表され、その業績は、後述の図表Ⅴ-3-3 のように著書 1 篇、論文 38 篇に及ぶ。論文では、ペイトンの一語一句に気を配りつつ、行間を読み取り、その学説を丁寧に解釈された上で、その視

---

[93] 山下勝治（1906-1967）先生は、1934（昭和 9）年に彦根高等商業学校（現・滋賀大学）に着任された後、1944（昭和 19）年に神戸商業大学（現神戸大学）に 1967（昭和 42）年に逝去されるまでの間、勤務された。

[94] 眞野脩（1931-1997）先生は、1956（昭和 31）年より 7 年間、大阪経済大学に勤務され、1963（昭和 38）年に北海道大学に移られ 1995（平成 7）年に同大学を停年退官された。

点（理論）から、当時の会計を慎重に論じられる研究スタイルを生涯貫かれた。著書出版後も、後述のように北海学園大学に残された同著書に眞野先生ご自身による赤ペンの跡が記され、書名をはじめ細部に渡って呻吟され修正をくわえられている。再出版を予定されていたと窺え、そこには、先生の並々ならない強い意志が感じられる。その改訂版の実現をみたかった旨を、北海道の地で眞野先生を静かに見守り続けられた小樽商科大学の久野光朗[95]先生からインタビューにおいて、また著書出版にあたられた森山書店の菅田直文社長からも伺ったところである。

同時に家庭では、脩先生の研究生活を尊重され、また、北海道で貴重な経営学者として対外的な仕事の多かった脩先生のスケジュール管理までされていた。その状況について、北海学園大学の同僚であった宮坂純一[96]先生は、インタビューで印象深く話された。

「*だから、（ユリ子先生は）妻であり、秘書であり、お母さんであり、それで教育研究というのは、ものすごくタフな先生だったですね。*」（インタビュー162 頁）

1978（昭和 53）年 7 月からは、脩先生のバーナード研究のメッカであるコーネル大学で研究したいという希望にも沿われ、約 1 年間、同大学に客員研究員として留学もされている。

眞野先生は教育に対して、北海学園大学の当時の田中修学長の弔辞を借りれば、「壮絶なる教育への執念」をもたれていた。眞野先生が教育を大事にされ、学生たちと強い絆をもっていたことは、ゼミ生だった NPO 法人北海道移植医療推進協議会事務局次長の田村弘修氏による次の逸話から窮える。

「68 年全国の血液センターに私が考案した方式が導入され（2 年間、日赤本社に勤務）、75 年から各種方式を集大成執筆し、ゼミ恩師の故真野ユリ子先生に監修をお願いし 79 年に「経理事務の手引き」を札幌で印刷（20 年後の 99 年改訂版も担当）、マニュアル化しました。」（田村 [2013] 12 頁）

そして、まさに壮絶なる姿勢は、眞野先生の体調が悪くなってから特に心に残るものとなる。そのことは、『眞野ユリ子教授追悼号』の当時の大沼盛男[97]経済学部長による「追悼のことば」がすべてを物語っている。

「眞野ユリ子先生は昭和 40 年 4 月、本学に就任以来、20 年に垂んとする期間、こよなく学生を愛され、誠実な講義で学生を魅了し、自らの御研究でも多くの貴重な業績を残されながら、なおかつ死の直前まで教壇に立たれたお姿は、私達教職員一同の脳裡に焼

---

[95] 久野光朗先生のご専門は会計史。1957（昭和 32）年より小樽商科大学に勤務され、1995（平成 7）年に同大学を停年退官され、名誉教授の称号を受けられている。

[96] 宮坂先生のご専門は HRM および CSR。1977（昭和 52）年より 8 年間北海学園大学に勤務され、1985（昭和 60）年より奈良産業大学（現奈良学園大学）に勤務されている。

[97] 大沼盛男（1931- ）先生は 1953（昭和 28）年 3 月に北海道大学を卒業後、高等学校の教諭を経て 1959（昭和 34）年に北海道大学大学院農学研究科修士課程を修了された。その後、北海道立総合経済研究所研究員等を経て、1981（昭和 56）年より北海学園大学に着任さ、経済政策等を担当された。

きついて離れません。…（中略）…このような数々の研究成果を世に問い、教育と家庭をしっかり守ってこられた先生は、昭和 58 年秋以降、体の不調を訴えられたのであります。その後、先生は持ち前の熱意で講義を続けられ、私達同僚の、休養され療養に専念されるようにというお願いにも、『私は学生に講義をしているときが一番楽しい』というお答えで、寸暇も惜しまず教壇に立たれたのであります。昭和 59 年に入り、入院加療の努力で一時期小康を保たれましたが、夏休み前再び病状が悪化し、それでも 9 月からの一学期最終講義に出講され、二学期以降の講義再開を約束されておりました。御主人の車椅子の介護で再度教壇に立った先生は、はた目には大変幸せそうでしたが、すでにその頃には全身に病巣が蔓延しており、10 月 19 日に私達は心を鬼にして休養入院をおすすめしたのでありますが、それから旬日を経ずして残念ながら不帰の客となられたのであります。告別式における本学田中修学長の弔辞『誠に壮絶なる教育への執念』という一語に尽きるといえましょう。」（大沼［1985］）

北海学園大学における学内行政については、ご自身の環境のなかでの役割に徹されていたようで、あまり関与されなかったとのことであるが、内田昌利[98]先生による次の「最終講義によせて」にみられるように、会計領域の充実に努められている。

「なにせ北大や小樽商大でも『管理会計』という科目が置かれていない時代‥‥‥で、管理会計の専任を置く大学はまだ数が少なかったのですが、会計学担当であった神戸大出身の眞野ユリ子先生（故人）の先進的なお考えの影響が大きかったようです。」（内田［2014］275 頁）

このように眞野先生は、学究夫妻として相互研鑽を積まれるとともに家庭では、良き妻であり、また二息女の母親であって、研究教育と家庭を実にパワフルに見事に両立されていたのである。

くわえて、その人柄に触れておきたい。眞野先生は、その朗らかなお人柄により、「ユリ子先生」の愛称で、多くの人々に愛された。学会では必ず同輩に親しく声をかけられ、また、時折、脩先生とともに、同僚を、ときにはその家族をも、自宅での夕食に招待されるなどし、交流を大切にされていた。その面倒見の良さは周囲の人々の良く知るところであった。

このようにパワフルであり多くの方に敬愛されながら、1982（昭和 57）年、体の不調を理由に入院され、その 2 年後 1984（昭和 59）年 10 月 28 日、肝不全のため急逝された。享年、惜みて余りある 49 歳であった。

[98] 内田昌利（1944－ ）先生は、1973（昭和 48）年に北海学園大学に着任され、停年退官を迎えられる 2014（平成 26）年まで勤務され、同大学の名誉教授になられている。

以上の眞野先生の略歴を、『眞野ユリ子教授追悼号』所収の略歴にそってまとめると、図表Ⅴ-3-1 のとおりとなる。

図表Ⅴ-3-1　眞野ユリ子先生略歴

西暦	和暦	年	月	学歴・職歴	私生活
1935	昭和	10	5		大阪市にて出生
1958	昭和	33	3	大阪経済大学経済学部卒業	
1960	昭和	35	3	神戸大学大学院経営学研究科修士課程修了（経営学修士）	
1963	昭和	38	3	神戸大学大学院経営学研究科博士課程単位修得	
1963	昭和	38	4	龍谷大学経済学部専任講師（1965（昭和40）年3月まで）	
1965	昭和	40	4	北海学園大学経済学部専任講師に就任	
1965	昭和	40	7		眞野脩氏と結婚
1967	昭和	42	4	北海学園大学経済学部助教授に昇任	
1974	昭和	49	4	北海学園大学経済学部教授に昇任	
1978	昭和	53	7	米国コーネル大学客員研究員（1979（昭和54）年8月まで）	
1984	昭和	59	10		札幌市にて逝去

(2) 研究業績

眞野先生の研究生活は、ペイトン学説研究一筋に業績を積み重ねられ、その集大成として著書『損益計算書論―ペイトン学説研究―』を刊行されている。まさに、『眞野ユリ子教授追悼号』における大沼学部長（当時）の「追悼のことば」にみられるとおりである。

「先生が一貫して心血を注がれた研究テーマは『ペイトン学説の研究』であります。論文・著書は本論集末尾に掲載したとおりであり、とりわけ本学の『経済論集』にはほぼ毎年欠かさず発表され、上記テーマについて系統的かつ精緻な積み上げを行なっていることが特筆されます。このほか本学の『開発論集』をはじめ、御出身大学である大阪経済大学、神戸大学のほか、かつて勤務された龍谷大学等の紀要にも積極的に珠玉の論文を発表されています。約 40 篇に及ぶ研究論文に引きつづき、先生は念願の研究を集大成した『損益計算書論―ペイトン学説研究―』（森山書店）の大著を出版したのは昭和 53 年 1 月のことであります。この成果に基づき昭和 53 年 7 月より 1 年間、合衆国コーネル大学の客員研究員として招聘を受け、国際的視点から日米会計学の比較研究に従事されたほか、学会活動では日本会計研究学会、日本会計史学会、アメリカ会計学会、日本経営学会に所属され、斯学の発展にも寄与されておりました。」（大沼［1985］「追悼のことば」）

眞野先生ご自身は、集大成としての『損益計算書論』の意図について、次のように述べておられる。

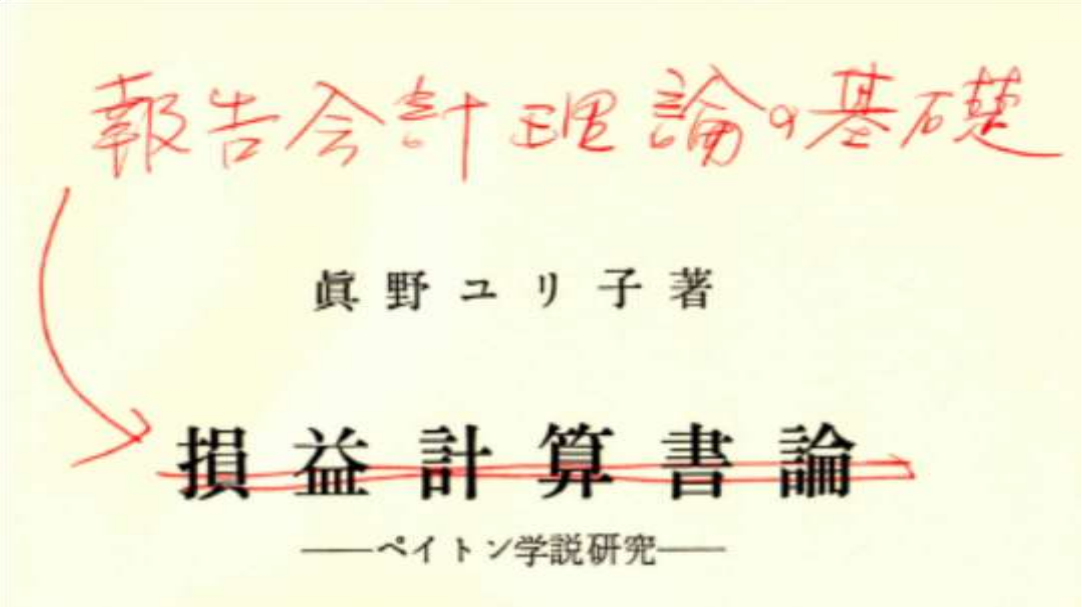
「慣例の会計実践においては、取得原価を基準とする各種資産原価を、実現収益に対応せしめて、過去、現在、将来の各期間に配分する会計手続を通じて、期間損益計算を行い、損益計算書を作成して成果報告を行なうことが中心課題となる。したがって、このような場合の決算貸借対照表は、期間損益計算の観点からみて未解決の収入、支出及び収益、費用の各項目を次期損益計算へ繰越す為の手段となるものである。換言すれば、決算貸借対照表は、独立している各々の期間損益計算を連結する連結環としての役割を果たすものであり、損益計算及び損益計算書重点主義の会計理論構造が主張せられるのである。

こうした慣例の会計理論構造に対して、ペイトン学派は異質の特徴ある会計理論構造を構築し、今日まで一貫してその理論構造の展開を図ってきている。本書『損益計算書論』は、そうした彼等の会計理論体系の中で、特に継続企業の現価概念に基づく将来の収益力の測定と報告による情報伝達の問題に内在する会計理論の構造を明らかにし、その面よりペイトン学説の体系化を行おうとするものである。」（眞野［1978］「序」1 頁）

こうして、眞野先生のペイトン学説研究の 1 つの結実はみられたところであるが、眞野先生は、呻吟とも思える本書の修正やペイトン学説に関する論文を書き続けられている。北海学園大学に残された『損益計算書論』に刻まれた、図表Ⅴ-3-2 に示す眞野先生ご自身

による赤ペンの跡には、先生のさらなるペイトン考究への思いが込められているようである。

図表Ⅴ-3-2　『損益計算書論』への書き込み



出典：眞野［1978］内表紙

思えば、眞野先生が生涯をかけて研究に取り組まれ続けた、ペイトンは、『世界の会計学者　17 人の学説入門』によれば、「思考力豊かな著者と注目に値する理論家」（ベルナンド編著・藤田訳[2007]123 頁）と評されている。眞野先生にとって尽きぬ思いや関心があったことと思われる。久野先生が静かに語られた言葉は、深く心に残るものである。

「*100 歳以上の天寿を全うしたペイトン（1889 年 7 月 19 日から 1991 年 4 月 21 日）の研究者でありながら、残念ながら研究者自身はその半分も生きられないで一生を終えてしまった。*」（インタビュー164 頁）

上記の著書を含む、眞野先生の著書・論文等を『眞野ユリ子教授追悼号』所収の著作一覧に、国立国会図書館、国立情報学研究所等のデータベースで確認した結果をくわえて一覧にまとめると、次頁以降の図表Ⅴ-3-3 のとおりとなる。なお、論文のタイトルは国立情報学研究所のデータベースの表記にあわせている。

図表Ⅴ-3-3　眞野ユリ子先生著作目録

著書

番号	西暦	和暦	年	月	著書名	出版社	共著／単著等	備考
1	1978	昭和	53	1	損益計算書論 ：ペイトン学説研究	森山書店発行	単著	

論文

番号	西暦	和暦	年	月	タイトル	雑誌名	巻号	備考
1	1960	昭和	35	3	損益計算書の表示報告に関する研究	修士論文(神戸大学大学院経営学研究科)		
2	1962	昭和	37	10	損益計算書の表示に関する研究-1-	六甲台論集	9(3)	
3	1962	昭和	37	12	損益計算書の表示に関する研究-2-	六甲台論集	9(4)	
4	1963	昭和	38	3	財務会計特に報告会計に関する研究	博士課程修了論文(神戸大学大学院経営学研究科)		
5	1963	昭和	38	4	貸借対照表の表示に関する研究-1-	六甲台論集	10(1)	
6	1963	昭和	38	7	貸借対照表の表示に関する研究-2-	六甲台論集	10(2)	
7	1963	昭和	38	10	貸借対照表の表示に関する研究-3-	六甲台論集	10(3)	
8	1963	昭和	38	10	資金計算書の表示に関する研究	龍谷大学経済学論集	3(2)	
9	1964	昭和	39	4	貸借対照表の表示に関する研究-4-	六甲台論集	11(1)	
10	1964	昭和	39	5	アメリカ合衆国における損益計算書の報告形式	龍谷大学経済学論集	3(4)	
11	1964	昭和	39	11	発生主義会計と保守主義--アメリカにおける期間損益計算の一研究	龍谷大学経済学論集	4(2)	
12	1966	昭和	41	11	企業会計理論の諸仮定	経済論集	15	北海学園大学経済学会
13	1967	昭和	42	3	社債発行における会計処理の問題について	開発論集	1(3)	北海学園大学開発研究所
14	1967	昭和	42	3	現実割引の会計処理について	経済論集	16	北海学園大学経済学会
15	1967	昭和	42	7	不良債権見積額の取扱いについて--報告会計研究	経済論集	17	北海学園大学経済学会
16	1967	昭和	42	10	創設原価をめぐる会計処理の問題について--報告会計研究	経済論集	18	北海学園大学経済学会
17	1968	昭和	43	2	報告会計における評価問題--報告会計研究	経済論集	19	北海学園大学経済学会
18	1971	昭和	46	2	損益計算書の形式をめぐる論争点について--ペイトン学説研究	會計	99(2)	

論文

番号	西暦	和暦	年	月	タイトル	雑誌名	巻号	備考
19	1972	昭和	47	3	保守主義会計について--ペイトン学説研究	経済論集	19(3・4)	北海学園大学経済学会
20	1972	昭和	47	9	前払保険料の会計処理について--ペイトン学説研究	経済論集	20(2)	経済学部創立二十周年記念号
21	1972	昭和	47	10	手形割引の認識と企業会計--ペイトン学説研究	會計	102(4)	
22	1973	昭和	48	2	会計学における原価と価値の問題をめぐって--ペイトン学説研究	経済論集	20(4)	北海学園大学経済学会
23	1973	昭和	48	9	棚卸資産と売上原価の測定をめぐる問題点--ペイトン学説研究	経済論集	21(2)	北海学園大学経済学会
24	1974	昭和	49	3	減価償却資産の測定をめぐって--ペイトン学説研究	経済論集	21(4)	北海学園大学経済学会
25	1974	昭和	49	9	現在原価基準による会計手続について--ペイトン学説研究	経済論集	22(2)	北海学園大学経済学会
26	1975	昭和	50	3	複利法による減価償却計算--ペイトン学説研究	経済論集	22(4)	北海学園大学経済学会 南鉄蔵名誉教授記念号
27	1976	昭和	51	1	企業会計における見積利子の測定をめぐって--ペイトン学説研究	経済論集	23(3)	北海学園大学経済学会
28	1976	昭和	51	9	社債券の利子要素の会計処理について--ペイトン学説研究	経済論集	24(2)	北海学園大学経済学会
29	1976	昭和	51	12	短期の受取債権勘定ならびに支払債務勘定の会計学上の論争点をめぐって--ペイトン学説研究	経済論集	24(3)	北海学園大学経済学会
30	1977	昭和	52	3	創設原価及び資本調達原価の会計処理をめぐって--ペイトン学説研究	経済論集	24(4)	北海学園大学経済学会
31	1978	昭和	53	1	企業財務報告書の会計理論構造と体系	経済論集	25(3)	北海学園大学経済学会
32	1981	昭和	56	2	SECのレギュレイションS-X、フォーム10-Kに基づく財務諸表について--ペイトン学説の一展開	會計	119(2)	
33	1981	昭和	56	3	企業の財務諸表のグラフ表示について	経済論集	28(4)	北海学園大学経済学会 外崎正次教授還暦記念号
34	1981	昭和	56	3	取替原価基準に基づく財務諸表--アメリカSECのレギュレーションS-X、会計学の基本問題10-Kの規定をめぐって	喜田義雄・北里武三両先生退任記念論文集		大阪経済大学会計学研究室編
35	1982	昭和	57	3	製品保証引当金、工事保証引当金、修繕引当金をめぐって--ペイトン学説研究	北海学園大学経済論集	29(3・4)	既出『経済論集』を改称
36	1982	昭和	57	5	過去用役に対する年金発生債務の会計処理--ペイトン学説研究	北海学園大学経済論集	30(1・2)	

論文

番号	西暦	和暦	年	月	タイトル	雑誌名	巻号	備考
37	1984	昭和	59	1	貸借対照表の資産と持分の表示、報告をめぐる問題--ペイトン学説研究-1-	會計	125(1)	
38	1984	昭和	59	2	貸借対照表の資産と持分の表示、報告をめぐる問題--ペイトン学説研究-2完-	會計	125(2)	

（3）インタビュー調査結果

眞野ユリ子先生に関して、神戸大学大学院で同期であった小林哲夫先生、北海学園大学で同僚であり、親しくされていた宮坂純一先生、そして同じ北海道の地で長く会計学の教鞭をとられており、眞野先生の追悼号の巻頭論文を執筆された久野光朗先生にインタビューを行った。インタビュー調査の日程は以下のとおりである。小林先生には、2015（平成27）年 5 月 6 日に先生のご自宅にてインタビュー調査を行った。インタビュアーは井原理代、兵頭和花子、津村怜花の 3 名である。宮坂先生には同年 6 月 11 日にご勤務先の奈良学園大学にてインタビューに応じていただいた。インタビュアーは井原理代、兵頭和花子、澤登千恵、津村怜花の 4 名である。久野先生には同年 6 月 22 日にオーセントホテル小樽にてインタビュー調査に応じていただいた。インタビュアーは井原理代、津村怜花の 2 名であり、オブザーバーとして二村雅子先生（小樽商科大学）にも同席いただいた。これらのインタビュー調査結果を、前述のとおり、①研究継続に対する原動力、②女性研究者としての苦労や職場での様子、③家庭と職場（主に北海学園大学）との両立への工夫や家庭での様子という 3 項目に整理してまとめると、以下のとおりとなる[99]。

① 研究継続に対する原動力

[小林先生インタビュー]

――眞野先生が研究職を継続された原動力は、大学院時代の同期であった先生からご覧になって何だったと思われますか。

とにかく旦那（眞野脩）さんと仲が良かった。旦那さんはゼミが違いますよね。経営学です。眞野（脩）さんのほうがずっと上やったと思いますけれどね。それ以前に（神戸大学大学院に入学する前から）仲良くなられて眞野（脩）さんがいたから来たという話で。眞野（ユリ子）さんは龍谷へ行かれた後、北海学園に移動されましたが、その時に北大でしたから、眞野（脩）さんは。そうでなかったらずっと龍谷にいたはずです。だから、眞野（ユリ子）さんのケースはご主人と離れられない立場で、研究活動の支えになっていたのが、たぶんご主人だと思います。その点は能勢さんに似た部分があったと思います。それで、どちらも、ご主人がエネルギーの元になっていたと言って良いでしょう。

[宮坂先生インタビュー]

――眞野先生が研究職を継続された原動力は、北海学園大学で同僚であった先生からご覧

[99] 小林先生は、眞野先生の大学院時代をご存知であるとのことから、ご結婚後に相当する質問項目である、職場と家庭との両立への工夫や家庭での様子についてのインタビューは行っていない。また、久野先生も家庭での様子についてはご存知ないとのことから、当該内容のインタビューは行っていない。

になって何だったと思われますか。

私が着任した頃、ユリ子先生は、私はユリ子先生と呼んでいたのですけれども、当時お会いした時には、これ（追悼号の写真）よりもっと体格良くなっていましたよね。脩先生はいつも「ユリちゃん」と呼んでおられました。脩先生にとっては、（眞野先生は）奥様だけれども、ある意味では秘書みたいなことをやっておられました。脩先生の方は、（北海道には）経営学、プロパーの方がおられなかったから、北海道の色々なところを、官庁も企業も全部飛び回っていらっしゃいましたよね。あちこち飛び回って、当時はまだ今みたいに社会貢献や社会人講座とかやっていない時代ですが、脩先生はそれこそ色んな委員をやっておられました[100]。ユリ子先生がやっているのかは分からなかったですね。（脩先生がご多忙だったので）そのスケジュール管理みたいなことをユリ子先生がやっておられましたからね。だから、妻であり、秘書であり、お母さんであり、それで教育研究というのは、ものすごくタフな先生だったですね。

（外地留学で行かれた）コーネル大学のイサカを気に入られたみたいですね。これは脩先生が行かれたので、一緒にあわせて行かれたと思うのですけれども。（外地留学に発たれる）その飛行機に乗る直前までワーっと動いて、飛行機に乗ったらすぐクタっと寝てしまったという話、ユリ子先生ご自身から聞きました。前の日までバタバタしていたと言っていましたけれどね。ほとんど寝ていなかったと思います。だから（家族全員の荷物を準備したので）イサカに行くその飛行機に乗る直前まで働いて、本当に寝ないまま飛行機に乗ったような感じで話していたのだと思いますからね。本当にパワフルというか、元気な先生というイメージがすごくありますね。

北海道で経営学をきちんと教えなければいけないという気持ちは、お二人にはあったのだと思いますね。（夫婦で北海道に経営学をという使命感が）あったのでしょうね。経営学のお弟子さんを育てたい、北大で育てたいというのが脩先生の願いだったと思いますけれどね。だからそれをご夫婦で、ユリ子先生は会計のほうでされていたのではないでしょうか。

――ペイトン研究を続けられていることで、何か伺ったことがあれば教えてください。

これ（追悼号の業績一覧）を見ても、ずっとその名前ばかり書いてありますよね。（ペイトン研究一筋ということに関して）そうですね、タイトルに、ほとんどその名前が出てき

[100] 脩先生は、北海道大学で教鞭をとる他、北海道の石炭対策委員会や産炭地振興対策委員会等の委員を務められ、北海道の社会・経済界の発展に貢献された。これらの功績が認められ、1993（平成 5）年には労働行政推進の功により労働大臣賞を、1996（平成 8）年には為替貯金制度の普及と事業発展に寄与した功に対して郵政大臣より感謝状が贈られた（木下 [1997] 3 頁）。

ていますからね。脩先生は（指導教員であった）平井（泰太郎）[101]先生のことを大切に思っておられて、よく名前をお聞きしましたけれどね。（また、ユリ子先生の指導教官だった）山下（勝治）先生の名前はよく出てきました。何回もお聞きしました、お名前は。

（大変忙しい中でも毎号か隔号に論文を紀要に出されている点について、大学での論文提出の規定は）なかったと思います。研究室はきちんと本を整理されていました[102]。だから、脩先生の研究室とはえらい違いで、脩先生のほうはご自分で倉庫や物置だと言ってらっしゃったくらい、資料が乱雑にバーっとあるだけの、北大の研究室はそうでしたからね。ユリ子先生の研究室はきれいな研究室でしたね。ちょうど私の横が内田先生、その前が眞野先生で、7 階建て[103]の研究棟だったと思うのですけれどね。あの頃なんてパソコンはなくて、全部手書きの原稿ですからね。よっぽど丁寧にきちんと整理しておかなきゃ、必要な本が出てこないからね。ユリ子先生にはパワフルな面と緻密な面があるかもしれませんね。

[久野先生インタビュー]

――眞野先生が研究職を継続された原動力は、同じ北海道の地で、会計研究を続けられている先生からご覧になって何だったと思われますか。

これは本人でなければ、何とも言えない。（ですが、）今村（聡）[104]くんに頼んで（北海学園大学の）図書館を調べてもらって、眞野さん自身が持っていて、寄贈した『損益計算書論』には、書き込みがされているのですよ。特にここ（書き込み）に注意してください。次に出す時には、こういうふうに変えたいということなのですよね。『損益計算書論』というのを、これは損益計算書だけに限定していますけれどね、貸借対照表論も研究していますからね。だから、（『損益計算書論』から）「報告会計理論の基礎」と変えたいと眞野さん自身の筆跡で書かれています。これは（史料として）価値があると思います。これ（『損益計算書論』）は最初（の著書）だから、もっときちんと校正すべきだったというふうに、私なんか厳しい目で見ていますけれどね。知らないと言うと語弊がありますが、ご存知のとおり“ibid.”と“op. cit.”を間違っているのですよね。自分も誰かから指摘されたのでしょうね。これを直していますよね。第 6 章ではペイトンの名前が全部ペイントになってしまっている。“expired cost”と“unexpired cost”もちょっととおりの悪い訳が与えられていたりして、自分で直しているところもありますけれどね。

（眞野先生が研究した）ペイトンは長生きなのですよ。1889 年に生まれて、亡くなった

---

101 平井泰太郎（1896-1971）先生は、1920（大正 9）年に神戸高等商業学校（現神戸大学）に着任され、神戸商業大学、神戸経済大学、神戸大学と変遷をたどる中、1960（昭和 35）年に停年退官を迎えられるまで勤められ、同大学の名誉教授となられた。

102 現在も眞野先生の集められた書籍は、眞野文庫として北海学園大学に残されている。

103 内田先生によると、正確には 10 階建てとのことである。

104 今村聡先生は、現在、北海学園大学で教授として勤務されている。本研究において、久野先生、内田先生とともに資料提供等において多大なご協力をいただいた。ここに記して感謝申し上げる。

のが 1991 年ですから、101 歳。それに引き替え、眞野さんは昭和 10（1935）年生まれで、49 歳でなくなっています。（ペイトンの）半分も生きられなかった。だから、100 歳以上の天寿を全うしたペイトン（1889 年 7 月 19 日から 1991 年 4 月 21 日）の研究者でありながら、残念ながら研究者自身はその半分も生きられないで一生を終えてしまった。言葉の綾“a figure of speech”ですが、眞野先生も長生きされていたら著書を直すことができたはずです。それを言いたいのです。

② 女性研究者としての苦労や職場での様子

[小林先生インタビュー]

――当時の経営学研究科では女性の院生はどのような状況でしたか。

（眞野先生以外の女性の院生は）いなかったと思いますけれど。眞野さんが（経営学研究科では）最初だと。眞野さんの前に、女性は記憶ありませんけれど。（能勢先生は）経済学研究科ですから。

――北海道に移られてからの眞野先生についてご存知のことはありますか。

（北海道に移られてからは）あまり繋がりはありません。ただ、この記念論集（追悼号）の時は眞野（脩）さんから私のところに電話で依頼があり、アレンジは眞野（脩）さんがしておられた。岸（悦三）[105]さんに頼んだのも眞野（脩）さんだと思いますね。

――眞野先生の研究についてご存知のことを教えてください。

（学部を過ごした大阪経済大学）の時の先生の指導を受けて、ペイトンを選んでやったのは、その影響が強いのではないかと思いますけれどね。その（学部時代の）先生の勧めだと思います。頑張り屋さんでしたからね。眞野さんも。能勢さんとはちょっと違うけれど、1 つのことに集中して研究を深められるタイプだったと思います。ペイトン一筋の頑張り屋さんを表していますよね。その辺は能勢先生も眞野先生もどちらもずっと守備範囲が基本的にはしっかりとしていたというか。（神戸大学にいる女性研究者という繋がりで、眞野先生は能勢先生にも研究の）相談はされていたと思いますけれどね。

[105] 岸悦三（1932- ）先生は、1963（昭和 38）年に広島商科大学（現広島修道大学）に着任され、停年退官を迎える 1999（平成 11）年まで務められ、同大学の名誉教授となられている。

[宮坂先生インタビュー]

――女性研究者だからこその苦労を感じられたことはありますか。

あまりそのようなことを気にしていらっしゃらないような感じの先生でしたね。あんまり（ご苦労を）見せたことのない方だったからね。割り切った性格の先生だったと思いますけれどね、性格的にはね。スパっと何か、そんなにだから（ご苦労は見せなかった）。そういえば、教授会に来られた時に、今思い出したけれど、手が震えていて、何でですかと言ったら、交通事故にちょっと遭いそうになって、今思うとまだ震えてしまうと。あら、先生でもこんなことあるのだと思って、（そういうことも）あったからね。普段は割とそんなこと、微塵も見せる先生ではなかったから。

――眞野先生は教育に対して、特に学生指導についてはどのように対応されていましたか。

それは、面倒はきちんと。北海学園は基本的に、二部（夜間部）もありました。夜間です。だからお昼に 2 コマ、夜に 2 コマが基本だったと思いますけれど。あれ（二部の講義は）、キツイですね。（二部の開始は）5 時半か 6 時か、何かそのくらいからであって、休み時間はそんなに長くなかった。9 時に終わっていましたからね。（二部で）北海学園に来るのは、道庁関係と役所関係、自衛隊もそう、資格を取るために。だから結構、賑わうというか。昼の学生さんよりもきちんと質問してきていたりしてね。北海学園というのは、官庁に強いというイメージがあり、道庁や役所に OB が多いですからね。

ゼミは全部、3・4 年生一緒のゼミでやっていましたね。学生さんには人気がありました。（当時、眞野先生以外の女性の教員は）北海学園はね、経済学・経営学系にはおられませんでした。眞野先生だけですね。いわゆる昔の教養ありますよね、あれは別に教養学部ではなく、教養部として別組織になっていたのですけれど。大学内部の組織で。そこには何人かいらっしゃいましたけれども、専門のほうであの時、経済学部だけだったのですよね。経済学部経営学科で。（眞野先生以外は）いらっしゃらなかったですね。

（眞野先生は）病に倒れてからは、ちょっと休まれては大学に出て来られて、休まれては出て来られ、そんな感じで講義をされていたと思いますね。それまで元気の塊みたいな先生だったから、そんなまさかと思いました。ここに（追悼号）に「追悼のことば」として、経済学部長であった大沼（盛男）先生が書いておられますけれどね。

「昭和 58 年秋以降、体の不調を訴えられたのであります。その後、先生は持ち前の熱意で講義を続けられ、私達同僚の、休養され療養に専念されるようにというお願いにも、「私は学生に講義をしているときが一番楽しい」というお答えで、寸暇も惜しまず教壇に立

たれたのであります。昭和59年に入り、入院加療の努力で一時期小康を保たれましたが、夏休み前再び病状が悪化し、それでも 9 月からの一学期最終講義に出講され、二学期以降の講義再開を約束されておりました。御主人の車椅子の介護で再度教壇に立った先生は、はた目には大変幸せそうでしたが、すでにその頃には全身に病巣が蔓延しており、10 月 19 日に私達は心を鬼にして休養入院をおすすめしたのでありますが、それから旬日を経ずして残念ながら不帰の客となられたのであります。」（大沼［1985］）

「御主人の車椅子の介護で」と、ここ（追悼号）に出ていますね。ご主人の脩先生が、（眞野先生の）授業のある時には夜、必ず車椅子に乗せて教室まで運ばれて、運んでというか押して、それで（眞野先生の）研究室に戻って車で帰られていたのです。それが、その車椅子介護という意味だと思います。だから、授業のある時は、最後まで授業されていて、（ご自宅のある）江別から車に乗って大学に来て、そして車椅子に乗って脩先生が押して研究室に行って、研究室から今度はユリ子先生をそのまま教室まで連れて行って、授業が終わる頃、また車椅子をずっと押して研究室まで帰って、それで車で帰っていたと。マイカーでね。（車椅子は）脩先生が押されていました。（脩先生はユリ子先生が亡くなった時）「寿命や、寿命や」と言っておられました。（まだ若かったので）余計そのような感じだったと思います。そういうふうに納得させておられたのだと思いますけれどね。これが寿命なのだ、みたいな。

――コーネル大学に外地留学に行かれた経緯を教えてください。

これはものすごく楽しみにしていらっしゃった。だから何か、すべて解放されて勉強できるとか、おっしゃっていましたものね。「イサカは良い、イサカは良い」と言っていました。ちょうど札幌と同じような緯度になるのかな、ちょっと田舎風の感じの町で。コーネル大学は経営学で、バーナード研究のメッカみたいなところだからね。だから脩先生はどうしても行きたかったのだろうと思いますけれど、それに合わせて（ユリ子）先生が（外地留学を）とられたのか、ちょうど 7 月ぐらいに行かれていますでしょう。だから途中で何か、どういうやり方をして決まったのかは知らないけれど、ものすごく心待ちにしていらっしゃいました。それで、行った後、「良かった、良かった」と言っていましたからね。何かあったら、そのイサカ、イサカって名前が出てきましたからね。（外地留学の）1 年間は充実していたのだと思います。

（当時、外地留学に他の先生方も）結構行かれて、オーストラリアとね、あとカナダと姉妹校か何かになっていて、けっこうカナダとかは行き来している人多かったですね。アメリカとかヨーロッパではなくて。北海道自体がカナダ、オーストラリアと交流があって。オーストラリアとかなり近いのですよね。それとなぜか、カナダでした。だから（アメリ

カに行かれるのは珍しく、ユリ子先生は）良かった、良かったというふうに（言っておられた）。ものすごくそれは覚えています。

[久野先生インタビュー]

――当時、北海道に眞野先生以外にも女性研究者はいらっしゃいましたか。研究環境はいかがだったでしょうか。

北海学園大学には、眞野先生お一人だったと思います。小樽商科大学にもいませんでした。彼女の前には税務会計の女性研究者がいましたね。あとは、統計学では助手として女性がいました。だから（眞野先生は）貴重な存在ですよ。（久野先生が一橋大学の院生時代において、女性は）少なかったですね。商学部と経済学部が 125 名ずつ、法学部と社会学部が 100 名ずつだったと思いますが、4 学部あわせて女性は 4 名しかいなかった。そういう時代でしたから、（眞野先生は）本当にそれだけ良く勉強されたし、苦労もされていると思います。

当時、（ご主人のお勤め先の）北大は経営学関係の人員は少なくて、マスターが出来たのも小樽商科大学より 1 年後でした。（眞野先生ご夫婦は）俗に言えば共稼ぎですけれども、今のような環境は整っていなかったので。孤軍奮闘だったでしょうね。大変だったと思いますね。

――眞野先生の教育面について、ご存知のことがあれば教えて下さい。

『損益計算書論』は授業用にも使っていました。シラバスに載っていますものね。

この死亡記事（北海道新聞夕刊 1984 年 10 月 29 日）には肝臓の異常だと載っていますが、亡くなる直前には、命にかかわる病気だということが知れ渡っていたでしょう。（その頃、）地方新聞（ブロック新聞）では五大新聞の 1 つになる、北海道新聞に（眞野先生が）お亡くなりになる直前頃、ご主人が車椅子を押して行かれて、それで講義をされたのですが、かなり大きい記事に載ったのですよ。確か、教室での写真入りで載っていたと思うのですよ。記事はまだ見つけられていなくて、僕の記憶になるのですが。30 年以上前ですから、僕の記憶間違いということもあるし、記事を探しきれていないという可能性もあると思います。ただ、それだけ、（眞野先生は）教育熱心だと言いたいのです。

――学会や勉強会での眞野先生のご様子を教えて下さい。

（会計研究学会の）北海道部会は昭和 47 年にできました[106]。眞野先生も入っていますが、あまり出席された記憶はありません[107]。女性会員は眞野さんぐらいでしょう。小樽商大研究会は、僕がアメリカから帰ってきてからだから、昭和 52～53 年くらいから始まったかな。ずっと続けていますけれど、こちらには眞野先生は参加していなかったと思います。女性一人ですからね、そういう（参加しにくい）面がありますよね。そういう環境がね。

会計史学会で僕は一緒に北海道から来たのだからと、懇親会の時に眞野さんと二人で話したことがある。（また、学会で会った時、眞野先生が）僕のギルマン会計学を見習って、良いのを書きますからと言ったので、あれ以上のものを書いて下さいと答えたことを覚えています。断片的な話ですが。

――眞野先生のペイトン研究について何かご存知のことがあれば教えて下さい。

ペイトンはとにかく花形で、最初の会計学会の会長を務めていますからね。もともとは経済学者ですが、（C. E.）スプレイグの 1917 年の *Philosophy of Accounts* と（H. R.）ハットフィールドの *Modern Accounting* の 2 冊の刺激を受けて会計学をするようになったというふうにペイトン自身が書いています。彼は University of Michigan の出身者で、現在はペイトン記念館が出来ていますね。6～7 冊は書いています。（R. A.）スティーブンソンと一緒に書いた *Principle of Accounting* が 1918 年で、（A. C.）リトルトンと一緒に書いた An *Introduction to Corporate Accounting Standards* が 1940 年ですよね。少なくとも共著が 2 冊ありますし、弟子が追悼号で書いているものもあります。1955 年には息子さん、ペイトン Jr.と一緒に出した *Corporation Accounts and Statements* もありますし。私が一番推したいのは 1922 年に書いた、*Accounting Theory* です。著書の形では、これがおそらく会計学会で、アメリカだけでなく日本も含めて公準論を展開したはじめでしょう。たとえば、原価計算の前提となる、原価が集計されていく Cost Attachment、先入先出法、後入先出法という順序の公準とかは、ペイトンが編み出した言葉ですね。*Accounting Theory* に出ています。彼の学説を知るには一番良いと思います。彼の主張は、スティーブンソンとの本では時価主義で出発して、リトルトンと仲良くなって *Introduction to Corporate Accounting Standards* を書く頃には原価主義になって、また時価主義に戻ってくる。ペイトンは、経済が、実態がそのように変わるから、それに合わせて私も理論展開していると言っており、これも一理あるのだよね。

（ペイトン研究の）業績も多いし、大変だということは分かりますけれど、残念ながら、

---

106 第一回北海道部会は、1972（昭和 47）年 7 月 8 日に札幌にある北海道経済センターにおいて行われた。また、同年 12 月 9 日には第二回北海道部会が札幌短期大学にて開催された（日本会計研究学会［1973］1 頁）。以後、年 2 回、北海道部会が開催されている。

107 眞野先生は、北海道部会が設立されて以降、先生が逝去されるまでの間、当該部会で一度報告を行っている。それは 1973（昭和 48）年 12 月 1 日に北海道経済センターで開催された第三回北海道部会であり、報告タイトルは「減価償却資産の測定をめぐって」であった（日本会計研究学会［1974］35 頁）。

本当にきっちりとまとめたものはないのですよ。あれだけの大物でありながらね。日本でも黒澤（清）さんと同じように、理論ベースだけではなくて、細かい会計処理までペイトンは書いているのです。簿記的な処理手続きはずいぶん勉強になった。たとえば、保険料とか消耗品の処理の仕方で、消耗品だと資産でまず書いて、会計期末に消耗品費に移すという処理方法は、最初、資産で捉えるから Asset method というと。消耗品費で計上していれば、Expense method というような細かいことを、ちゃんと書いているのですよ。（眞野先生の研究は）*Corporation Accounts and Statements* が中心ですね。その（細かい簿記処理の）勉強をやっているようですね。

③ 家庭と職場との両立への工夫や家庭での様子

[宮坂先生インタビュー]

――眞野先生ご夫婦のエピソードを教えてください。

たぶん（ご夫婦の）出会いというのは、ユリ子先生は脩先生が大阪経済大学で教えていらっしゃった時の、要するにお弟子さんというか、学生さん。そういう形で何かお知り合いに、最初はなったのではないかと思うのですけれどね。脩先生が非常勤に行かれた時にいらっしゃったのではないかと思うのですけれど。たぶん、学生の時だと思いますね、ユリ子先生が。ちょうど、たぶんこれ（眞野先生の略歴）を見たら、その北海学園で公募があったので、龍谷を辞めて行かれたのですよね。とにかく仲の良いご夫婦だったからね。ユリちゃん、ユリちゃんと言って、（脩）先生言っていましたから、ご自宅に伺ったら。脩先生がこんな言葉を使うのだと思った。（ユリ子先生が脩先生をどう呼んでいたかは）あまり記憶にないのだけれどね。書斎が 2 階に 2 つあって（忙しい合間をぬってそこで研究していた）。

家の中で犬を飼っていましたからね。犬と一緒に子供さんを育てておられた。北海道だから、あんまり外では飼育できなくて、家の中で（飼っておられた）。大きい犬でね、（確か「ショーン」という名前で）コリー犬のでかいやつだったと思うのだけど。江別で、ちょっと札幌から離れているところで。お手伝いさんもいたような気がしますけれどね。掃除してくれる人がいたのではないかと。（眞野先生がご家庭で家事をされていたかどうかは）イメージはなかったですけれど、言われると、ご飯を食べさせていただいたこともありますしね。

――家庭と仕事と、どのように両立されていたのでしょうか。

そうですね。当時の北海学園には、会計学のプロパーというのは、秋葉（国利）先生がおられて、あと内田昌利先生ですね。面倒見の良い方で、ユリ子先生は･････。

脩先生のことを第一に考えていらっしゃるような感じだったけれどね。お嬢様のことは別としてね。自分の研究は、その間に時間を作ってやっていたのだろうなと。教授会ではあまり発言されないで、行政や意思決定にはあまり関わっていなかったような感じですね。初めて聞きましたけれど、管理会計の講座を設ける[108]など、やっぱり執念みたいなものがあったのでしょうかね。北海道で経営学をきちんと教えなければという気持ちは、お二人にはあったのだと思いますね。自分の中で区別、だからできることとできないこと、区別していたのでは。北海学園では、学部長がいて、協議員だったかな、要するにサブする人が二人いましたが、私がいた時は、ユリ子先生は協議員にもなられていなかったと思いますね。（管理運営にはタッチしないというスタンスを持つ方もおられた）そういう時代だったのではないかと思いますけれども。

（4）小括

以上、歴史研究として対象とした眞野先生の足跡と業績について考察してきたが、その結果、①研究者になられた、また専門分野・研究テーマの専攻のきっかけ、②研究継続の原動力と研究業績、③学内行政、ならびに社会貢献活動、④研究教育（仕事）と家庭の両立という形でまとめると、次のようにいえると考える。

① 眞野先生の研究者となられたきっかけは、学部時代ご指導を受け、後にご夫君となられる脩先生への敬愛の念と推察され、そうして進学した大学院ゼミの山下勝治先生のご指導により、ペイトン学説研究に取り組むことになった。まさに、ペイトン学説研究者、眞野先生の道筋は、敬愛し、また尊敬する恩師によるところが大きい。

② 眞野先生は、そうして取り組み始めたペイトン学説研究に、生涯心血を注ぎ継続している。ペイトン学説研究一筋であり、呻吟とも思える推敲を重ねて著作を著している。

　そのような研究継続と業績の原動力としては、なによりも研究テーマ究明への強い意志があり、くわえて脩先生の北海道の地に経営学を広めたいという志を理解し支え、経営学と会計学の違いはあれ研鑽されていたと伺ったところである。

③ 学内行政については、ご家庭等ご自身のおかれた環境を見極め、その中で、会計関係領域の整備・充実等自らの役割に徹して務められた。

---

108 北海学園大学で管理会計論を担当された内田先生が着任された当初、北海道大学や小樽商科大学でも「管理会計」という科目が置かれていない時代（小樽商科大学では予算統制論や原価管理論といった各論科目は設置されていた）で、管理会計の専任を置く大学はまだ少なかったとされる。その中で、北海学園大学に管理会計論の専任を置くことになった経緯として、会計学担当であった眞野先生の先進的なお考えの影響が強かったとのことである。眞野先生の追悼号でも、眞野先生は経営学科の拡充、会計関連科目の整備に多大の貢献を果たされたと記されている。そして、会計といえば財務会計を意味していた時代に、申し訳なさそうに管理会計をお願いされたと、内田先生は振り返られている（内田［2014］275頁；大沼［1985］）。

また、学外では、行政や企業など幅広く、北海道内を飛び回って活躍される脩先生のスケジュール管理までされ、その秘書役の印象が強いと伺う。

④ ご家庭は敬愛する脩先生とともに築かれ、脩先生の志を大切にして、研究面でも私生活でも取り組まれたパワフルな仕事と家庭の両立がみられる。

同時に、そのような眞野先生を脩先生がどれほど大切にされていたかは、眞野先生ご逝去後編まれた『眞野ユリ子教授追悼号』の編集に脩先生がお力を入れておられたことから明らかである。

4　山浦瑛子先生の業績と足跡

(1) 経歴

山浦瑛子先生は、1940（昭和 15）年 4 月 28 日、山形県米沢市で出生された。

1959（昭和 34）年 4 月には、高崎経済大学経済学部に「当時絶対数が少なかった女子学生のパイオニア」として入学され、在学中は山崎旭[109]先生のゼミナールに所属されていた。その進学に関して、山浦先生の修士課程における最初の教え子である高崎商科大学の後藤小百合[110]先生がインタビューで次のように話されている。

「*山浦先生は・・・・・お医者さんのご一家だったというふうにお聞きしています。山浦先生以外はみんなお医者さんになられているみたいなお話でしたね。*」（インタビュー207 頁）

そしてその進学は山浦先生のいわば人生を決定づけたことになり、高崎経済大学に奉職され、定年退職までの 37 年間、研究教育とともに母校の管理運営のための心血を注がれることになったのである。このことは、『山浦瑛子教授定年退職記念号』のおける石川弘道学部長（当時）の「発刊に寄せて」にみられるとおりである。

「山浦先生には研究・教育そして大学院の開設に際し、常に高崎経済大学の発展を願う姿勢が基本にあったように思われます。それは先生が本学の卒業生であることからくるものと推察されます。」（石川［2006］ v･vi 頁）

1963（昭和 38）年 4 月、高崎経済大学をご卒業後すぐには、株式会社旺文社書籍編集部に入社され、同社には約 3 年間、勤務された。この間で培われた能力については、後藤先生がインタビューで興味深い話をされている。

「*大学卒業後、旺文社に就職されていたので、文章の校正とか経験されていたようです。私が修士論文を提出すると、誤字脱字をバババっと見つけるのがすごく早くて。『私早いでしょう、旺文社で鍛えたからね』みたいなお話をされていました。そのままやめないでそこにいればきっと編集長とかそういう仕事ができるような素質のあるかただと思っていましたけどね。*」（インタビュー204 頁）

旺文社に勤務される一方で、1967（昭和 42）年 4 月には拓殖大学大学院商学研究科修士課程に進学され、山浦先生は研究人生をスタートされた。大堺利實[111]先生のもと研究を進

---

[109] 山崎旭（1922-2003）先生は、高崎大学経済学部において財務会計をご担当され、1978（昭和 53）年 1 月 9 日から 1980（昭和 55）年 1 月 8 日および 1984（昭和 59）年 1 月 18 日から 1990（平成 2 年）1 月 17 日まで同大学の学長を務められた。

[110] 後藤小百合先生のご専門は財務会計。高崎商科大学商学部にご勤務されている。1987（昭和 62）年、高崎経済大学経済学部にご入学され、在学中は、山浦先生ご担当の会計学原理や原価計算論の授業を受講された。ご卒業後、一度、教師として高等学校に勤務された後、2002（平成 14）年、同大学院経済・経営研究科博士課程前期課程に進まれた。山浦先生が同研究科で指導教官をご担当された最初の学生である。

[111] 大堺利實（1928-2004）先生は、1951（昭和 26）年 3 月に拓殖大学商学部をご卒業後、東京都立第二商業高等学校教諭となられた。そのかたわら、1960（昭和 35）年に拓殖大学大学院へ進学され、1962（昭和 37）年 3 月に拓殖大学大学院修士課程を主席で修了されると同時に、同大学に講師として着任さ

められ、修士論文『減価償却の問題点』（拓殖大学）を執筆されている。1969（昭和 44）年 3 月には商学修士を取得され、同年 4 月、母校である高崎経済大学の経済学部に助手として着任された。その後、助教授、教授と昇進されるとともに研究、教育、学内行政さらに社会貢献とあらゆる領域で活躍された。あわせて、1971（昭和 46）年には税理士登録、1987（昭和 62）年には宅地宅建取引主任者登録をされている。

山浦先生の研究は精力的で数多くかつ多彩である。研究分野としては、フランス会計学研究を核として、さらに企業・地域・社会の幅広い分野における諸テーマに取り組まれている。

研究の核であったフランス会計学研究については、1973（昭和 48）年 9 月に、「ながい間大事にあたためてきた」という、フランス会計学の権威であるジャン・フーラスティエ[112]著 *La Comptabilité*（Presses Universitaires de France）を翻訳し、『フランス会計学』（白水社）として出版された。その翌月からは、フランスのボルドー大学の経営管理研究所に約 1 年間、客員研究員として留学され[113]、留学から帰国された後は、一層フランス会計学研究に邁進されている。

ボルドーでの留学生活は、「ボルドーの想い出」の中でいきいきと表され、やはり精力的である。

「1972 年 1 月下旬にボルドー大学経営管理研究所長 M. Louis RIVES からの研究許可を得られてから渡仏までには、諸事情から約 1 年半の期間があったにも拘らず、フランス人には稀なる性格ともいうべきか、非常に温情を以て私の到着を待ってくれた。・・・・・最初の海外にて、しかもか弱き女性 1 人、くじけちゃならぬとくそ度胸を出せば万事好都

れた。1999（平成 11）年 3 月に定年退職を迎えられ、名誉教授の称号を授与されている。

大堺先生は「大学でのテキストとして公表を博しロングセラー」となる一般簿記書や原価計算論の教科書を記されている（嶋［2004］146 頁）。山浦先生も大堺先生が編著を務められた『基本簿記教科書』では，第 5 章「株式会社」および第 6 章「本支店会計」を執筆されている。また、大堺先生の退官記念論文集『21 世紀社会の企業情報―諸企業情報の変貌を見据えて―』では、山浦先生は編著者を務められており、「新学部設置や大学院開設、そして今年開学 100 周年を迎える拓殖大学記念行事の諸準備等々のすべてを学長として整備された先生は、平成 11 年 3 月定年退職された。先生の薫陶を受けた者は数多く、全国各地はもとより海外にもおよび、幅広い分野・領域で活躍している。」（山浦［2000］iii 頁）と述べられている。

[112] Jean Fourustié（1907-1990）は、経済学者、政治学者等との評価もある一方で、経済の専門学者ではなくフランスの法学者デュルケム・シミヤンの流れをくみ、統計的事実に基づいて新しい立場で経済現象を分析した人物との評もみられる。フランス政府の要職、パリ統計院総裁、ソルボンヌ大学で経済や会計学の講義を担当するなど、学識と実務経験に富んでおり、レジオン・ドヌール勲章を授与されている（川喜田［1966］137 頁；小関［1975］60 頁；藤井［1955］160-161 頁）。フーラスティエによる著作は山浦先生が翻訳された会計学に関する著書にとどまらず、同じ文庫クセジュのシリーズにおいては『生産性』（1955 年）、『明日の歴史』（1960 年）、『なんのために働くか』（1966 年）が翻訳・出版されている。

[113] 財務会計担当であり同研究所の所長でもある M. Louis RIVES 教授のもとで研究を進められた。
山浦先生は、1979（昭和 54）年より 4 年間、フランス語を活かして、群馬県短期大学でフランス語をご担当されることになった。

合に運ぶものである。」（山浦［1975］181 頁）

「ボルドー大学経営管理研究所（Institutd'Administration des Entreprises、 I. A. E. と略す）に、所長 M. Louis RIVES を訪ねる・・・・・Mme RIVES が両手を拡げて迎えてくれ、『何故到着の時間を知らせてくれなかった。空港まで車で迎えに行ったのに』といわれ、そのやさしさに心が和む。彼女も、M. RIVES 同様、I. A. E.の教授であり、足の悪い夫を助けながらの彼女の研究態度・意欲にファイトを燃やす。・・・・・早速、私の研究方法について意見の交換を行うが、上記『フランス会計学』の翻訳書を刊行したとはいえ、未だ日本の会計学会におけるフランス会計学の知られざる実情から私が 1 年間という留学期間にこだわらず、理論的にじっくりと取り組んでいきたい意向を伝え、我々の研究方針が定まる。」（山浦［1975］184 頁）

「学部 I. A. E.に於ける教授の講座出席並びに I. A. E.付属図書館の利用許可を得る。学部への出席は研究内容からは全く意義はないが、教授の教育風景から何かをくみとる事が出来るのではないか。それがひいては、帰国後の私の講義に少しでも有効であればと考えての上である。」（山浦［1975］184-185 頁）

「電話が、有名なブドー酒会社から入った。程なく、社長の代理であるといって訪ねてきた社員は、日本のさる大会社からのブドー酒買付に関する手紙を手にしており、その交渉の際の援助を必要としているという。これが起点となり、私はボルドーのブドー酒会社、更にはブドー酒連合組合とのつながりが帰国まで続くのである。」（山浦［1975］189 頁）

こうして取り組まれたフランス会計学研究の集大成として博士論文『フランス会計学研究：会計と敬愛の接点をジャン・フーラスティエ思考・社会思考に探る』（拓殖大学）を執筆され、拓殖大学大学院から博士号（商学）を取得された。これは、拓殖大学大学院が学外に出した最初の博士号であったという。同著は、3 年後の 1997（平成 9）年 9 月、『フランス会計論』として創成社より出版された。

このような山浦先生の研究姿勢について、『山浦瑛子教授定年退職記念号』で木暮至学長（当時）は次のように述べられている。

「このように真の研究者としての孤高を持ち続けられた先生は、真摯な飽くなき学問研究への態度を示（されていました。）」（木暮［2006］iii 頁）

山浦先生のフランス会計学研究の動機は何であったのか。このことに関して「ながい間大事にあたためてきた」という『フランス会計学』の訳者まえがきとして次のように述べられている。

「これからの会計は、これまでの理論的緻密性をもつドイツ会計学、あるいは実践指導性にすぐれるアメリカ会計学では、進むべき方向が定まらない。そこで、その中間としての、あるいはそのどちらにも影響されることなく独自の道を歩みつづけるフランス会

計学に活路を見出し、本書発行を機会にフランス会計学の位置づけを再確認すべく努力を重ねたい」（山浦訳［1973］5 頁）

また、後藤先生は、特に山浦先生とフランスとの関係について、思い出深い様子で次のように語られた。

「*何しろとてもフランスかぶれ。かぶれって言ったら失礼ですけれど、フランスという国が好きな方で。・・・・・パリにアパルトマンを所有していて、将来、大学を退職して自由な身になったら、日本とパリを往復するような生活をしたいと。*」（インタビュー197 頁）

山浦先生は、フランスに心酔しフランス会計学研究に邁進されながら、教育にも熱心に取り組まれ、原価計算、経営財務論、簿記等に関するテキストを多く出版されている。その熱心な教育について、後藤先生はインタビューで、学部時代と大学院時代に受けたご指導を次々と語ってくださった。学部における原価計算の講義での忘れられないこととして、

「*私が一番記憶に残っているのが総合原価計算なのですけれど、総合原価計算表を作って計算をしているところで私がつまっていたら、階段教室のような広い教室でございましたが、足を止めて、『ここはね、これとこれでこの金額は出すのだよ。』みたいなことを教えてくださる。こんなにたくさん（学生が）いるのに、よく間違えたところ発見できるな、というのがとても学生時代に記憶に残っております。*」（インタビュー203 頁）

大学院時代のご指導については、

「*私が大学院に入った時に、『後藤さん、好きなことを好きなだけやりなさい』と言ってくださいました。『好きなことを好きなだけやって良い』と言ってくださったことは、はっきり覚えています。*」（インタビュー203 頁）

博士課程前期課程で山浦先生のご指導を受けた狩野孝夫先生[114]も、インタビューで次のように述べられた。

「*『あなた書くときはね、私はこの世の中で 1 番最高のものを書いていると思って、書いてみたら。』と言われました。そういうふうに言ってくれるので、それで良い調子を取り戻して書き進めることができました。しかしながら私が 1 番良いと思って書きあげた修論は、事前審査のプレゼンでは、メタメタに批判されました。指導するところは指導されておりました。*」（インタビュー205-206 頁）

山浦先生の細やかなご指導ぶりと、修士課程ゼミナールでののびのびとしながらも厳しいご指導ぶりを窺うことができる。このようなご指導ぶりと同時に驚くべきは、特に大学院の授業が「大変ハードな状況」の中で行われていたことである。後藤先生によれば、

「*研究科長の仕事と後期課程の設立の仕事を抱えながら、大学院の授業が昼夜開講です。夜結構遅くまで、先生こんな時間まで講義をされて身体は大丈夫なのですか、みたいなことを雑談したことを覚えています。*」（インタビュー205 頁）

---

114 狩野孝夫先生のご専門は中小企業財務コンサルタント。宇野会計事務所の税務監査部長を務められるとともに、前橋工科大学地域連携推進センターの客員研究員として、人工知能、脳情報学の世界大会を前橋において企画運営をされている。

とのことであった。

また、山浦先生の教育姿勢について、特徴的なことは実践重視ということである。学部のゼミナールでは、「グローバルな展開を見せる企業を対象とする会計は、机上で理論のみを学習するばかりでなく、実際に企業がどうあるべきかを知ることにより、学習意欲を高め、企業に対する関心を抱くことにつながる」（山浦［1994c］35 頁）との考えから、学生にアンケート調査を通して企業経営の実態に触れる機会を与え，指導されていた。

この実践重視は、大学院設置にあたっても反映され、経済経営研究科後期課程を立ち上げるための特徴として、外部の実務家を招きワークショップ形式の授業を導入している。

山浦先生の精力は研究、教育に止まらず、学内行政でもいかんなく発揮されている。1992（平成 4）年 2 月に経済学部経営学科長を、2000（平成 12）年 4 月には経済学部長を、2002（平成 14）年から退職時まで大学院経済・経営研究科長を務められた。1997（平成 9）年から高崎経済大学で山浦先生と同じ会計分野に所属するようになった水口剛先生[115]は、山浦先生の学内行政における卓越した管理運営能力を、インタビューで何度も強調された。インタビューの冒頭では、次のように述懐された。

「*山浦先生は非常にインパクトの強い方でしたし、私はとても強い印象を受けました。その時代に女性で研究者を続けるためには必要なことだったのかもしれませんが、ある意味、戦いに勝ち残ってきた人という感じがしました。*」（インタビュー195 頁）

「*山浦先生に関して言えば、女性だからという理由で苦労していたとか、不利益を被っていたという印象はありませんでした。私が本学に来た後、しばらくして山浦先生は学部長になったのですが、非情に管理能力が高く、本当に優秀な学部長でした。*」（インタビュー201 頁）

続けて、

「*どういう時にこの話を教授会に出したら良いかとか、どういうふうに言ったら通りやすいかとか、そういう判断は抜群でした。人心掌握術に長けているので、彼女が学部長になった時には大きなことがよく決まりました。どういう研究科にするかとか、どういうキャッチフレーズにするかとか、普通もめるじゃないですか。それを事前に案を出して、次の教授会では決をとって、といった段取りで要領よく片づけていく。そういう能力に長けていました。研究だけしていても身に付かない能力ですよね。*」（インタビュー202 頁）

「*山浦先生は私が見た中では抜群の学部長でした。*」（インタビュー201 頁）

山浦先生のご手腕が最も発揮されたのは、高崎経済大学の経済・経営研究科の大学院設

[115] 水口剛先生のご専門は責任投資と非財務情報開示。1997（平成 9）年 4 月に高崎経済大学経済学部に着任され、2008（平成 20）年より同大学教授。現在は経済・経営研究科長を務められている。

置においてといえるかもしれない。高崎経済大学論集の『山浦瑛子教授定年退職記念号』において、石川弘道先生は、山浦先生のご尽力について次のように述べられている。

「山浦教授は経済学部長に引き続き、経済・経営研究科長を 2 期務められて退職を迎えられました。この間に経済学部の長年の課題であった大学院の設置が実現し、本学部は名実共に経済学の教育・研究の拠点となりました。大学院設置に至る道のりは必ずしも平坦なものではありませんでしたが、先生は常に先頭に立ち、前期課程、後期課程を開設することができました。」（石川［2006］ v 頁）

このように経済・経営研究科の設置にご尽力された背景について水口先生は、

「*その理由は、地域政策学部に先を越されたという思いがあったからのようです。経済学部よりも後に地域政策学部が出来たのに、大学院では地域政策研究科が先にできましたから。以前から経済経営研究科を作らなければ、というふうに多くの人が思っていたようです。ただ、実際に実現できたのは山浦先生だけですね。*」（インタビュー202 頁）

と語られた。

山浦先生の母校愛と抜群の管理運営能力は、大学院経済・経営研究科として結実している。

山浦先生のご活躍はさらに学内にとどまらず、様々な社会貢献活動にも積極的に取り組まれていた。教授に昇格された年、群馬県中小企業団体中央会活路開拓調査指導事業委員会委員になられたことを初めとして、有識者として地域に関わり始められた[116]。1994（平成 6）年 4 月から 1995（平成 7）年 3 月まで、企業の社会貢献活動と市民・行政のパートナーシップに関する調査研究委員になられている。1998（平成 10）年 4 月からは、群馬県まちうち再生総合支援事業プロデュース支援事業マネジメントチームの商業アドバイザーおよび店街・商業集積等活性化基本構想策定に係る委員会委員および商業ワーキング委員（座長）、1999（平成 11）年 4 月から公共空間研究会委員、2000（昭和 12）年 4 月から群馬県中小企業活性化推進委員会委員および群馬県商店街競争力強化委員会委員になられている。

山浦先生は、このような社会貢献活動に関わられながら、そこで得られた、あるいは必要とされる情報や知識を企業経営の研究に活かして論稿を世に問い、また企業が一地域の一市民として地域に関わる必要性や、それによってビジネス・チャンスが生まれることを繰り返し主張されている。

このような山浦先生の大学人人生ということで、狩野さんから伺った、山浦先生の言葉は印象深い。

「*大学の中では男性の職場という意識もあったのでしょう。高経にはとくにあったよう*

[116] 1987（昭和 62）年、山浦先生は宅地建物取引主任者登録をされている。また、2004（平成 17）年から 2 期連続で、不動産鑑定士試験第 2 次試験委員になられている。

な気がします。山浦先生は、いつもピンと背筋を伸ばして立っており、服装にも隙がありませんでした。」（インタビュー205 頁）

こうして、存分にご活躍された山浦先生の大切な支えは、「社内結婚」といわれる山本喜則[117]先生とのご結婚であったようである。1983（昭和 58）年には、勤務先の高崎経済大学経済学部に山本先生が着任され、後に山浦先生は山本先生とご結婚される。山浦先生は、軽井沢を第二の故郷として愛されており、ご夫君となられた山本先生とともに、頻繁に軽井沢に通われていた。2000（平成 12）年 12 月には、山本先生との共著で『「聖地」軽井沢―リゾートという分野の「日本の顔」に未来はあるか―』も出版されている。

山浦先生と山本先生の夫婦仲は大変良いもので、水口先生はインタビューで次のように話されている。

「*山浦先生も山本先生を大切にされていたようで、・・・・・時に山本先生のお話をされる時など、仲が良さそうだなという感じを受けました。*」（インタビュー206 頁）

「*山本先生は山浦先生が学部長や研究科長だった時は、だいぶ役職などもして、支えていました。ですが、山浦先生が亡くなられたらもう役職も一切されなくなりました。*」（インタビュー203 頁）

2006（平成 18）年 3 月、山浦先生は高崎経済大学を停年で退職され、国士館大学アジア太平洋学科に移られた。しかし、山浦先生は、その 2 年後の 2008（平成 20）年 2 月 14 日、映画鑑賞中にくも膜下出血で倒れられ、きびしい闘病生活となった。その闘病生活を全面的に、そして献身的に支えられたのは山本先生であったと伺う。

倒れられて 2 年半後の 2010（平成 22）年 10 月、山浦先生はご逝去され、山本先生ご自身によるお別れの会で、「最後は涙ながらのご挨拶」により送られたのである。

以上の山浦先生の略歴を、『山浦瑛子教授定年退職記念号』所収の略歴にそってまとめると、図表Ⅴ-4-1 のとおりとなる。

---

[117] 山本喜則先生（1953-2015）は 1971（昭和 46）年に東京教育大学を卒業後、1 年間、東京教育大学理学部の専攻生として大学に残られた。東京都立東大和高等学校教諭、岡山理科大学大学院システム科学専攻専任助手を経て、1984（昭和 59）年 4 月より高崎経済大学経済学部に着任され情報処理関連の授業を担当され、2014（平成 26）年に同大を停年退職されている。この間、山浦先生とともに歩まれた山本先生について、石川弘道先生は「奥様を敬愛し、長期の休暇や週末にはご夫婦で軽井沢の生活を満喫され、『聖地「軽井沢」』という著書をお二人で出版されています。」（石川［2014］ⅱ頁）と記されている。また、山本先生からいただいたメールによると、山浦先生は「結局パソコンを覚えなかったため」山浦先生の研究業績等は山本先生が作成されていたとのことで、当該歴史研究に必要なデータを提供してくださった。ここに記して感謝申し上げる。

図表Ⅴ-4-1　山浦瑛子先生略歴[118]

西暦	和暦	年	月	学歴・職歴	私生活
1940	昭和	15	4		米沢にて出生
1959	昭和	34	4	高崎経済大学経済学部経済学科入学	
1963	昭和	38	3	高崎経済大学経済学部経済学科卒業	
1963	昭和	38	4	株式会社旺文社書籍編集部入社(～1966(昭和41)年6月まで)	
1967	昭和	42	4	拓殖大学大学院商学研究科修士課程入学	
1969	昭和	44	3	拓殖大学大学院商学研究科修士課程修了(商学修士)(第537号)	
1969	昭和	44	4	高崎経済大学経済学部助手(～1972(昭和47)年3月まで)	
1969	昭和	44	4	日本会計研究学会会員	
1971	昭和	46	3	拓殖大学大学院経済学研究科修士課程修了(経済学修士)(第644号)	
1971	昭和	46	6	税理士登録(第3522号国税庁)	
1972	昭和	47	4	高崎経済大学経済学部専任講師(経営財務論、演習、外書講読担当)(～1975(昭和50)年3月まで)	
1973	昭和	48	10	フランス・ボルドー大学経営管理研究所に客員研究員として留学(～1974(昭和49)年8月まで)	
1975	昭和	50	4	高崎経済大学経済学部助教授(経営財務論、原価計算論、演習担当)(～1981(昭和56)年3月まで)	
1979	昭和	54	4	群馬女子短期大学兼任講師(フランス語担当)(～1983(昭和58)年3月まで)	
1980	昭和	55	2	高崎経済大学学生部就職委員長(～1982(昭和57)年1月まで)	
1981	昭和	56		就職委員長(～1982(昭和57)年まで)	
1981	昭和	56	4	高崎経済大学経済学部教授(会計学原理、原価計算論、演習担当)	
1981	昭和	56	4	群馬県中小企業団体中央会活路開拓調査指導事業委員会委員(～1982(昭和57)年3月まで)	
1982	昭和	57	4	日本原価計算研究学会会員	
1985	昭和	60	4	群馬女子短期大学兼任講師(会計学、管理会計論担当)(～1998(平成10)年10月まで)	
1987	昭和	62	12	宅地建物取引主任者登録(第133285号東京都)	
1889	平成	元	4	高崎商科短期大学兼任講師(財務管理論担当)(～1999(平成11)年3月まで)	
1991	平成	3	4	共愛学園女子短期大学兼任講師(会計論1、会計論1工担当)(～1999(平成11)年3月まで)	
1992	平成	4	2	高崎経済大学教務部経営学科長(～1994(平成6)年1月まで)	
1994	平成	6	4	博士(商学)取得(拓殖大学博乙第14号)	
1994	平成	6	4	企業の社会貢献活動と市民・行政のパートナーシップに関する調査研究委員(～1995(平成7)年3月まで)	
1998	平成	10	4	新潟産業大学兼任講師(財務管理論担当)(～1999(平成11)年3月まで)	
1998	平成	10	4	群馬県まちうち再生総合支援事業プロデュース支援事業マネジメントチーム商業アドバイザー	
1998	平成	10	4	商店街・商業集積等活性化基本構想策定に係る委員会委員及び商業ワーキング委員、座長(～2000(平成12)年3月まで)	

118 「山浦瑛子教授　略歴および研究業績」に基づく記述には、1969（昭和 44）年 4 月に会計研究学会に入会したと記載しているが、当該学会の記録によると 1970（昭和 45）年に入会されているようである。

西暦	和暦	年	月	学歴・職歴	私生活
1999	平成	11	4	共愛学園前橋国際大学兼任講師(財務会計1、財務会計1工、簿記1、簿記II担当)	
1999	平成	11	4	公共空間研究会委員(～2000(平成12)年4月まで)	
2000	平成	12	4	高崎経済大学経済学部長(～2002(平成14)年3月まで)	
2000	平成	12	4	群馬県中小企業活性化推進委員会委員	
2000	平成	12	4	群馬県商店街競争力強化委員会委員	
2002	平成	14	4	高崎経済大学大学院経済・経営研究科長(～2004(平成16)年3月まで)	
2002	平成	14	9	日本会計研究学会スタディグループ「各国プラン・コンタブルの比較研究」委員	
2004	平成	16	4	高崎経済大学大学院経済・経営研究科長(～2006(平成18)年まで)	
2004	平成	16	12	平成17年不動産鑑定士試験第2次試験委員(国土交通大臣任命)	
2005	平成	17	12	平成18年不動産鑑定士試験第2次試験委員(国土交通大臣任命)	
2006	平成	18	3	高崎経済大学退職	
2006	平成	18	4	国士館大学アジア太平洋学科着任	
2008	平成	20	3	国士館大学アジア太平洋学科退職	
2010	平成	22	10		東京にて逝去

(2) 研究業績

山浦瑛子先生の研究業績は後述の図表Ⅴ-4-2 のように、単著・共著をあわせ改訂版もくわえると 38 篇、論文等として 50 篇を超える多大なものであるが、それを大きく分類すると、次の 3 つになると思われる。すなわち、何よりも第一に、主要な研究分野であるフランス会計学研究に関するもの、第二に、企業の社会貢献活動や財務分析、また環境監査等企業・地域・社会の幅広い分野に関するもの、第三に、熱心に取り組まれた教育に関連するテキストに属するもの、である。

このような山浦先生の研究業績について、先生が長年勤められた高崎経済大学を停年退職されるに際し編まれた『山浦瑛子教授定年退職記念号』において、高崎経済大学経済学会会長であられた北條勇作先生が「発刊に寄せて」と題し次のような献辞を表している。

「先生の専攻分野は会計学でありますが、特にフランス会計学研究それもジャン・フーラスティエを通したフランス会計原則プラン・コンタブル研究が一つの中心であると言えましょう。別頁の業績欄にあるように、昭和 48 年既にフーラスティエの著作を翻訳され、この御書はいまや古書に分類されているようです。そして、これを皮切りに多くのフランス会計学に関する研究論文を世に発表されております。この分野でも、先生の研究はやはりパイオニアであり、その後会計学会内部でも各国の会計原則研究に携わる研究者が増えていったようです。先生のフランス会計学に関するご研究は、その後博士論文として結実され、平成 6 年拓殖大学大学院商学研究科より博士号を取得されています。余談ながら、この博士号も拓殖大学商学研究科が学外の者に出した初めての博士号であったとのことです。

先生は、企業の社会貢献活動・メセナ、環境監査、地域商店街の活性化問題、特定領域の企業群に対する財務分析、等々幾多の分野に亘り、膨大な研究論文と著書を世に出されております。直近のご単著は平成 15 年であり、先生の未だ衰えることのないその意欲には驚嘆するばかりであり、後に続くわれわれのお手本・道標になってきました。」(北條[2006] i - ii 頁)

そこで、以下山浦先生の研究業績について、前述の①フランス会計学研究に関するもの、②企業・地域・社会における幅広い分野に関するもの、③教育に関連するテキストに属するものに区分し、さらに④「直近のご単著」をくわえて、整理することにする。

① フランス会計学研究に関するもの

山浦先生が取り組んでこられたフランス会計学研究は、1994（平成 6）年に博士号を取得された博士論文『フランス会計学研究：会計と経済の接点をジャン・フーラスティエ思考（会計思考・経済思考・社会思考）に探る』(拓殖大学）として結実し、それに基づき集大成された主著『フランス会計論』が 1997（平成 9）年に公刊されている。この 2 篇を繙くと、山浦先生のフランス会計学研究の珠玉の原点であり、深い思いは、「フランスで会計

を学ぶ者はすべて必ず一度手にする名著」であるジャン・フーラスティエ著 *La Comptabilité*（Presses Universitaires de France）にあり、「ながい間大事にあたためて」1973（昭和 48）年に訳書『フランス会計学』（白水社）が、公刊されている。

この道筋に沿い、ここでは、訳書、博士論文、主著の順に取り上げ、それぞれにみられる先生のフランス会計学研究の意図や思いに迫りたいと考える。

[翻訳書：ジャン・フーラスティエ原著『フランス会計学』白水社、1973 年]

本訳書の「訳書まえがき」において、次のように述べておられる。

「会計学に関する数多い著書のなかで、現在その大勢を占めるのが経営経済学や貸借対照表論の名のもとにあるドイツ会計学であり、経営管理論や管理会計論の名のもとにあるアメリカ会計学である。しかし、会計の領域のなかで、文芸復興期にイタリアで発生をみた簿記学が 1673 年フランスの商業条例を基に年度決算法の確立、財産目録作成の法制化、会計帳簿の分割化等をはじめとして、19 世紀初頭まで会計発展に寄与し、世界会計学のなかで隆盛をきわめたのはフランス会計学である。ところが、こうした事実はほとんど知られておらず、いきおい多くの会計学者をはじめとして会計に興味を抱く者も、会計の真実な姿を見誤ることになり、訳者の本書紹介の使命は、これを指摘しただけでもその半分を達成されることになろう。…（中略）…

本書、ジャン・フーラスティエ著『フランス会計学』は、訳者がながい間大事にあたためてきたものであり、フランス会計を学ぶ者はすべて必ず一度に手にする名著であり、わが国における会計を専門とする学徒をはじめ会計に興味を抱く者にもぜひ一読をすすめたい書である。フランス会計学研究のための留学を前にしてのあわただしいなかでの刊行であり、クセジュ編集部のかたがたには非常な迷惑をかけ恐縮している。留学先のボルドー大学経営管理研究所での研究生活に成果を期待しつつ、フランス会計学の実情を公認会計士協会会員および諸企業との接触のなかで、積極的に吸収しつつ、理論と実践両面の結びつきを研究する意思である。…（中略）…

これからの会計は、これまでの理論的緻密性をもつドイツ会計学、あるいは実践指導性にすぐれるアメリカ会計学では、進むべき方向が定まらない。そこで、その中間としての、あるいはそのどちらにも影響されることなく独自の道を歩みつづけるフランス会計学に活路を見出し、本書発行を機会にフランス会計学の位置づけを再確認すべく努力を重ねたい。」（山浦訳［1973］3-5 頁）

山浦先生がこのような熱く、深い思いで翻訳された、ジャン・フーラスティエの名著は、「≪文庫クセジュ≫の一冊」であり、この文庫について、コレクション≪クセジュ≫監修者であるポール・アングールヴァンは、本訳書において「日本の読者に」と題し、次のように語っている。

「本書は≪文庫クセジュ≫の一冊である。一九四一年フランスに発足したこの文庫は、現在五百冊を刊行しており、完成のあかつきには千冊に達する予定である。≪文庫クセジュ≫は、知能に基礎的陶冶をくわえるための現代知識の焦点たらしめようという刊行者の意図によってはじめられた偉大な仕事である。…（中略）…

このたび、日本のような古い伝統につちかわれた文化国がこのフランス精神の発露を受けいれてくれることになったのをわれわれはとくにうれしく思っている。人間精神のもっとも高邁なはたらきによびかけるこの文庫の使命には、野望も私心もさらにない。日本の読者がみなこの使命を理解し、それが千年の歴史に輝く二大文化の精神的接触に寄与することを願ってやまない。」（山浦訳［1973］4-5 頁）

そして、山浦先生がこの訳書を手がけられたことのすばらしさについて、文庫「クセジュ」や発行所「白水社」の価値も含めて、小津先生へのインタビュー調査で、次のような貴重なコメントをいただいた。

「*私自身もフランス会計学を研究しているので、最初に拝読したのは山浦先生が翻訳されたフーラスティエ。フランス会計を勉強する時には、私の周りの先生方はまずこれを読んだよね、読みましたよねとおっしゃっていましたので、あの本から始めるのがまず定石という位置づけだと理解しています。・・・・・私にとって山浦先生がなぜ偉大であるかと言うと、フランス会計学研究をはじめる若手研究者が必ず読まなければいけないような本を出版されている偉大な会計学者というふうに見上げておりました。*」（インタビュー198-199 頁）

「*フランス会計（研究者）として最初（の研究者）は山浦先生ではないと思います。それでもなお山浦先生が偉大であるかと言いますと、フーラスティエの翻訳は白水社*[119]*から出版されていますから。白水社というのは、フランスに関する優れた著作を出している出版社なのですね。この白水社が翻訳権をおそらく持っているのでしょうけれども、フーラスティエのもともとの出版社、フランス大学出版（Presses Universitaires de France）に行けばきちんと書棚にあってですね、そこに並べられている本な訳です。このラ・コンタビリテ（La Comptabilité :『会計学』）のコレクション≪クセジュ≫*[120]*とい*

[119] 白水社は、フランス文化そのものを輸入したいという思いから、「文庫クセジュ」として 1951（昭和 26）年よりフランスのコレクション≪クセジュ≫を翻訳し出版している。現在も月 1 点は翻訳書の出版が続けられている（Japan Knowledge「ニッポン書物遺産：文庫クセジュ 2」http://japanknowledge.com/articles/blogheritage/que/2.html　2016 年 7 月 2 日アクセス）。

[120] 1941 年よりフランス国内で刊行が始まった「クセジュ」は、毎年 50 冊の新刊が発表されるとともに、約 100 冊がアップデートされている。哲学、心理学、宗教、歴史、地理、民族（俗）学、社会科学、自然科学、芸術、趣味、語学、文学と幅広いジャンルが取り扱われている。これは、「クセジュ」が全部揃うと百科事典になるというコンセプトによる。原著の特徴としては、①全タイトルが 128 頁であること、②著者はその分野の専門家で、一般大衆に提供していること、③頻繁にアップデートされていることの 3 点が挙げられるという。また、この「クセジュ（Que sais-je?）」は、「私は何を知っているのか？（＝何も知らないではないか）」と自分に問いかける言葉であり、ルネサンスの思想家ミシェル・ド・モンテーニュが座右の銘にしていた言葉である。このモンテーニュの思想と百科事典の精神を結びつけつつ心理を探求しようとの試みから、コレクション≪クセジュ≫と名づけられている。（Japan Knowledge「ニッポ

うのは、日本でいうと岩波書店のような教養本なのです。」（インタビュー199 頁）

「*この訳書、翻訳の価値を強調するために、あえて訳書、と申します、には、2 つの価値があると考えています。1 つは、（コレクション≪クセジュ≫という）人文・哲学系の多い教養書シリーズに、「会計学」が入っていることです。これは原本に備わっている固有の価値です。2 つめは、人文・哲学分野にある本を見つけられて、それを日本語に翻訳する必要性を認め、成し遂げられて、後学の人々を導いた、という価値です。これは、山浦先生が作られた価値と思います。*」（インタビュー200 頁）

山浦先生のフランス会計学研究は、このような、きわめて高い価値のあるジャン・フーラスティエ思考に強く共感し、深く依拠しており、それは、次の博士論文のタイトルに鮮明である。

[博士論文「フランス会計学研究：会計と経済の接点をジャン・フーラスティエ思考（会計思考・経済思考・社会思考）に探る」1994 年]

本論文の意図について、次のように明確に記されている。

「本研究は、フランス会計学の中に影響を与えるジャン・フーラスティエの会計思考を、そしてプラン・コンタブルに反映をおよぼしている彼の思考（会計思考ばかりでなく、経済思考および社会思考を含めて）を詳細に考察することを中心としながら、彼の思考の中で、会計と経済がどのように接合し、そして特異といわれる彼の思考を育成していったのかを研究するものである。更に、彼のそうした思考と類似の考え方を採用するといわれるプラン・コンタブルの中での付加価値会計の在り方、そしてフランス会計学の将来の動向を見出す努力を重ねるつもりである。」（山浦［1994a］4-5 頁）

では何故にジャン・フーラスティエ思考に共感を覚えるのか、このことについて、次のように述べられている。

「フランスは、経済学の分野において、・・・・、あるいは、社会思想史的発展の中において、比較的重要な地位を占めている。ところが、会計の分野では、経営経済学や貸借対照論の名のもとにドイツが重要な地位を占め、あるいは、経営管理論や管理会計論の名のもとにアメリカが重要な地位を占めてきており、フランスは、フェイヨル（H. Fayol）の管理論を除いては、殆ど問題にもされていなかったといっても過言ではない。

しかし、会計の領域の中で、文芸復興期にイタリアで発生をみた簿記学が、1673 年フランスの商業条例を基礎に年度決算法の確立、財産目録作成の法制化、会計帳簿の分割化等をはじめとして、19 世紀初頭まで会計発展に寄与し、世界会計学の中で隆盛をきわめたのは、実はフランス会計なのである。…（中略）…

ン書物遺産：文庫クセジュ 1」http://japanknowledge.com/articles/blogheritage/que/1.html； Japan Knowledge「文庫クセジュ」https://japanknowledge.com/contents/quesaisje/index.html　2016 年 7 月 2 日アクセス）。

フランスにおける会計の真実な姿を見誤り、フランス会計学をとるに足らないものとして無視することは、研究者にとっては決して許されるべきことではない。

…（中略）…

フランスは、第二次大戦後の・・・・・基幹産業開発計画の中で、会計制度の合理化、標準化を目標にフランス企業会計原則プラン・コンタブルを発表した。・・・・・フランス会計原則プラン・コンタブルを真の意味で「会計の憲章」と呼ぶのは、ジャン・フーラスティエである。彼の会計思考の根底には、会計を社会経済の歴史的展開の中で把握する考え方があるが、これは彼の数多くの著作に一貫して流れる独特の思考である。

…（中略）…

筆者は、一つの理論あるいは思考は、本質的に時代の落し子であり、それぞれの時代の社会経済的基盤に基づいて生み出されたものである、とする考え方を持つ。こうした観点において、ジャン・フーラスティエの会計思考に共感を覚えるのである。」（山浦[1994] 1, 3-4 頁）

[『フランス会計論』創成社、1997 年]

本書は、前述の博士論文に基づき集大成されたものであり、その意図は、基本的に博士論文と同じと窺えるが、本書の結章において、その意図の結実と意義を強く訴えておられる。

「ジャン・フーラスティエの会計思考・経済思考そして社会思考を考察し、彼の一貫した鋭い指摘を明確にしてきた。彼の思考は、21 世紀を迎える数年後、いろいろな場で脚光をあびることになると考えられるが、その思考とフランスの会計原則プラン・コンタブルは類似の考え方をしている。こうしたプラン・コンタブルと付加価値計算についても検討を進めてきた。・・・・・

フランス会計の内容上の特色は、簿記会計学としての特色を持ちながらも、そのなかに貸借対照表論や管理会計論をも含んだ広範な領域を持つ総合学であるという点である。このことが、ドイツやアメリカの会計にその多くを学び、損益計算理論に固執したわが国の会計理論からは古い思考と受け取られてきた。しかし、もちろんこの場合の貸借対照表は財産計算だけを目的としたものではなく、損益計算目的をも内包した貸借対照表であることはいうまでもない。つまり、損益計算書と貸借対照表を同列に取り扱っているということである。…（中略）…

本論文で取り上げたフーラスティエは、会計ばかりでなく管理論、経済学そして社会学等の広範な領域を研究分野とした学者であるが、プラン・コンタブルに規定された会計任務としての社会会計目的は、フーラスティエの分類によって新しく生まれたものであるといわれる。また彼の思考は、第Ⅱ部で詳細に検討してきたので繰り返し述べないが、会計になんらの定義をしないで、会計は歴史的存在であり、その目的は経済活動の記録、経済活動の結果の明示、経済活動のコントロールを容易にするものであるとする

思考は熟考に値する。…（中略）…

こうして、企業に関する経済情報の提供という社会的要請にこたえるのが会計であるとすれば、今後の会計は管理会計論や原価計算論に関する研究がますます重要になってくると考えられ、その意味でも、社会会計に役立つ資料の提供実現とみられるプラン・コンタブルを持つフランス会計は、わが国会計に規範となりうる可能性を持つ。」（山浦 [1997] 217-219 頁）

② 企業・地域・社会における幅広い分野に関するもの

山浦先生は、前述のようにフランス会計学研究に一貫して心血を注がれながら、同時に、企業や地元地域、また広く社会における諸課題やテーマを捉え、実に幅広い分野に関する論文等を表している。その多岐、多様さは、図表Ⅳ-4-2 にみられるとおりであるが、「企業の社会貢献活動と市民・行政のパートナーシップに関する調査研究」「新経営・経済時代への多元的適応」「21 世紀社会の企業情報」「IP ネットワーク社会と都市型産業」「中小資本漁業経営体に於ける財務諸表分析」「外食産業における企業倫理」「環境監査」「テーマパーク産業に関する財務的考察」「起業における資金調達手段」「高速社会の発展とスコーレ社会の到来に見る企業の経営理念」「ギャンブル型レジャー産業に関する会計学的研究」「商店街空洞化の処方せん」「「地域メセナ」としての群馬県内企業メセナ」「ギャンブル型レジャー産業の会計学的研究」「市場規模 24 兆円産業に関する一考察」等々となっている。

山浦先生の取り組まれた幅広い分野のうち、特に力を注がれ、ご自身の年来のご見解が強くみられる企業の地域社会貢献活動に関するもの、および環境監査に関するもの、3 篇をとりあげ、紹介する。

[「企業活動と地域社会貢献活動」日経連タイムス、1994 年 4 月 7 日掲載]

「重要なことは、特定地域を対象にし、企業と地域が互いに補完し合う『企業市民』としての活動である。企業を取り巻く環境が大きく変化する中で生き残るためには、一方で地域そのものが十分に魅力あるものでなければならない。地域が企業を生かし、企業が地域を生かすことによって地域社会を変える時代を迎えている。そうした中にこそ、企業の地域社会貢献活動、つまり企業市民活動が育っていくと言える」（山浦 [1994b] 2 頁）

[「環境と企業経営の接点としての『環境監査』」NOVITAS（高崎経済大学）第 4 号、1995 年]

「地域環境にやさしい企業あるいは商品づくりがうたがわれていても、何がどうやさしく、環境をどう保護しているのか明確でないことが多い。単にイメージ戦略だったり、個々の環境問題に場当たり的に対応している限り、企業の環境への取り組みは本物ではない。

いま企業に求められているのは、新しい状況（グローバル環境下）に見合った事業戦

略であり、環境保護への本格的な取り組みである。いまや企業経営のトップ課題は環境問題である。そして、その中で注目されているのが環境管理活動であり、環境監査であり、環境アセスメントである。…（中略）…

そこで、環境の基本計画作りに企業と地域（住民）が協力して取り組み、そして行政もまた積極的なバックアップを行うことで、企業・住民・行政一帯の環境基本法を構成することを提案したい。それぞれ利害の絡まるジャンル同志、その協力には困難なことが出現することは当然予想できる。しかし、環境問題はひとり企業の問題ではない。そしてまた地域住民の問題だけでもない。究極的には、地域環境保全への過程であることを注視すべきである。この観点に立てば、企業・地域そして行政が一体となっての体制作りは、前向きの形で進んでいくものと考えられる。」（山浦［1995］1-2 頁）

[「環境倫理の時代の環境監査」『新経営・経済時代への多元的適応』第 6 章、日本経済評論社、1998 年]

「20 世紀も終わりに近づいた現在、今世紀を最も端的に特徴づけているものの 1 つは、経済・社会の市場原理に基づくグローバル化ではないだろうか。グローバル化については、19 世紀末にも世界経済にその動きが出ていたともいわれるが、グローバル化が進むと、企業活動は一層自由になると同時に厳しい国際競争にさらされる。市場原理に基づき効率を追い求める企業活動が自ずと出てくるのは当然の帰結である。その結果、大量生産・大量消費・大量廃棄型システムが構築され、今日に至る。しかし、こうした環境問題をそのまま 21 世紀に引き継ぐわけにはいかず、環境に配慮した経営をどのように展開してくか―企業の社会的責任―ということが、企業にとっての最重要課題となってくる。…（中略）…

21 世紀を目前にした今日、企業はモノ（製品）を作りそれを市場で売るという片側通行型の経営から、製品として寿命を終え、廃棄物になったあとまで責任を持たなければならない資源循環型社会における（社会的）責任が求められていることを明確に認識する必要性に迫られている。これらにどう対応し、持続可能な 21 世紀の経済社会をどう迎えるか、我々人間の意識革命を含め、企業経営のあり方を考えていこうとすることが目的である。」（山浦［1998］152-153 頁）

③ 教育に関連するテキストに属するもの

山浦先生は、前述の①および②のうえに、さらに教育で関連するテキストを、しかもこちらも幅広い分野で精力的に執筆されている。そのテキスト執筆の特徴として、優れて実務性、実践性が指摘できる。

そのことは、次のような単著の意図として、記述されている。

[『入門原価計算』 創成社、1988 年]

「本書は、原価計算の理論と計算問題・実際問題を解決したものである。原価計算に関する文献は数多くあるが、なぜか理論を追及するものが多く、またあまりにもページ数の膨大なものばかりである。原価計算を勉学する者にとって、そのあまりにも分厚い文献は、その入口でとまどいを与え、またどんなに立派な理論でも、多くの計算問題や実際問題を一緒に解決してはじめて万全なものとなる。問題を解決する能力を十分に身につけることは、原価計算にとっては特に重要である。」（山浦［1988］1 頁）

[『財務会計概論』 創成社、1989 年]

「正常な金銭感覚を取り戻した国民一般が、会計に対しての知識を得たいと希望したときに、それに答えるべき工夫のある編集がおこなわれている出版物として、また本格的に会計学を学習する熱心な読者諸氏に、彼らの期待する内容をおりこんだ出版物として、本書が選ばれるべきようにとの思いで編集した。」（山浦［1989］1 頁）

[『実務にすぐ使える財務管理』 創成社、1993 年]

「財務に関する知識が豊富でなくても、また難しい公式や算式を知らなくても、財務計画を実際に理解できるようになっている。大いに参考にしてもらいたい。」（山浦[1993]「はしがき」4 頁）

④ 「直近のご単著」

山浦先生は、このように「膨大な研究論文と著書を世に出されております」が、「先生の未だ衰えることのない意欲」の表れとして、次の「直近（平成 15 年）のご単著」が出されている。

[『変革期の財務会計論』創成社、2003 年]

その趣旨は、「はしがき」に記されているとおりである。

「その社会的責任が厳しく問われ、他方では持続的発展のために環境に配慮した経済活動を行うことの責任を問われる企業にとって、21 世紀は『会計を学ぶ』ことから『会計を通して学ぶ』時代へと変革を余儀なくされる。しかし、それこそが『グローバルな視点から、企業にとっての明確なビジョンを描き、果敢にチャンスにトライ』する戦略的な経営を展開する秘策であり、財務会計にとっても大きく飛躍するチャンスであり、大きく転換できるチャンスである。本書は、こうした視座に立って財務会計の従来あったまとめ方とは全く異なる手法を採った。『会計を通して学ぶ』ことの目標理念達成へのトライである。」（山浦［2003］vi･vii 頁）

このような趣旨のもと、「第 1 部 会計学の転換期的認識」「第 2 部 環境倫理の時代にお

ける環境問題」「第 3 部 持続可能な企業発展の今日的課題－地方都市の新しいパラダイムー」という構成になっている。まさに、山浦先生の専門分野に止まらず、幅広い分野を網羅し、新たな視座で編まれた労作といえる。

以上を含む、山浦先生の著書・論文等を『山浦瑛子教授退職記念号』所収の著作一覧に、国立国会図書館、国立情報学研究所等のデータベースで確認した結果をくわえてまとめると、次頁以降の図表Ⅴ-4-2 となる。なお、論文タイトルは国立情報学研究所の表記にあわせている。

図表Ⅴ-4-2　山浦瑛子先生著作目録

著書

番号	西暦	和暦	年	月	著書名	出版社	共著／単著等	共著者(分担執筆者)	備考
1	1982	昭和	57	3	フランス会計論：プラン・コンタブル研究	中央経済社	分担執筆	番場嘉一郎監修・野村健太郎編著	第4章「プラン・コンタブルとフーラスティエの会計思考」
2	1988	昭和	63	6	入門原価計算	創成社	単著		三訂版まで増版
3	1989	平成	1	9	財務会計概論	創成社	単著		三訂版三刷まで増版
4	1993	平成	5	3	実務にすぐ役立つ財務管理	創成社	単著		改訂版まで増版
5	1993	平成	5	11	基本簿記教科書	創成社	分担執筆	大堺利實編著	改訂版四刷まで増版 第5章「株式会社会計」、第6章「本支店会計」
6	1995	平成	7	3	企業の社会貢献活動と市民・行政のパートナーシップに関する調査研究	財団法人地方行政システム研究所	共著		山浦先生は当該調査研究の委員
7	1996	平成	8	3	原価計算論	創成社	単著		
8	1997	平成	9	5	標準簿記論	創成社	編著	中條祐介・中村彰良・中島照雄・佐藤義文・高久勝也	改訂版二版まで増版 第1章「簿記の意義と目的」、第2章「貸借対照表と損益計算書」
9	1997	平成	9	9	フランス会計論	創成社	単著		
10	1998	平成	10	2	新経営・経済時代への多元的適応	日本経済評論社	分担執筆	高崎経済大学附属産業研究所編	第6章「環境倫理の時代の環境監査」
11	1999	平成	11	10	企業と環境	税務経理協会	分担執筆	鬼形功・嶋和重編著	第4章「地方自治体における環境管理・監査問題」
12	2000	平成	12	6	「聖地」軽井沢：リゾートという分野の「日本の顔」に未来はあるか	税務経理協会	共著	山本喜則	改訂版まで増版
13	2000	平成	12	12	21世紀社会の企業情報：諸企業情報の変貌を見据えて	創成社	編著	梶井憲俊・小原博・李瓊球・松井隆幸・芦田誠・秋山義継・増田英敏・鶴田勝巳	大堺利實先生退職記念論文集 第1章「21世紀企業の社会関連会計情報と付加価値会計情報」
14	2001	平成	13	10	現代財務会計論	創成社	単著		改訂版、新訂版まで増版

著書

番号	西暦	和暦	年	月	著書名	出版社	共著／単著等	共著者(分担執筆者)	備考
15	2003	平成	15	3	IPネットワーク社会と都市型産業	日本経済評論社	分担執筆	高崎経済大学附属産業研究所編	第Ⅱ部都市型産業と市場創造　第5章「地方都市中心市街地再生戦略と都市型産業」
16	2003	平成	15	4	変革期の財務会計論	創成社	単著		
17	2003	平成	15	6	資本の会計	創成社	単著		
18	2005	平成	17	7	プラン・コンタブルの国際比較：勘定体系から考える会計の国際的統一問題	中央経済社	分担執筆	野村健太郎編著	第1編第14章「アルジェリアのプラン・コンタブル」

学術論文

番号	西暦	和暦	年	月	タイトル	雑誌名	巻号	備考
1	1969	昭和	44	3	減価償却の問題点	修士論文(拓殖大学大学院)		
2	1969	昭和	44	7	専門団体ステートメントにみる貨幣価値に対する各国の動向と会計理論の位置づけ--アメリカ	高崎経済大学論集	12(1)	
3	1969	昭和	44	11	フィリップスの「増加所得概念」とレムケ理論	高崎経済大学論集	12(2)	
4	1970	昭和	45	7	専門団体ステートメントにみる貨幣価値に対する各国の動向と会計理論の位置づけ--イギリス	高崎経済大学論集	13(1)	
5	1970	昭和	45	11	会計の転換期的認識と利益概念	高崎経済大学論集	13(2)	
6	1971	昭和	46	3	租税法学の方法論に関する研究	修士論文(拓殖大学大学院)		
7	1971	昭和	46	11	中小資本漁業経営体に於ける財務諸表分析(富山県魚津地区)	高崎経済大学論集	14(1・2)	
8	1972	昭和	47	1	中小資本漁業経営体に於ける財務諸表分析--岩手県宮古地区-1-	高崎経済大学論集	14(3)	
9	1972	昭和	47	12	中小資本漁業経営体に於ける財務諸表分析--岩手県宮古地区-2-	高崎経済大学論集	15(2)	
10	1975	昭和	50	12	フランス会計学研究-1-	高崎経済大学論集	18(2・3)	
11	1976	昭和	51	10	フランス会計学研究-2-	高崎経済大学論集	19(2)	
12	1976	昭和	51	11	「フランス会計学」にみるジャン・フーランスティエの会計観	群馬女子短期大学紀要	4	
13	1977	昭和	52	3	フランス会計学研究-3-ジャン・フーラスティエの「フランス一般会計」	高崎経済大学論集	19(4)	

学術論文

番号	西暦	和暦	年	月	タイトル	雑誌名	巻号	備考
14	1977	昭和	52	11	フランス会計学研究-4-「フランス会計学」「フランス一般会計」にみるジャン・フーラスティエの会計観	高崎経済大学論集	20 (1～4)	高崎経済大学創立20周年記念
15	1978	昭和	53	11	会計思考における革命--ジャン・フーラスティエの会計思考における科学概念との関連から	高崎経済大学論集	21(2)	
16	1979	昭和	54	10	フランス会計学研究--国家会計審議会によるプラン・コンタブル・ゼネラル改訂の諸問題	高崎経済大学論集	22(2)	
17	1979	昭和	54	12	フランス貨幣価値変動会計--エミール・クリーグ氏の指数修正価値会計を中心に	高崎経済大学附属産業研究所紀要	15(1)	後継雑誌『産業研究』(高崎経済大学付属産業研究所)
18	1980	昭和	55	3	プラン・コンタブル・ゼネラル改訂にみる総合財務諸表	高崎経済大学論集	22(4)	
19	1980	昭和	55	6	「会計＝技術」にみる科学概念とフランス会計原則	産業経理	40(6)	
20	1980	昭和	55	9	フランス会計原則における資金計算書の位置づけ	高崎経済大学附属産業研究所紀	16(1)	後継雑誌『産業研究』(高崎経済大学付属産業研究所)
21	1980	昭和	55	10	フランスの企業付加価値計算について	高崎経済大学論集	23(1)	
22	1980	昭和	55	12	物価変動時の価値修正問題	高崎経済大学論集	23(2)	
23	1981	昭和	56	2	フランス会計制度における棚卸資産評価基準	高崎経済大学論集	23(3･4)	多田和夫教授退職記念号
24	1981	昭和	56	2	有価証券報告書にみる継続性原則の変更開示状況	高崎経済大学附属産業研究所紀要	16(2)	
25	1989	平成	元	7	フランス会計原則と付加価値計算	産業経理	49(2)	
26	1993	平成	5	6	群馬県内企業と社会貢献活動	高崎経済大学論集	36(1)	(共著者)大谷明子･小田切陽子･金田道子
27	1994	平成	6	3	フランス会計学研究：会計と経済の接点をジャン・フーラスティエ思考・社会思考に探る	博士論文(拓殖大学大学院)		
28	1994	平成	6	3	外食産業における企業倫理	共愛論集	6	(共著者)若山浩之
29	1994	平成	6	4	企業活動と地域社会貢献活動	日経連タイムス		日本経営者団体連盟、1994年4月7日
30	1994	平成	6	9	環境監査：実態調査にみるわが国化学業界の環境監査について	高崎経済大学附属産業研究所紀要	30(1)	
31	1994	平成	6	9	企業の環境保護への取り組み	日経連タイムス		日本経営者団体連盟、1994年10月27日
32	1994	平成	6	12	環境監査--実態調査にみるわが国企業(製薬業界・建設業界)の環境監査について	高崎商科短期大学紀要	7	
33	1995	平成	7	1	環境と企業経営の接点としての「環境監査」	NOVITAS	4	高崎経済大学

学術論文

番号	西暦	和暦	年	月	タイトル	雑誌名	巻号	備考
34	1995	平成	7	3	賃上げなき春闘に住宅ローンは重く	エコノミスト		
35	1995	平成	7	7	環境監査で変わる企業経営	日経連「経営者」	7	
36	1995	平成	7	9	商法改正後における中小企業の対応--アンケート調査にみる最低資本金クリアー対策	高崎経済大学論集	38(2)	
37	1995	平成	7	9	テーマパーク産業に関する財務的考察	高崎経済大学附属産業研究所紀要	31(1)	
38	1995	平成	7	12	起業における資金調達手段	高崎商科短期大学紀要	8	
39	1996	平成	8	2	高速社会の進展とスコーレ社会の到来にみる企業の経営理念	高崎経済大学論集	38(3)	
40	1996	平成	8	9	企業理念としての環境管理	日経連タイムス		日本経営者団体連盟、1994年9月12日
41	1996	平成	8	9	ギャンブル型レジャー産業に関する会計学的研究	高崎経済大学附属産業研究所紀要	32(1)	
42	1996	平成	8	10	流通業界における環境問題	群馬女子短期大学記念論文集		学園創立60周年短大創立30周年
43	1996	平成	8	12	最低資本金制度と企業の対応--株式会社の場合	高崎商科短期大学紀要	9	
44	1997	平成	9	11	商店街空洞化の処方せん--中心商店街の再生	高崎経済大学論集	40(1・2)	
45	1997	平成	9	12	「地域メセナ」としての群馬県内企業メセナ	高崎商科短期大学紀要	10	
46	1997	平成	9	12	ギャンブル型レジャー産業の会計学的研究--特にオートレースを中心として	高崎経済大学附属産業研究所紀要	33(1・2)	
47	1998	平成	10	9	地方自治体と環境ISO14000s	高崎経済大学論集	41(1)	
48	1998	平成	10	12	市場規模24兆円産業に関する一考察	高崎商科短期大学紀要	11	
49	2006	平成	18	3	グローバル時代に勝ち抜く中小企業の会計戦略	高崎経済大学論集	48(4)	

その他

番号	西暦	和暦	年	月	著書名	出版社／雑誌名	巻号	備考
1	1973	昭和	48	9	フランス会計学(翻訳)	白水社		ジャン・フーラスティエ原著
2	1975	昭和	50	2	ボルドーの想い出(報告)	高崎経済大学論集	17(3・4)	

その他

番号	西暦	和暦	年	月	タイトル	雑誌名	巻号	備考
3	1976	昭和	51	3	岸悦三著「会計生成史」--フランス商事王令会計規定研究	高崎経済大学論集	18(2・3)	吉原幸二・冨田栄一両教授退職記念号
4	1982	昭和	57	3	中小企業庁「活路開拓調査事業」--注文紳士服(調査報告)	群馬県中小企業団体中央会		
5	1982	昭和	57	3	中小企業庁「活路開拓調査事業」--中古自動車(調査報告)	群馬県中小企業団体中央		
6	1982	昭和	57	3	中小企業庁「活路開拓調査事業」--生コン(調査報告)	群馬県中小企業団体中央		
7	2001	平成	13	7	中心市街地の起爆剤--“まち”づくり構造改革	おッ!!まっちぃ〜	6	群馬県
8	2004	平成	16	9	日本会計研究学会(平成16年度)スタディグループ「各国プラン・コンタブルの比較研究」	日本会計研究学会(平成16年度)スタディグループ発表		(共著者)野村健太郎・伊豫田隆俊・大下丈平・大下勇二・小津稚加子・梶浦昭友・蟹江章・黒川保美・小関誠三・斉藤昭雄・斉藤久美子・佐藤倫正・高山朋子・藤井秀樹・藤田晶子・松井泰則・向伊知郎・森美智代・山浦瑛子・吉岡正道

（3）インタビュー調査結果

山浦瑛子先生に関して、山浦先生の同僚であった水口剛先生、山浦先生の門下生であった後藤小百合先生、狩野孝夫先生、そして高崎経済大学に非常勤講師として勤務したことから縁のあった西村優子[121]先生、スタディ・グループで関わりを持っていた小津稚加子先生にインタビュー調査を行った。インタビュー日程は以下のとおりである。水口先生には、2016（平成 28）年 4 月 25 日に、高崎経済大学にある先生の研究室においてインタビュー調査を行った。また、後藤先生と狩野先生には、同日、高崎商科大学においてインタビュー調査を行った。さらに、西村先生と小津先生には、当該スタディ・グループの打合せ会（2016（平成 28）年 6 月 5 日）終了後、一橋大学リエゾンラボにおいてインタビュー調査を行った。インタビュアーは、いずれも井原理代、澤登千恵、津村怜花の 3 名である。

これらのインタビュー調査の結果を、前述のとおり、①研究継続に対する原動力、②女性研究者としての苦労や職場での様子、③家庭と職場（高崎経済大学）との両立への工夫や家庭での様子という 3 項目に整理してまとめると、以下のとおりとなる。

今回、可能な限り、山浦先生像を詳らかにしようとこころみてはいるが、インタビューを快諾いただいていたご夫君・山本喜則先生の突然のご他界により、若い頃、またご家庭での山浦先生の様子については限定的な内容となっている。

① 研究継続に対する原動力

[水口先生インタビュー]

――山浦先生が研究職を継続された原動力は、同僚であった水口先生からご覧になって何だったと思われますか。

まず私自身のことをお話しますと、私は 97 年にこの大学に参りまして、その時にすでに山浦先生はだいぶ長いことこちら（高崎経済大学）にお勤めになっていたのですね。私が着任した 97 年からすでに 17、18 年は経っているわけですが、そうは言いましても私が山浦先生とご一緒したのは、わりと後半部分でして、若い頃のことはあまりよく存じ上げていません。歴史研究とのことですから、良い面、悪い面すべてを歴史の資料として率直にお話ししたいと思います。

山浦先生は非常にインパクトの強い方でしたし、私はとても強い印象を受けました。その時代に女性で研究者を続けるためには必要なことだったのかもしれませんが、ある意味、戦いに勝ち残ってきた人という感じがしました。研究の原動力という意味では、私が本学に来た 97 年頃には、山浦先生はすでにご自身の研究よりも、大学全体の運営の方に軸足を

[121] 西村優子先生のご専門は管理会計。2016（平成 28）年 3 月に青山学院大学を退職され、同年 4 月より同大学に専任講師として授業をご担当されている。

移しておられたように思います。その当時の状況を思い起こしますと、山浦先生には「持って生まれた力」と言うのでしょうか、いわばパワーがあったのだと思います。それ以前の研究の原動力もきっと同じだったのではないでしょうか。きっと自分の能力に自信があったのだと思います。良くも悪くも個性の強烈な人でしたから、自分を殺して生きるようなことはしない人でした。思う存分やってこられたのだと思います。

[後藤先生インタビュー]

――山浦先生のご研究に触れられる機会はありましたか。

はい。フランス会計の日本会計研究学会のスタディ・グループで発表された時に。統一論題報告で、野村健太郎先生が主で発表されたのですけれど、新宿の京王プラザだったかな、「発表するからいらっしゃい」と言ってくださって、聴きに行きましたね。それを聴かせていただいたのは私だけだったと思うのですけれど、みなさんは卒業された後だったので。大変短い発表で。持ち時間が少なくて 10 分くらいだったと思うのです。山浦先生の番になって登壇されて、アルジェリアの会計について、すごいスピードで、10 分で切り上げて次の人にバトンタッチみたいなリレー形式で、5 人から 8 人ぐらいの先生が次から次へと（登壇されて）。（報告の）直前、この発表をするにあたり、随分先生は忙しそうで、アルジェリアの大使館に行かれて資料を集めて。「大使館に行ってくるから」みたいなお話をされていました。ご自分で大使館に行って資料を集めたのだと思います。あまりにもお忙しそうなので、「ちょっと手伝いましょうか」と言ったら、その当時、菅原さんと糸井さんという院生さんに今頼んでやってもらっているから大丈夫とのことでした。山浦先生にとっては最後の会計研究学会での発表の原稿、報告書になるのかなというふうに思います。

（また、当時は）ちょうど、会計ビッグバンの後に国際会計基準が日本に取り入れられつつあって、日本全体が国際会計基準を勉強して広めましょうとまではいかないけれど、それに統一する方向の雰囲気の時に、あえてフランス会計（をご研究されていた）ということは、何て言いましょう、これも雑談の中であったのですけれど、「国際基準についてどう思いますか」というふうに言いましたら、「例えば言語なんかで、英語とかフランス語とかスペイン語とかいろんな言語があって、エスペラント語に統一しようと思った頃があったのだけれど、言語もうまくいかなくて、会計の世界もいろんな会計基準全然違うようなものを 1 つにするのは、うまくいくのかねー」みたいな（ご返事をいただきました）。世の中全体が国際会計基準にがーって進んでいく時の 1 つの歯止めじゃないですけれども、問題提起としてこういうフランスの会計があって、まったく違うものがあるっていうことを社会に提示したというか、私にはそういうふうに思えました。ブレーキをかけるまでの意図があったか分かりませんけれど。はっきりそういうふうなコメントをされたわけではないけれども、国際会計基準に対する先生のスタンスのお言葉を思い出すと、そんなふうに

（思います）。

――では、山浦先生はなぜフランス会計のご研究をなさっていたのか、その動機をうかがったことはありますか？

私が知っているのは 2002 年の大学院に入学させていただいた時からの 4 年間。修士課程は 2002 年に開学をして、その時、1 期生が私とほか 2 人、合計 3 名で入学しました。次の年、2003 年に狩野さんたちの代が入学されてきて、6 名になりました。次の年に私はドクターの 1 年生に進級したのですけど、3 期生が同じく 3 名（入学しました）。（山浦先生がゼミ生として指導をした）修士課程（の院生）は 9 人だったと思います。その次の代からは院生を募集してなかったようですので。私が大学院の後期の 2 年生の時に退職をされて国士舘に移られて。後期課程に進んだのは私だけというような状況です。

（このため、山浦先生がフランス会計を研究された）動機自体をうかがったことはないのですけれど、何しろとてもフランスかぶれ。かぶれって言ったら失礼ですけれど、フランスという国が好きな方で。ボルドー大学に行かれた時は、日本人ができる限り少ないところに行こうと思ったのですって。パリには多くの日本人がいらっしゃるし。ボルドーを選んだのは日本人が少ないからだと。ボルドー大学の頃からきっとフランス語と切れてしまわないように、フランス語の雑誌を定期購読されていらっしゃった。研究（に関する雑誌）だと思うのですけれど、研究室に行くとフランス語の雑誌があって見ていらっしゃって。「先生こんなの読めるのですか？」とうかがうと、「慣れれば大丈夫よ」って。

私の私見が入るかもしれないですけれど、とても素敵な女性で、フランスが大好きだったのだと思いますね。何しろおしゃれな方で。とてもおしゃれな方だったから、フランスにぞっこんだったのではないですかね。

パリにアパルトマンを所有していて、将来、大学を退職して自由な身になったら、日本とパリを往復するような生活をしたいと。お部屋を購入してご自分で所有されていたのですけれど、退職する頃に、「もう私何時間もかけて飛行機に乗ってフランスには行けません」みたいなことをおっしゃって、売りに出すと。そこを「売りたいのだけど、どうしたら良いかしら」みたいなことをおっしゃっていました。そして、フランス大使館に相談に行き、パリのアパルトマンを売るのだと、こういう感じでしたね。だから本当にパリが大好きで、将来住みたいと思われたのだと思います。（けれど、私が）大学院の修士後期の頃は忙しかったですからね。大学の講義がない夏場は軽井沢、冬場は東京の生活をされ、パリに行って生活するような余裕はなかったと思いますね。

[西村先生インタビュー]

――ご研究のことで何かうかがったことはありますか？

ご研究のことは、拓殖大学で博士号を取得されたこと、そして、博士号を取得するのはすごく意味があることだとおっしゃられていたことです。それは私も刺激を受け、博士号を取らなければと思いました。

とにかく学部長職も研究も一生懸命やっていらっしゃるという印象です。私が（非常勤で）お会いしたのが、拓殖大学で学位をとられてから、何年後だったのか、1996 年だったと思います。（山浦先生が学位を取られたのは 1994 年だったので、学位を取られてから 2 年後にお会いされていた模様）博論のテーマはフランス会計とのことで、女性研究者、フランス会計学は多いという印象を受けました。旺文社で勤務していたことは伺いました。（なぜ旺文社を辞めて大学院に進学したか、なぜフランス会計学を選択されたかなどの）理由は言われなかった。あんまり過去のことをおっしゃる感じではなくて。すごく前向きで。旺文社に勤務していて、研究と教育に頑張っているということをおっしゃっていたので、とってもバイタリティのある先生だなと思っていました。

[小津先生インタビュー]

――小津先生はスタディ・グループで山浦先生とご一緒されていますが、その時の様子などをお教えいただけますか。

実際にスタディ・グループが設置された時に、初めてご挨拶をしました。とにかくお元気というか、ハツラツとされていると思いました。まだまだ私やれるわよ、そういう雰囲気がありました。それに驚いて。フーラスティエの翻訳にしろ、ご研究を積み重ねられた方ですから、書物とじっくり向き合う研究者と勝手にイメージを持っていましたから、足腰お元気でというか、活発・ハツラツで、私はまだ頑張れる時は頑張るのよ、頑張れるしという、そういう印象だったので、余計にギャップがありました。これが山浦先生なのだと思いました。

――同じフランス会計学を研究されている小津先生にとって、先行研究となる山浦先生のご研究とはどのような位置づけですか。

私自身もフランス会計学を研究しているので、最初に拝読したのは山浦先生が翻訳されたフーラスティエ。フランス会計を勉強する時には、私の周りの先生方はまずこれを読ん

だよね、読みましたよねとおっしゃっていましたので、あの本から始めるのがまず定石という位置づけだと理解しています。（ご本について山浦先生とお話したことは）なかったです。むしろ、私にとって山浦先生がなぜ偉大であるかと言うと、フランス会計学研究をはじめる若手研究者が必ず読まなければいけないような本を出版されている偉大な会計学者というふうに見上げておりましたので、実際に日本会計研究学会で野村健太郎先生が主査をされた『各国プラン・コンタブルの比較研究』、このスタディ・グループ研究でご一緒した時にも、何でしょう、そうそうこちらからお声掛けできるようなそんな存在ではなかったです。もちろんご挨拶はしましたけれども、先生の論文も翻訳も読ませていただきましたというふうにお伝えしましたけれども、そんなにお親しくたくさんのことをご質問できるほどの、私もまだ若輩でしたので、そういうことは絶対聞けなかったです。

この頃のフランス会計研究の研究者は山浦先生だけではなかった。野村健太郎先生やスタディ・グループの先生もフランス会計研究でたくさんの研究を開拓されて、当時としては網羅すべきフランスの研究をされました。年齢でいうと青木脩先生が（山浦先生よりも）上だと思います。ですから、青木先生の方が（フランス会計学研究は）先だったと思います。そして、たくさんの先生がその後出てこられたので、フランス会計（研究者）として最初（の研究者）は山浦先生ではないと思います。それでもなお山浦先生が偉大であるかと言いますと、フーラスティエの翻訳は白水社から出版されていますから。白水社というのは、フランスに関する優れた著作を出している出版社なのですね。この白水社が翻訳権をおそらく持っているのでしょうけれども、フーラスティエのもともとの出版社、フランス大学出版（Presses Universitaires de France）に行けばきちんと書棚があってですね、そこに並べられている本な訳です。このラ・コンタビリテ（*La Comptabilité*：『会計学』）が含まれているコレクション「クセジュ」というのは、日本でいうと岩波文庫のような教養本のシリーズなのです。日本で教養をきちんとつけなさいという時に、まず岩波のシリーズを読みなさいとか、ウェーバーを読みましたか、ゾンバルトを読みましたかという、それぐらいの位置づけの著作集を出している出版社なのです。私は山浦先生から教えをいただいた機会はなく、翻訳書以外のことは分かりませんから、客観的なことばかりですが、まずフランス大学出版から出ている本であり、そしてそれが教養的な著作しか扱わない出版社であること、そしてそれが白水社から出ているという 2 つの事実をもって、かくも優れた文献を見つけられて[122]、確実に翻訳されて、それを出版されたというのは、素晴らしい先生に違いないと一方的に私が思ったのです。

フーラスティエは誰もが読むもの、当然読んだよねと言うもの。翻訳そのものの機会を与えられることそのものが評価できるものと、個人的に思っています。どうやったら、日

[122] 山浦先生は『フランス会計学』のまえがきで「訳者がながい間大事にあたためてきたものであり、フランスで会計を学ぶ者は必ず一度は手にする名著」（山浦訳［1973］4 頁）と記されている。コレクション「クセジュ」のいずれを翻訳書として出版するかは、白水社の編集者が基本的には決めるが、なかには原著をいち早く読まれた専門家が翻訳を持ちこむこともあるという（Japan Knowledge「ニッポン書物遺産：文庫クセジュ 4」http://japanknowledge.com/articles/blogheritage/que/4.html　2016 年 7 月 2 日アクセス）。

本からあのフランスの出版社に辿り着けて、会計学者であるのになぜ白水社から出版できたのだろう、と思いました。人文・哲学系のフランス研究をされている方であれば、まず白水社なのでしょうけれど、その中に会計学の方がいらっしゃる、会計学の研究者がそこにコミットメントを持ったのだというのが珍しい。（かなりの語学力を持つなど）何かコネクションがなければ無理だと思います。どうやってされたのでしょう？（疑問に思っていたので、）山浦先生のご経歴のなかに、大学に来られる前に旺文社でお勤めになられていたというお話しを教えていただいて、なるほどな、と理解ができました。おそらく（山浦先生には）目利きがあったから、そういう才能や何かのネットワークがあったからそういうものを確実にピックアップできたのだろうなと思いました。この時代に旺文社に就職されるのは、それはもう才媛で、エリートで、女性で聡明な方しか入れない。それこそ「とと姉ちゃん」みたいな感じなのではないでしょうか。本当に頑張り屋さんで頭が良いから、どなたかが才能を見出されたのではないでしょうか。（フーラスティエの翻訳書はハードカバーではなく）小さいから文庫だねとか、そういうふうには、私の中では捉えていません。

（以上のことから、）この訳書、翻訳の価値を強調するために、あえて訳書、と申します、には、2 つの価値があると考えています。1 つは、（コレクション「クセジュ」という）人文・哲学系の教養書シリーズに、「会計学」が入っていることです。これは原本に備わっている固有の価値です。2 つめは、人文・哲学分野にある本を見つけられて、それを日本語に翻訳する必要性を認め、成し遂げられて、後学の人々を導いた、という価値です。これは、山浦先生が作られた価値と思います。山浦先生に初めてお目にかかった時には、「あー、この方がフーラスティエ『会計学』の翻訳者だ」と（私のなかには小さな）感動がありました。

――山浦先生の研究の原動力は、同じフランス会計学の研究をなされている小津先生から見て、何だったと思われますか。

まず、（フランス会計学が十分に日本で認知されていないという山浦先生の思い）それは研究者の数だと思います。アメリカやドイツに比べるとフランスは少ないでしょうということだと思います。私は学部の卒業論文の時からフランス会計を勉強したのですけれども、大学院にいった時に、（フランス会計に関する本）ぜんぶ本をそろえた時に、だいだい 10 冊くらいしかなかった。私が大学院の時、今から 30 年前は 10 冊くらいで、私の先輩も「そんなもんだよ。フランスはドイツとかアメリカに比べたら、先行研究で出版されたものはそれぐらいしかないからね。ここ研究するしかないからね。」と。1986 年の頃には 10 冊くらいで数が少ないから。

（研究者の数が少ないこともあり、フランス会計研究の内容は当時、）なかなか説明しても分かってもらいにくい内容だったと思います。言葉のこともそうですけれども、フーラ

スティエの会計学もそうですけれども、プラン・コンタブルも、なかなかどうしてそういう会計なのか、会計原則なのか説明しても、なかなか分かってもらえないところもあります。だから逆に研究意欲がわいたのかもしれません。ずっとお話し相手がいらっしゃって、その方とは分かり合えるかもしれませんけれども、学会とかで広く認めてもらうとか、たくさんの人が興味を持ってさらに質問をしていただくとかには辿り着けなかったと思いますね。そんなに簡単ではなかったと思いますね。

――当時、ボルドー大学へ留学されたということについては、どう思われますか。

ボルドーは良い大学だと思います。パリかボルドーか、分野によってなのでしょうけれど。（日本人が多いパリを避けたという山浦先生の判断を踏まえると）かといって小さな田舎町を選んだわけではないですから、フランスを楽しみ、しっかりと研究できる大学だと思います。（ご自分で留学先を探されたと思われるので）相当に元気な女性でなければできないことだと思います。あの当時、私も自分が 30 年前、色々なチャンスを作っていただいたほうなのですが、そうそう簡単に入り込めないですから、フランスの大学は。今でこそ、ですけれど、ボルドー大学も早々簡単に入れる、コネクションをつけられるところではないですよ。（留学中は）それは楽しかったに違いないですよ。また、満喫するだけの活力、行動力があったのだと思うのですよ。

② 女性研究者としての苦労や職場での様子

[水口先生インタビュー]

――女性研究者としてご苦労されていたことや、職場でのご様子をお教えいただけますか。

山浦先生に関して言えば、女性だからという理由で苦労していたとか、不利益を被っていたという印象はありませんでした。私が本学に来た後、しばらくして山浦先生は学部長になったのですが、非情に管理能力が高く、本当に優秀な学部長でした。
山浦先生は非常に強いリーダーシップを発揮して、学部を取り仕切っていました。学部長というのは、ある種残酷な地位でして、教授会を運営するときに、その人の能力が否応なくあらわれる面があります。研究や教育とは違う能力が求められますから、たいへん業績の多かった人や人間的に素晴らしい人でも、教授会をうまくまわせるかというと全然別ということも多い。その点、山浦先生は私が見た中では抜群の学部長でした。事務局もしっかり動かしているし、やるべきこともはっきり決まっている感じでした。

山浦先生の学部長時代に経済学部を基礎にした大学院の経済・経営研究科ができたのですが、そのためにたいへん奔走されていました。大変じゃないですか、研究科を 1 つ作るのって。文部科学省に業績も提出しなければいけませんし、マル合が何人などという審査をされるのも大変で、嫌がる教員も多いものです。それをしっかり指示して、若い教員には早く業績を出しなさい、早く博士号をとりなさいということも言っていました。そうですね、私が博士号をとったのもその頃です。そうやって研究科ができた後は、初代の研究科長になられて、腕を振るわれていました。そういう人でした。

当時、味方も多かったですけど、敵も多かったですね。教授会などでも、だめならだめとはっきり言う人でしたから、強いなと。

――山浦先生が学部長になられたのは、大学院を作りたいという思いがあったからなのですか。

経済学部を基礎にした研究科を作るというのは、山浦先生が学部長をされる前から課題だったようです。その理由は、地域政策学部に先を越されたという思いがあったからのようです。経済学部よりも後に地域政策学部が出来たのに、大学院では地域政策研究科が先にできましたから。以前から経済経営研究科を作らなければ、というふうに多くの人が思っていたようです。ただ、実際に実現できたのは山浦先生だけですね。

研究科を設置するには文科省とも種々折衝しなければいけませんし、いろいろと大変なのですが、そういうことをやれる馬力のある人でしたし、事務局にもちゃんと指示を出せる人でした。ご本人の事務処理能力も高いですし、戦略をたてて組織をその方向に動かしていくという能力にも非常に長けていました。そういう意味では、有能なビジネスマンという感じですかね。

ですから、どういう時にこの話を教授会に出したら良いかとか、どういうふうに言ったら通りやすいかとか、そういう判断は抜群でした。人心掌握術に長けているので、彼女が学部長になった時には大きなことがよく決まりました。どういう研究科にするかとか、どういうキャッチフレーズにするかとか、普通もめるじゃないですか。それを事前に案を出して、次の教授会では決をとって、といった段取りで要領よく片づけていく。そういう能力に長けていました。研究だけしていても身に付かない能力ですよね。

リーダーシップ気質というのでしょうか。人を引っ張っていくタイプの人なのです。もしかしたらご本人は大変だったかもしれませんし、今から思うとあれこれと大学のことを心配されていたのかもしれないなと思います。このままだと大学が大変なことになってしまうという思いがあって、自分がやらねばと思っていたのかもしれません。ただ、そのやり方があまりにも豪腕なので周りは反発することもあったように思います。

そのような思いがあったからかもしれませんが、研究科長の任期が終わった時、学長選

にも出られました。結局、学長にはなりませんでしたが、もしなっていたら、有能でリーダーシップのある学長になっただろうなと思います。

――ご主人である山本先生と、職場においてお二人の協力関係などはありましたか。

山本先生は山浦先生が学部長や研究科長だった時は、だいぶ役職などもして、支えていました。ですが、山浦先生が亡くなられたらもう役職も一切されなくなりました。やはりショックが大きかったのかなと思います。もともと山本先生は役職ですとか、学内行政にはまったく興味のない方だったようで、その後は何もされない感じでした。非常にしっかりした譴責の方なので、時々教授会で「それは違う」ということはおっしゃいましたけれど、自分から役職を求めるということもなく、本当に山浦先生が亡くなられて、人生がそこで途絶えてしまったような感じはありました。とても寂しそうでした。

[後藤先生インタビュー]

――山浦先生の講義などで思い出に残っていることはありますか。

（学部では）会計学原理とか、原価計算論の授業を担当していただきました。どんな感じだったかというと、いつものようにテキパキ、パリパリ（といった感じで）、会計学原理のほうは、企業会計原則、一般原則、真実性の原則から始まり、その辺を非常に丁寧に講義してくれる先生でしたね。原価計算の講義は、それ（ご自身で書かれたテキスト）をもとに（されていました）。私が一番記憶に残っているのが総合原価計算なのですけれど、総合原価計算表を作って計算をしているところで私がつまっていたら、階段教室のような広い教室でございましたが、足を止めて、「ここはね、これとこれでこの金額は出すのだよ」みたいなことを教えてくださる。こんなにたくさん（学生が）いるのに、よく間違えたところ発見できるな、というのがとても学生時代に記憶に残っております。

――山浦先生の論文指導について、お聞かせいただけますか。

私が大学院に入った時に、「後藤さん、好きなことを好きなだけやりなさい」と言ってくださいました。「好きなことを好きなだけやって良い」と言ってくださったことは、はっきり覚えています。

また、「後藤さんは自分と同じようなタイプね」って言われたことがあります。資料を調べたり、収集したり。これに時間がかかって、書く時は 3 日。3 日で書き上げるタイプ。調

べる作業はするのでしょうけれど、3 日で書きます。それなので、「後藤さんも一緒ね、追い込まれないとやらないタイプ」と言われたことがありました。「後はどうやって書いたら良いのですかね」ときくと、「それはね、頭の中にしかないの。どこを探しても結局書くことはここにある。だから、いつもそのテーマのことを考えていると朝方目が覚めるような、覚めないような時に良いアイデアが思い浮かぶの」と言っていましたね。そして、書く時は 3 日。迷って、これは良いのかな、これを書いて良いのかなと、そこで迷うと書けない。それが先生の性格ですから。

山浦先生は大学卒業後、旺文社に就職されていたので、文章の校正とか経験されていたようです。私が修士論文を提出すると、誤字脱字をババババっと見つけるのがすごく早くて。「私早いでしょう、旺文社で鍛えたからね」みたいなお話をされていました。そのまま辞めないでそこにいればきっと編集長とかそういう仕事ができるような素質のあるかただと思っていましたけどね。そういう仕事は向いていますよね、きっと。原稿を見て、ミスを見つけるのが得意な方でした。

――大学においてご苦労されているなと感じられたことはありましたか。

学生も、私が学生の頃は、（女性は）7～8 人に 1 人ぐらいしかいないくらい、経済学部は男社会。多分、先生も（女性は）数名ですよね。女性がそういう大学という組織の中で働いていくというのは大変だったと思うのですけれど、（ご苦労されているなどとは）言われなかったですよね。ただ、どの段階か分からないのですけど、助教から講師になるとか、講師から教授になるとか、そういう時に、「女性が」みたいなことがあったようで、女性が昇級することが大変だったのかな、というのはちょっと感じたことがありました。

――当時、山浦先生は研究科長としてお忙しくされていたことと存じますが、その折のご様子をお教えいただけますか。

大学院の経済経営研究科ができるにあたり、山浦先生は随分尽力をされて大変な思いをしていたと（うかがっています）。できた後も後期課程を立ち上げるために、外部の実務に強い方、実務家をお招きしたいと。ワークショップという授業がございまして、このワークショップが 5 つあったのですけれど、そこ来ていただく先生方を、色々な方面からお呼びになって。そのおかげで私は随分色々な先生の講義が受けられて、充実した大学院後期課程を過ごしたなというふうに思います。それは山浦先生のお人柄なのでしょう。呼んで来てくださった。山浦先生が声をかけてくださったので来ましたって、みなさんおっしゃっていましたから。すごく顔の広い方だったのだなというふうに思っておりますね。

それに、研究科長の仕事と後期課程の設立の仕事を抱えながら、大学院の授業が昼夜開講です。夜結構遅くまで、先生こんな時間まで講義をされて身体は大丈夫なのですか、みたいなことを雑談したことを覚えています。土曜日にも講義がありましたね。ドクター課程の昼夜開講にも、社会人がいらっしゃっていて、それをうたい文句にしていたと思います。仕事をしながら土曜日で学べるという。実は私、（勤務先の）高校を夜間部に移させてもらったので、修士の時も昼間授業に出て、午後から高校の教員をすることが可能で。ドクターの時も昼間に大学院に通えたので、実はそれほど夜の授業に私自身は出なかったのです。とる必要がなかったので、あまり意識せず。でも、土曜日に授業出ていましたね。土曜日の授業にみなさんいらっしゃっていました。

この『変革期の財務会計論』、これは先生が持っていらっしゃって、「今まで書き溜めたやつをまとめて本にして出したのよ」とおっしゃっていて。「先生、よく本を出す余裕がありましたね」といったことを申し上げたら、「今までのやつ（論文）をまとめただけだから」みたいな感じのことをおっしゃっていました。（それなので、山浦先生は）大変な仕事量をこなしていました。

[狩野先生インタビュー]

———当時、山浦先生は研究科長としてお忙しくされていたことと存じますが、その折のご様子をお教えいただけますか。

当時、文科省では、国公立大学の独立行政法人化に向かっていた時期でもあったわけで、少子化、高齢化の中で大学の生き残りをかけて大学院の設置が急務だったようでした。修士課程の設置を済ませ、さらに博士課程を文科省に最終申請の大詰めで、折衝ごとで大変だったようです。お昼でも忙しい中で何かペロっと食べているなと思ったら、ヨーグルトでした。体のことを考え、摂取する物には敏感で節制していたと思います。先生は体型を維持していましたけど、少し痩せすぎていたかもしれない。

大学の中では男性の職場という意識もあったのでしょう。高経にはとくにあったような気がします。山浦先生は、いつもピンと背筋を伸ばして立っており、服装にも隙がありませんでした。

——山浦先生の論文指導について、お聞かせいただけますか。

論文が書けなくて混乱していると、そんな時に「あなた書くときはね、私はこの世の中で１番最高のものを書いていると思って、書いてみたら。」と言われました。そういうふうに言ってくれるので、それで良い調子を取り戻して書き進めることができました。

しかしながら私が 1 番良いと思って書きあげた修論は、事前審査のプレゼンでは、メタメタに批判されました。指導するところは指導されておりました。

[西村先生インタビュー]

――職場でのご様子など、ご存知のことがあれば教えてください。

すごく自分のお考えをお持ちだったと思います。大学の学部長職に熱心でいらっしゃったという印象がありました。1 年間非常勤でうかがっていたので、何回かお会いすることがありました。非常勤講師をお引き受けするという時に、学部長である山浦先生にお会いしたのが最初です。高崎経済大学は朝、授業で行こうと思うと、バス便の時間が決まっているのです。バス停で待っていたら、山浦先生が「一緒にタクシーで行きましょう」と言ってくださったことがあります。とにかく積極的で明るい感じの先生でした。どなたとでもお話しされる、役職柄もあるのでしょうけれども。あんまり女性っぽくなく、パキパキとしたイメージで接していました。

③　家庭と職場との両立への工夫や家庭での様子

[水口先生インタビュー]

――家庭と職場とをどのように両立されていらっしゃったのでしょうか。

おそらくそんなに苦労はされていなかったのではないかと思います。山浦先生は比較的若い頃からこの大学に来られていて、当時とても魅力的な方だったようです。山本先生とも大学で知り合われてご結婚されたわけですが、山本先生は山浦先生をとても大事にしていらっしゃったようです。

山浦先生が倒れられた時には、山本先生がとても献身的に看病されていました。また、山浦先生が亡くなられた後には、ご自身で「お別れの会」をされたのですが、それはとても印象的な会でした。祭壇の山浦先生の写真の周りを花で囲まれ、最後は涙ながらにご挨拶されていました。山浦先生をいかに大事にされていたかが分かるお別れの会でした。

山浦先生も山本先生を大切にされていたようで、学内ではあまりそういう素振りを見せないようにされていたと思いますが、時に山本先生のお話をされる時など、仲が良さそうだなという感じを受けました。

お二人の間にはお子さんもおられませんでしたし、お二人で協力して暮らしてこられたのではないでしょうか。犬を飼っていて、犬が子どもがわりだと言っていました。その犬

が亡くなった時には、子どもを亡くしたようなものだからと、お二人ともすごくがっかりされていました。お二人ともこの大学の教員で、一緒に車で通勤されたり、軽井沢の別荘に行かれたりしていました。そのような感じですから、おそらく普通に家事を分担されていたでしょうし、家庭と職場の両立で苦労するということはなかったのではないかと思います。ご夫婦が同じ大学の教員同士ですから、ごく自然に両立されたのだと思います。

[後藤先生インタビュー]

――ご家庭でのご様子など、先生のプライベートでご存知のことがありましたら、お教えいただけませんか。

学部のゼミ生だった人づてにですが、山浦先生は山形の米沢で生まれて、お医者さんのご一家だったというふうにお聞きしています。山浦先生以外はみんなお医者さんになられているみたいなお話でしたね。

高先経済大学を辞められる直前ぐらいには山本先生と一緒に出された、『「聖地」軽井沢』という著書をいただいて。（山浦先生は）軽井沢がこれまた大好きでぞっこん。軽井沢がお似合いの方で、とてもおしゃれな方でした。この辺にはいないタイプの女性ですね。バラが似合う感じはあるかも。バラのブラウスとか似合いそうですよね。赤とかピンクとかね。とても似合う（方でした）。

ピアノとか乗馬とか、趣味も色々（とされていました）ね。やりたいことをやりたいだけやった方だと思う。「20 代で知り合った人とは 20 代で別れ、30 代で知り合った人とは 30 代で別れ、40 代で知り合った人と今ずっといるのよ」と（うかがったことがあります）。40 代で（山本先生と）知り合って、高経で一緒に勤務しながらご結婚されて、ずっと一緒だったのは確かです。20 代 30 代どう過ごされたかまではなかなか分かりませんが、「後藤さん、私やり残したことがあるとすれば学生結婚したかったわ」って。やり残したと（おっしゃっていました）。

2008 年の 2 月 14 日、バレンタインデーの日に一人で映画館に映画を見に行かれて、映画を見ている時にくも膜下出血により救急車で運ばれて、山浦先生は右半身が動かなくなり、言語の障害がでたとうかがっています。手術もされと聞いています。ですので、2 年半ぐらい闘病生活をされたのかなと思うのですよね。入院してご自宅に帰られて、ご自宅で山本先生が介護をしていたようなお話をうかがっています。

[狩野先生インタビュー]

――ご家庭でのご様子など、先生のプライベートでご存知のことがありましたら、お教えいただけませんか。

大学院卒業後、近況報告を卒業した院生にメール配信してきました。その記録をそのままご紹介して、先生のプライベートな面をお伝えできたらと思います。

以下、その内容の一部を紹介いたします。

2006（平成 18）年 8 月 25 日に軽井沢にて、山浦瑛子先生に会いました。最近は、青春の 1 ページを飾らんとして、やりたいことは何でもやる主義で、軽井沢プリンスのスケートセンターにチャレンジしたそうです。結果は申しませんが、先生の手は包帯で巻かれていました。さらに近所に熊が出没、いけ面の熊かどうかは、確認できなかったそうです。いつも話題の絶えない先生の一日がうかがえました。皆様の健闘を祈ります。

2007（平成 19）年 8 月 23 日（木）山浦瑛子先生に会ってきました。軽井沢は、今年は暑く、クーラーを付けているようです。不動産鑑定士の試験委員になられて、採点をしていました。昨年出没したいけ面の熊は、暑さのせいか、体調不良で出てきていないそうで、居間にいた猫ちゃんが退屈な日々を持て余しておりました。

昨年始めたスケートは途中休みで、現在週 1 回のエアロビクスとヨガで体調は万全でした。

国士舘大学では、3 年・4 年のゼミ（各 20 名）と院生の指導と極力コマを少なくしているようですが、教授会では、ついロが出てしまっているようで、黙っていられないのが先生ですね。いつも話題の絶えない先生の一日が今年もうかがえました。皆様の健闘を祈ります。

2008（平成 20）年 11 月、山本先生に連絡をしました。山浦先生の近況をお聞きしてきました。在宅療養に入っており、週 3 日のケアセンターでのリハビリで、順調な回復とのことで安心しました。もう少し先になれば、言語の回復も含めて、お会い出来ることかとも言っていました。

2008（平成 20）年 12 月 13 日に山浦先生の家に行って来ました。専修大にて租税法務学会の出席の途中に寄って来ました。

赤羽駅から 10 分（徒歩）東口を出ると、商店街があります（LALA ガーデンスズラン ST）商店街を抜けて前田薬局の交差点を突き抜けると、住宅街です。末広湯の銭湯を目安に山浦先生のお宅があります。

2 階が先生の住居でした。ホームエレベーターを取り付けてあり、住居については、バリアフリーで改修済みでした。

ためらいながら、山本先生に電話をしてから行きましたが、さすがに突然でしたので、驚いたようです。お会いしていただいて、確かに車いすにて迎えてくれましたが、会話については、今は厳しいようでしたが、目では確かに認識していただきました。上記の軽井沢報告を 2 年前から読んでいただきました。笑って一時を過ごしてきました。血色も良く、回復ぶりは目でみて分かるぐらいになっており、リハビリは長嶋（茂雄）選手のように、1 年経過するごとに良くなるように、確信しました。

このメール以外でお話しすることとしては、山浦先生は、普段から、（週末には）高先経済大学から軽井沢へ行っていたと思います。ベンツの SUV に乗っていました。それで、往復していた時もあったようです。

山本先生は、柔道を続けており、私も柔道をしていましたので、別荘の居間には、柔道着が置いてあり、充実した山浦先生と山本先生の生活ぶりを垣間見た瞬間でした。献身的に介護していた山本先生、老後を一緒に過ごすお二人に病魔が遮断するという人生の悲哀は、いくばかりかと想い図るしかありませんが、研究者として家庭人として駆け抜けた山浦先生の背中を追って、卒業生が社会で活躍しております。

[西村先生インタビュー]

――ご家庭でのご様子などをうかがったことがありましたら、お教えください。

夏休みはいつも別荘に移られて、ご主人と犬と一緒に。だから、夏休みに連絡しようとすると、電話が転送になりますというのをお聞きしていました。夏休みが終わるまで、別荘に行っていますので、連絡は、夏休み中はとれないから、転送になりますからと。

（4）小括

以上、歴史研究として対象とした山浦先生の足跡と業績について考察してきたが、その結果、①研究者になられた、また専門分野・研究テーマの専攻のきっかけ、②研究継続の原動力と研究業績、③学内行政、ならびに社会貢献活動、④研究教育（仕事）と家庭の両立という形でまとめると、次のように言えると考える。

① 山浦先生の研究者となられたきっかけは、学部卒業後民間企業に就職の後、大学院へ進学されたという経緯から、ご自身の強い意志によるところが大きいと推察され、また、ご自身が、強く共感されたジャン・フーラスティエ思考に基づく、フランス会計学研究を研究テーマとして専攻し、傾注されたと考えられる。その意味で、フランス会計研究者、山浦先生の道筋は、自らつくりあげているように思われる。

② そうして取り組み始めたフランス会計学研究を生涯の研究テーマとし、大きく結実されたと同時に、企業・地域・社会の幅広い分野における諸課題やテーマに関する論文等を数多く公表されている。

　そのような研究継続と業績の原動力としては、なによりもジャン・フーラスティエ思考とフランス会計学への深い共感の念があり、また地域社会への愛着の念も大きいといえるように思われる。

③ 山浦先生の学内行政において果たされた貢献は多大であり、学部長および研究科長と

して、長年の懸案だった大学院設置をはじめ、母校の発展に奮闘されており、その卓越した管理運営能力は比するものがないと伺ったところである。

そのような学内行政におけるご奮闘と貢献を理解し支えられたのは、同僚であったご夫君、山本喜則先生であったと伺う。山本先生は山浦先生ご逝去後、学内行政を担われることはなかったとのことである。

山浦先生のご活躍は学外にも及び行政の各種委員をはじめ様々な社会貢献活動にも積極的に取り組まれた。その中で、企業・地域・社会に対して、積極的にご見解を新聞や雑誌等にも提言され、地域におけるオピニオンリーダーでもあった。

④ ご家庭は、学内における山浦先生の最大の理解者であった山本先生とともに築かれ、学内行政で奮闘され続ける山浦先生を山本先生はしっかりと支え続けながら、休暇になると必ず 2 人で愛犬を抱いて愛車を駆り、軽井沢へ楽しげに行かれたという光景は、心温まるものがある。

そして、山浦先生の突然の闘病生活のために、山本先生は考えられ、なしうる限りの対応をされていたと伺う。そこには、紛れもなく、仕事と家庭の両立の確かな形があると考える。

5　中川美佐子先生の業績と足跡

(1) 経歴

中川美佐子先生は、1935（昭和 10）年 4 月 20 日に神戸で出生された。

第二次世界大戦の影響により、中川先生は東北へと疎開、その後ご尊父さまの仕事により横浜に移られた。戦後の生活について、自由に学ぶ楽しさを体感されていたことを、インタビュー時に次のようにお話をされていた。

「*私が学校生活で一番楽しかったのは、まだ制度ががんじがらめになっていなかった中学・高校時代です。中学のホームルームにはクラス担任の先生も出席されていましたが、生徒が中心で伝達事項を報告したり自由に話し合ったりしていました。高校では、科目の選択上、一度に数学を 2 つも取り、芸術や家庭科を取らないようなこと（そんなことをしたのは私 1 人でしたが）もできたのです。*」（インタビュー238 頁）

1954（昭和 29）年にご家族からの勧めで、一橋大学商学部へ初期の女子学生として進学された。中川先生はインタビュー時に、次のように振り返られている。

「*一橋大学を選んだのは環境が良く、競争倍率が高かったからです。進学適性検査の時は、経済学部が第一志望でしたが、実学を嫌う私の性格を危惧した家族が、商学部でなければ学費を出さないといい、商学部の倍率がたまたま経済学部と同じく高かったことから妥協して、第一志望を商学部に変更したのです。*」（インタビュー238 頁）

大学では飯野利夫[123]先生に師事された。中川先生と会計学との出会いは、この飯野先生の授業であったようである。

「会計学との出会いは会計学のゼミナールに所属した学部の 2 年の時に遡る。テキストは Littleton の *Structure of Accounting Theory* で、指導教官は飯野利夫先生であった。リトルトンの学説研究から入っていったのは、会計学の基礎を学ぶ上できわめて有益であった。」（中川（美）[1988]「序」2 頁）

また、飯野先生のゼミを希望された理由については、次のとおりである。

「*当時はすごく理路整然とした良い論文を書かれていたので、飯野先生のゼミに、って思ったのです。*」（インタビュー238 頁）

大学卒業後は、先輩からの紹介により昭和鉱業株式会社入社され、1 年間勤務された。当時の就職先については次のように回顧された。

「*社内は家庭的な暖かい雰囲気でしたが、当時の鉱山会社では、母体保護のためとかで女性がトロッコに乗って坑内に入ることはできず、正社員としては扱われませんでした。*

[123] 飯野利夫（1919-2007）先生は、一橋大学および中央大学名誉教授。一橋大学にて教鞭をとられた後、中央大学、駿河大学でも教鞭をとられた他、日本会計研究学会の会長や企業会計審議会会長を務めるなど、会計界でご活躍された。

それでも世間知らずの私にはいい社会見学の会社になったと思います。」（インタビュー239 頁）

会社を辞した後、先生は一橋大学大学院商学研究科に、やはり初期の女子学生として進学された。学部時代と同様に飯野先生に師事されている。博士課程の時、指導教官を飯野先生から番場嘉一郎[124]先生に変更されたが、そのことに関して、

「*博士課程の時、学園紛争の最中に海外から帰国したのですが、飯野教授はすでに辞表を提出されていました[125]。『同じ人間が同じ大学に永く務めることは良くない』との理由からで（私に対する説明は）、他には何の説明もありませんでした。学内にはいろいろな情報がとびかい、理解できないまま、指導教官を変更せざるを得ませんでした。そこで、幅広いテーマに興味を持たれ、人間性豊かな番場嘉一郎教授にご指導を仰ぐことにしたのです。」*（インタビュー239 頁）

修士課程が修了された 1962（昭和 37）年 4 月から 1 年間、国際基督教大学（ICU）に助手としてご勤務された。その後、1970（昭和 45）年 3 月に一橋大学大学院を単位取得満期退学され、4 月より関東学院大学経済学部に講師として着任された。助教授、教授と昇進されるとともに、大学院では修士課程および博士後期課程の指導も担当されている。

中川先生といえば、比較会計制度論の研究者として著名であるが、大学院においてはペイトンやリトルトンなどの学説研究をされていた。

「*学説研究は、研究生活の入り口においては、きわめて重要だと思います。ただ私は学説の再構築にはあまり興味がなく、それ位なら理論を自分で構築すればいいと考えておりました。」*（インタビュー240 頁）

とお話しされている。このような考え方が新たな研究テーマである、比較会計制度論を選択された動機の 1 つとなっていたように思われる。

また、当時は他国の会計・監査制度への理解が薄かったことも、比較会計制度論の研究を進める動機となったようである。インタビューにおいて次のように話されている。

「*当時はグローバルな統一基準などなく、会計も監査も国によって全く異なっておりました。このことが国内では全く認識されず、監査役の制度はどの国にもあり、会計原則もどの国にもあると考えられていたのです。『企業会計原則』は米国の会計原則の影響*

[124] 番場嘉一郎（1909-1989）先生は、一橋大学名誉教授。一橋大学を停年退官後、青山学院大学や千葉商科大学において教鞭をとられた。この他、官公庁や研究機関等の各種委員を歴任され、「企業会計原則」の改正（1974（昭和 49）年）等にも携わられた。

[125] 飯野先生は 1970（昭和 45）年 3 月で一橋大学を辞している。安藤[2007, 75]には、大学紛争に絡んで一橋大学を去られたとの記述がみられる。

を受けていますが、米国には監査役の制度はありません。日本が新しい問題に直面するたびに、外国の制度に関心が集まったことも事実です。」（インタビュー239 頁）

こうして比較会計制度論という新たなテーマへの挑戦が始まるが、これは新たな研究分野の開拓という戦いの始まりともなった。そして、その研究にあたっては、原典主義と「up-to-date」をモットーとし、多言語の習得とともに最新の資料の収集に努められた。

「*資料は、原典主義にこだわっていたため、日本にいて入手できないものは直接現地に赴いて集めました。特殊分野の用語は辞書には載っておらず、資料の解読には苦労しましたが、語学が好きでしたから、苦にはなりませんでした。*」（インタビュー240 頁）

このような研究のために、中川先生は海外渡航を重ねられ、ご自身で資料や書籍を集め、これらを丁寧に翻訳した上で、必要事項をピックアップし、論文にまとめるという丹念な研究スタイルを貫かれている。このことは、1977（昭和 52）年にラ米諸国等を訪ねた際のことをまとめた、連載「ラ米紀行」（『會計』第 113 巻第 3～6 号、第 114 巻第 1～2 号所収）からも窺える。この時、100 日余りという短い時間の中、ラ米諸国の他、アメリカやイギリス、スペイン、ポルトガルを加えた 10 ヵ国を周られている。短いながらも充実した海外渡航となったようで、次のように記されている。

「ラ米諸国のほかにアメリカ合衆国、ポルトガル、スペイン、英国を日程に加えたのは、これらの国がラ米諸国と経済的に密接な関係にあることを考慮してのことであった。筆者は、以前から、比較会計制度研究の一環としてラ米の会計制度の比較研究を行ってきたが、今回、幸いにも、ラ米諸国を回ってその会計制度の実態を垣間見ることができた。」（中川（美）[1978a] 157 頁）

この連載により、中川先生ご自身、比較会計制度論の研究を行うに当たり、会計や原則のみを調べるのではなく、丹念に各国の経済事情や会計・監査制度、証券市場の制度にも言及し、各国の違いを伝えようと試みられていることが分かる。また、各国の調査にかかるインタビュイーの方々との交流にも力を入れられていたようである。

「筆者は、アルゼンチンの会計士が紹介してくれた、サンパウロ市内の会計事務所　を訪れた。所長の会計士は、図らずも、サンパウロ州立大学法学部の出身者で、彼の案内で、市街地の中心にある法学部を訪れる機会を得た。・・・・・（税法学の権威である）法学部長の好意で税法学会の名誉会員に推された。」（中川（美）[1978e] 158-159 頁）

また、当時のラ米諸国の物価や治安は、「ラ米紀行」の連載を見る限り、今日以上に厳しい状況であったものと推察される。例えば、

「南米旅行のときにはいつも持ち歩くロンドン版サウス・アメリカン・ハンドブックには、警告として、ボゴタ（コロンビア）はスリや泥棒で有名なところである故、現金や

貴重品には十分に注意すること、耳輪やネックレス等は外し、眼鏡も無しで済ますことができる場合には外して出かけ、人ごみの中には絶対に入らないこと、ボゴタに行っても何も無くさないで帰る人が殆んどいない以上、用心に越したことはないであろう云々、と記されている。これでは警戒心がいやが上にも高まろうというもの。とまれ、全く被害にあわなかったのは幸いであった。」（中川（美）[1978b] 161 頁）

「サンパウロに向かう。空港では、搭乗直前、日本赤軍のメンバーがハイジャックする予定との情報が入ったためか（それから暫くして、日独政府の対処のしかたの違いをめぐって議論が展開された、例のハイジャック事件が起きている）、日本人というだけの理由でつまみ出されて厳重な検査が行われたのは不愉快であった。」（中川（美）[1978d] 172 頁）

「ロンドン滞在中、電力会社の従業員のサボタージュのため、ロンドンの一部地域が順ぐりに予告もなしに停電に見舞われた。そのためであろう、ホテルの部屋にはローソクが備えられていた。ホテルではエレベーターがよく故障する上に停電が重なって、しょっちゅう階段を昇り降りしなければならなかった。また、盗難が頻繁にあるとあって、ラ米諸国にいるときよりも持物には神経を尖らせた。盗難等が多いのは、食堂のウェイターやウェイトレス等、末端の仕事にあたる有色人種が増えたためといわれているが、真偽のほどは定かではない。その上、公共の建物や大きなホテル等の入口では、必ず持ち物の検査が行われた。調べる人の感じのよかったことがせめてもの救いであった。」（中川（美）[1978f] 163 頁）

このように資料収集のため現地を訪れることは、金銭面のみならず治安の面においても相当な困難さがあったことが窺える。

そうした中で中川先生は、各国で多くの資料を収集されている。例えば、「ラ米各地で集めた資料・書籍等を小包にして約 130 個発送したが、全部無事日本に届いていることを付記しておく（国によっては 5 カ月近くかかったものもあるが）」（中川（美）[1978f] 163 頁）という記述が見られる。これらの資料に目を通すのみならず、翻訳原稿を記し、その後、論文等としてまとめていくという研究スタイルを採られていた。いずれもパソコン等を使わず、翻訳作業も執筆作業もすべて手書きで行っていたことを考えると、その研究の大変さは明白である。

また、多言語の理解についても、困難さが伴ったようである。例えば、ペルーの企業会計を規制する法規の解釈に際して、中川先生の努力の一端が垣間見られる記載が残されている。

「公募会社、上場会社または上場申請会社、ならびに、その純資産が 1,000 万ソール以上の（を超える）または年間の総収益が 5,000 万ソール以上の（を超える）会社は、当該規則にもとづいて財務諸表を作成しなければならないことになっている。ここに『以上

の』（を超える）としたのは“superior”の訳語として考えられる二つを併記したまでであるが、筆者はこれを『を超える』と解するべきものと考えていた。ちなみに、英語訳も“in excess of”となっているが〔Professional Accounting In 30 Countries (AICPA, 1975) p. 482〕、リマ公認会計士協会で数人の会計士に質問したところ、この場合には『以上』の意味であるとの回答を得た。」（中川（美）[1978b] 163 頁）

また、ブラジルを除くラ米諸国は同じスペイン語圏に属するものの、ラ米を南下するにしたがって変化するという。アルゼンチンで使われるスペイン語の聴解については次のような苦労があるという。

「アルゼンチンの人は語尾を省略して発音する傾向があり、『おはよう』という意味のブエノス・ディアス（buenos días）は会話ではブエン・ディア（buen día）となる。また、『もっと』という意味のマス（mas）はマ（ma）と聞こえるという工合。さらに、メキシコ等では、『ヤ』とか『ヨ』とか発音される“ya（lla）”や“yo（llo）”がアルゼンチンでは『ジャ』、『ジョ』と発音されるので、『5 月広場』の 5 月はメキシコ等ではマヨ（mayo）、アルゼンチンではマジョとなる。」（中川（美）[1978d] 171 頁）

中川先生はこのように苦労されながらも比較会計制度論という新たな研究へ情熱をもって取り組み膨大な業績をあげられると同時に、大学での教育についても大事にされていた。当時は学園紛争もあり、休講するようにとの指示がある中、講義を行ったこともあるという。学生にとっては貴重な学習の機会となったようである。

「*1 時間目の講義に 15 分ほど遅れて教室に入っていったとき、大教室には 2 人だけが待っていて、ゼミ形式で行った。その時の講義の様子を、社会人となった彼らの 1 人が大学の同窓会（燦葉会）雑誌に、懐かしい思い出として書いています。*」（インタビュー 244 頁）

こうして研究や教育に情熱を注がれるとともに、学内行政では、各種委員を担われ、さらにおそらく当時としては珍しい経営学科長を務められている。また学外では社会貢献活動として通産省の調査や県下の各種委員として活躍されている。当時の社会貢献活動については、必ず女性を 1 名加えるという構成が求められていたことから、多数の委員を引き受けられていたようである。

また社会貢献として、参議院法務委員会において「土地再評価」の参考人聴取に専門家として招請されることもあったようである[126]。当時の会議録によれば、

[126] 土地再評価法案は、参議院法務委員会（委員長、武田節子議員）において、1998（平成 10）年 3 月 24 日に議案者による法案の趣旨説明が行われ、同 27 日に参考人聴取、同 31 日に質疑、討論、投票が行われた。この参考人聴取において、商法の専門家である早稲田大学の奥島孝康先生とともに、中川先生は会計学の専門家として招聘されている。このうち主に土地再評価法案に対する聴取を受けたのは中川先生であった。参考人として意見を述べるにあたり、中川先生は①会計規定や基準の設定は恣意性を排除し利益操作の余地を狭めることをも目的とするものであること、②財務諸表の利用者に有益な情報を提供するのに役立つものであるべきこと、③法律の規定は解釈に疑義が生ずるものであってはならないことの 3 点を、

「私は、関東学院大学経済学部の会計の教員でありまして、財務諸表論等を担当いたしております。研究面では比較会計制度論を提唱し、略歴のところにありますように、これまでの外国の会計制度や監査制度について研究してまいりました。恐らく、比較会計制度論とか比較会計学とかいう言葉を用いたのは私が最初ではないかと思っております。実務には疎いわけで、また企業会計審議会には関係しておりませんので、ここで述べることは全く個人的な見解であることをお断りいたしておきます。このような人間が、このような場で参考意見を述べることはどうかとも考えましたけれども、日ごろから学問は社会に還元されなければならないと思っておりますので、意見陳述に応じた次第であります。」（「第 142 回国会参議院法務委員会会議録第 6 号」[1998] 3 頁）

中川先生はこのような研究をはじめ仕事でのご活躍の一方、私生活では 1964（昭和 39）年に大学院生の折、雑誌の編集委員を一緒に務められた中川和彦[127]先生（以下、和彦先生という）と結婚された。中川先生から和彦先生について次の印象深い話を伺った。

「*夫と知り合ったのは、大学（一橋大学）の大学院雑誌を編集する仲間としてです。夫は法学研究科に所属し、話好きでしたが、私はどちらかというと無口な方なので、相互補完関係にあると考えたのです。夫は法律を中心にラテン・アメリカの研究をしていましたが、夫は夫で自分の世界を持っていました。*」（インタビュー244 頁）

「*家庭生活は２人とも本に囲まれて、学生時代の延長のようなものでした。*」（インタビュー244 頁）

このようにご苦労をなされながらも新たな研究分野に取り組まれ、第一線で活躍されて、2001（平成 13）年に定年退職を迎えられた。その「退職を記念して、これまで書きためた童話の一部を出版」（中川（美）[2005]「はしがき」）されたという『どんぐり―私の童話集―』（2005 年）は、知りえなかった先生の一面であり、やさしく、あたたかく胸打つものである。その後、同大学の特約教授として務められ、2006（平成 18）年に職を退かれたが、現在もなお、教員になられた当時からのトレードマークであるベレー帽が印象的な中川先生である。

以上の中川先生の略歴を、中川先生ご本人よりにいただいた「教員の個人調書」にそってまとめると、図表Ⅴ-5-1 のとおりとなる。

基本的な立場として表明された。この観点に基づき、他の資産との評価方法との整合性を欠いていること、恣意性が介入する余地があること、そして当該法案の対象範囲等について意見を述べられた（「第 142 回国会参議院法務委員会会議録 6 号」［1998］3 頁；辻川［2006］219 頁）。

[127] 中川和彦（1931- ）先生は、1962（昭和 37）年 9 月に一橋大学大学院法学研究科博士課程を修了された。翌年 4 月より（社）国際商事法研究所研究員を務められるとともに、1964（昭和 39）年より成城大学に着任された。2002（平成 14）年 3 月に同大学を定年退職し、同年 4 月に名誉教授の称号を授与された。

図表Ⅴ-5-1　中川美佐子先生略歴

西暦	和暦	年	月	学歴・職歴	私生活
1935	昭和	10	4		神戸にて出生
1958	昭和	33	3	一橋大学商学部卒業	
1958	昭和	33	4	昭和鉱業株式会社入社・調査室勤務（～1959（昭和34）年4月まで）	
1962	昭和	37	3	一橋大学大学院商学研究科修士課程修了（商学修士）	
1962	昭和	37	4	国際基督教大学助手（～1963（昭和38）年3月まで）	
1964	昭和	39			中川和彦先生と結婚
1965	昭和	40	6	メキシコ国、アメリカ合衆国を旅行　メキシコ国のアメリカ文化センター・スペイン語学校初等科を卒業（～1965（昭和40）年9月まで）	
1968	昭和	43	7	南米アメリカ、西ヨーロッパを旅行し、比較会計制度研究に必要な資料を収集、メキシコ国のアメリカ文化センター・スペイン語学校中等科を卒業（～1969（昭和44）年4月まで）	
1970	昭和	45	3	一橋大学大学院商学研究科博士課程単位取得満期退学	
1970	昭和	45	4	関東学院大学経済学部講師	
1972	昭和	47	4	関東学院大学経済学部助教授に昇任	
1977	昭和	52	1	通産省の委嘱により「発展途上国に対する投資行動の指針」（経済5団体発表）のメキシコ国における実践状況を調査	
1977	昭和	52	4	関東学院大学経済学部教授に昇任	
1977	昭和	52	8	米国、メキシコ、コロンビア、ペルー、チリ、アルゼンチン、ブラジル、ポルトガル、スペイン、英国の10ヶ国を回り研究資料を収集・各国の証券取引所や会計事務所を訪問（～1977（昭和52）年11月まで）	
1980	昭和	55	8	フィリピン、シンガポール、オーストラリアに出張。マニラで開催された国際大学協会第7回世界大会にオブザーバーとして出席。東南アジア諸国、オーストラリアの文献・資料を収集（～1980（昭和55）年9月まで）	
1981	昭和	56	5	関東学院大学経済学専攻科主任（～1982（昭和57）年3月まで）	
1982	昭和	57		横浜港地区職業安定審議会委員	
1982	昭和	57	8	米国、メキシコ国出張。メキシコ国において金融機関の国有化の実態を視察（～1982（昭和57）年9月まで）	
1983	昭和	58	4	関東学院大学経済学科長（～1985（昭和60）年まで）	
1983	昭和	58		神奈川県雇用問題懇話会委員（1997（平成9）年3月まで）	
1987	昭和	62	4	関東学院大学大学院経済学研究科修士課程指導教授	
1987	昭和	62	8	米国、メキシコ、エクアドル、アルゼンチン、ウルグァイ、ブラジル、スペイン、イタリアの8ヶ国を回り、各国の証券取引所・関係諸団体を訪問し、研究資料を収集（～1987（昭和62）年9月まで）	
1989	平成	元	4	関東学院大学経済学専攻科主任（～1993（平成5）年まで）	
1991	平成	3	8	カナダ、メキシコ、スペイン、イタリアの4ヶ国を回り、NAFTAおよびECに関する資料を収集	
1992	平成	4		神奈川県産業廃棄物最終処分場設置審査会委員（～1998（平成10）年10月まで）	
1993	平成	5	4	関東学院大学大学院経済学研究科博士後期課程指導教授	
1993	平成	5		神奈川県高齢者雇用推進協議会委員（1995（平成）7年3月まで）	
1993	平成	5		神奈川県高齢者雇用推進協議会川崎分科会委員（会長）（～1995（平成7）年3月まで）	

西暦	和暦	年	月	学歴・職歴	私生活
1994	平成	6	1	関東学院大学大学院経済学研究科経営学専攻設置に際して審議会よりM㊒判定	
1994	平成	6	1	チリ、アルゼンチン、パラグァイ、ブラジル、米国、メキシコを回り、MercourおよびNAFTAに関する資料を収集	
1996	平成	8	1	関東学院大学大学院経済学研究科経営学専攻博士後期課程設置に際して審議会よりD㊒判定	
1996	平成	8	2	横浜市公文書公開審査会委員（～2000（平成12）年6月まで）	
1996	平成	8		米国、カナダに出張	
1997	平成	9	2	港湾調整審議会専門委員（～2000（平成12）年まで）	
1998	平成	10	3	参議院法務委員会において「土地再評価法案」の参考人聴取に専門家として招聘	
1998	平成	10		カナダ、メキシコ、米国に出張	
1999	平成	11		神奈川県廃棄物処理施設専門家委員会委員	
2000	平成	12	7	横浜市情報公開・個人情報保護審査会委員（～2002（平成14）年6月まで）	
2006	平成	18	3	関東学院大学経済学部特約教授　退職	

（2）研究業績

中川先生の研究業績は後述のⅤ-5-3 のように、単著のみでは 12 篇、共著では 8 篇、論文等はあわせて 200 篇以上を超える膨大なものとなり、毎年平均して 10 篇近い業績をあげておられる。その驚異的ともいえる業績を通して、中川先生が取り組み、提唱されたのは、「比較会計制度論」であり、その立場から考察された合併会計制度ならび会社会計制度の比較研究が先生の主要な研究業績となっている。

そこで、以下中川先生の研究業績について、①提唱された「比較会計制度論」について、②合併会社会計制度の比較会計制度論的考察に関するもの、③会社会計制度の比較会計制度論的考察に関するものに区分し、さらに、④その考察において原典主義を貫きながら、ラテン・アメリカ諸国を中心に世界 15 ヵ国にわたる会計制度を取り上げられたことから、極めて堪能な語学力を活かして編まれた辞典をくわえて、整理することにする。

① 「比較会計制度論」について

中川先生が「比較会計制度論」を明示的に提唱されるようになったのは、1973（昭和 48）年に公刊された、先生の初めての著書『合併会計―主要 6 ヵ国の比較制度論的研究―』（千倉書房）においてであると思われる。本著書の「序」の冒頭で次のように述べられておられる。

「本書は合併会計の問題を国別にとりあげることにより、比較制度論的考察を試みている。国別にとりあげるに際しては、すべてその国の原典によることにし、そのため、本書でとりあげられたのは、合併の会計制度の研究対象として有意義であり、しかも資料を入手しえた米・英・仏・独の 5 ヵ国とそれにわが国を加えた 6 ヵ国の合併の会計制度にかぎられることになった。イタリアとブラジルについては、合併の会計制度の研究の上からはきわめて興味があるが、原典主義を貫き通すために資料不足の点で断念せざるを得なかった。」（中川（美）[1973]「序」1 頁）

そして、「あとがき」の言は印象深い。

「著者が比較会計制度論を始めてから、まだ日は浅いが、この道を選んだ時にすでに骰子は投げられた。この道を歩み続けよう。」（中川（美）[1973]「あとがき」3 頁）

こうして始められた比較会計制度論について、後述の『会社会計制度の比較研究―12 ヵ国を対象として―』（千倉書房、1988 年）において、「研究に 1 つの区切りをつける意味もあって、著者の方法論にも触れ」るとして、次のように説明されている。

[定義]

「ここに比較会計制度論とは、各国の会計制度に関する研究の方法論として著者が提唱してきたものである。すなわち、各国の会計制度の比較を通して関係諸国間の会計制度の異同を明らかにし、比較研究の成果を 1 つの統一的な体系にまとめあげることをいう。この場合の比較は、制度の特徴に即した、すなわち機能面に重点をおいた、総合的な比

較であって、無定見・断片的に入手した資料にもとづく、各国の会計制度に関する知識の寄せ集めでないことはもちろん、これらの寄せ集めを項目ごとに併記することでもない。」（中川（美）[1988] 2 頁）

[対象]

「目下、比較研究の対象を欧米およびラ米諸国の会計制度、ならびに英連邦諸国の会計制度、に限っている。これは、著者の場合、近代化以降におけるわが国との関係またはわが国との類似性に着目して比較の問題を考えているからで、法や制度の継受という面から、比較の対照を限定したことによる。

欧米諸国の会計制度については、わが国の制度との相互交流の可能性があり、しかもわが国の制度との違いも認められる。それ故に比較研究の対象としては格好の材料と考えられたからである。・・・・・ラ米諸国については、大陸法系に属していること、および自国の会計制度に及ぼすアメリカの影響がしだいに増大しつつあること、という 2 点において、わが国との類似性が認められるため、また英連邦諸国については、イギリス法系に属していること、および自国の会計制度に及ぼすアメリカの影響がしだいに増大しつつあることから。その二面性においてわが国と類似しているため、比較研究の対象として取り上げることにしたものである。」（中川（美）[1988] 2-3 頁）

[方法]

「外国の会計制度を比較考察するためには、その前提として、その国の会計制度を体系的に把握していかなければならない。ここに『体系的に把握する』というのは、特徴を踏まえて制度の全体像を把握することを意味している。・・・・・各国の会計制度を体系的に把握した後、制度運用の実態等を考慮して、比較を行う。この場合の比較は、特徴に即した、すなわち機能面に重点をおいた、総合的な比較である。・・・・・立体的・能動的ともいうべき機能比較によって、はじめて、外国の制度を正しく理解することができるものと考えている。」（中川（美）[1988] 3-4 頁）

[目的]

「外国の会計制度を比較研究する究極的な目的は、比較研究の対象とされたこれらの国の会計制度に見られる差異の原因を、その国の社会・経済・文化などの背景にまで遡って分析し、これによって制度が実施されている国の事情を少しでも正しく理解すること、すなわち『外国を理解すること』にもとめられる。」（中川（美）[1988] 4 頁）

[比較会計制度論と国際会計論との異同]

この異同については、後述の『合併会計制度論』（千倉書房、1978 年）において明快な次の説明がみられる。

「著者のいわゆる『比較会計制度論』とインターナショナル・アカウンティング（国際会計論）との関係について言及し、両者の異同を記すことにより『比較会計制度論』の輪郭を明らかにしよう。・・・・・国際会計論の場合には、比較の基準なり指針なりがあらかじめ統一的に定められているか、あるいは定められていなければならないのに対して、『比較会計制度論』の場合には、比較の対象となる国の会計制度の特徴に即して比較が行われることになるものと考えられる。これは思うに、両者の目的が異なることによるものであろう。すなわち国際会計論の場合には、会計制度の国際的統一ないし調和を目標としており、その目的がこのように１つのものに限定されているのに対し、『比較会計制度論』の場合には、その目的が 1 つに限定されるものではなく各種の目的を有しており、このような目的の多様性にこそその特徴の一端が見いだされるからである。…（中略）…

著者が『比較会計制度論』的考察を行うに際して目的としていることは、会計制度の比較をとおして、その国の法制・各種の慣習・経済構造・経済の発展段階などの会計環境を分析し、さらには国民性の相違にまで分析のメスを入れることにある。したがって、国際会計論と著者の目指す『比較会計制度論』とは密接に関係しているとはいえ、問題意識の相違から、具体的な会計制度の比較においても、必ずしも同一の方法によらないのではないかと思われる。」（中川（美）[1978g] 2-3 頁）

[津守常弘先生のコメント]

中川先生が提唱される「比較会計制度論」について、津守常弘[128]先生から次のような貴重なコメントをいただいた。

「*いわゆる会計の国際化、グローバリゼーションということをよく言いますけれど、グローバルの意味が、私達日本人の考えるものと、例えばイギリスやアメリカの人が考えるものと違うように私は思う。私たちが考えている制度を地球中へいきわたらせる、という意味でグローバリゼーションと言っているように思うのです。その場合の国際化というのは、できる限り皆が統一的にと言う方向に行きますよね。それが必ずしもうまくいっているわけではありませんが。それに対して、中川先生の場合は、そういう目で比較論をやっているわけではないような気がするのですね。多様性というものを考えたうえで、比較論をやっているわけで、我々にとってもありがたいことじゃないかなと思います。*」（インタビュー241 頁）

② 合併会計制度の比較会計制度論的考察に関するもの

[『合併会計―主要 6 ヵ国の比較会計制度論的研究―』千倉書房、1973 年]

本書の意図と意義について、合併会計制度の比較会計制度論的考察にあることを次のように説明しておられる。

---

[128] 津守常弘（1930-　）先生は、九州大学名誉教授。現在は九州情報大学に勤められている。

「著者は、この書物において、米・英・加・仏・独・日の 6 ヵ国をとりあげ、その合併および合併の会計制度について考察する。これら 6 ヵ国をとりあげたのは、米・英・仏・独の 4 ヵ国については、これらが多くの国に影響を及ぼした 4 大先進国であって、制度の比較研究に際してはとりあげられるのがいわば定石となっていることによる。一方、カナダは合併の盛んな国として、また、わが国は諸外国との比較考察の便宜のためにとりあげられたものである。

ところで、合併会計の問題は、利益配当や監査制度あるいは破産・清算などの問題とならんで、商法と会計の接点に位置する問題である。したがって、合併の会計制度についてはこれを会計と商法の両面から考察しなければならない。そのためもあって、研究の必要性にもかかわらず、わが国においては、これまで諸外国における合併の会計制度についてはほとんど研究がなされていなかったのが実情のように思われる。筆者が本書において各国の合併会計制度に関する比較研究を試みたのは、このような現状をかえりみてのことである。

制度の比較研究の方法としては各国の制度を項目別に比較対照するという手法もあるが、各制度をその特徴に即して把握するという手法の方が、制度の比較研究の方法としてはより優れていると考えられる。そこで、本書においては後者の手法を採用した。」（中川（美）[1973] 1 頁）

[『合併会計制度論』千倉書房、1978 年]

本書の意図と意義についても、基本的に前著書と同じく比較会計制度論的考察にあるが、考察の対象が広がり、かつ前著書からの動きを正確に捕捉して、考察をくわえている。

「本書は、旧著（『合併会計—主要 6 ヵ国の比較制度論的研究—』）の研究をさらに発展させたもので、旧著で取り上げられていた米・英・加・仏・独・日の 6 ヵ国に加えて、本書では新たにスイスのほかアルゼンチン・ブラジル・メキシコのラ米 3 ヵ国についても、その後の動きにもとづいて大幅な加筆修正を施している。

本書で考察の対象とした 10 ヵ国については、執筆の段階で入手しうるかぎりの最新の原典資料によっている。その中には、昨年、海外研修中に現地で収集した資料も含まれていることを付記しておきたい。

なお、本書を執筆するに際しての著者の基本姿勢は旧著の場合といささかも変わっておらず、本書は比較会計制度論的見地に立って各国の合併会計制度を考察している。すなわち、研究対象とする各国の合併制度および合併の会計制度を、その特徴に即して比較考察している。合併会計を研究対象に選んだのは、合併会計が商法と会計の両分野にまたがる問題であり、比較制度研究の対象としては格好の材料と考えられたからである。」（中川（美）[1978g]「序」1 頁）

[『会社合併の源流および米・英・加・日の合併会計』千倉書房、2000 年]

本書は、このような合併会計制度の比較会計制度論的考察についてさらに進められたものである。「序」において次のように記述されている。

「本書では、米国・英国・カナダ・日本の 4 ヵ国を対象として会社合併および合併会計について考察している。まず、会社合併や合併会計の理解に不可欠な事項について考察し、ついで、これまで取り上げたことのない会社合併の源流について考察した後、会社合併の仕組みや規制について考察している。この分野は、最後の合併会計とともに、これまで行ってきた研究の延長線上にある。」（中川（美）[2000]「序」1 頁）

その結果、本書では、合併会計における買収方式と持分プーリング方式の各国の適用状況について、各国の法制や企業会計を取り巻く環境、また会社合併の背景や制度等も分析して鮮明にしている。

そして、以上のような合併会計制度の比較会計制度論的考察に基づき、その分類を次のように試みておられる。

「合併会計制度の研究に 1 つの区切りをつけるために書いた『合併会計制度の比較研究—11 ヵ国を対象にして—』（『企業会計』32 巻 7 号所収）では、アメリカ、イギリス、カナダ、フランス、西ドイツ、スイス、スペイン、アルゼンチン、ブラジル、メキシコおよび日本の 11 ヵ国における合併会計制度、を比較考察の対象とし、これらの合併会計制度を、合併にかかわる法制と会計処理の観点から、アメリカ型、フランス型、西ドイツ型の 3 つのパターンに分類した。」（中川（美）[1988]「序」1 頁）

あわせて、その分類に対して、次のような評価が得られたことを紹介されている。

「当該論文を自分で英訳した“A Comparative Study of Merger Accounting Systems in 11 Countries”(Kanto Gakuin University Economic Review, No.3, Mar. 1981)の骨子が Frederick D. S, Choi = Gerhard G. Mueller, International Accounting (Englewood Cliggs, New Jersey: Prentice Hall, Inc., 1984) pp. 219～20 において紹介されており、恐らくは、この分類が、欧米諸国の学者によっていまだ試みられて折らず、著者独自のものであることから、Choi = Mueller 教授が取り上げられたものであろう。このことが著者の励みになっている。」（中川（美）[1988]「序」1-2 頁）

この 3 つのパターンの分類は、「合併・分割会計の国際比較」（荒川邦寿編著『会計合併・分割の会計』中央経済社、1983 年所収、152 頁）、および上記『会社合併の源流および米・英・加・日の合併会計』（111 頁）によると、次のようにまとめられる。

ｉ）アメリカ型：広義の合併を会計処理の観点から買収と持分プーリングとに分け、それぞれに対応する会計処理の方式を考える合併会計制度群
（属する国：アメリカ、イギリス、カナダ）

ⅱ）フランス型：合併の本質を現物出資と考える、かつてのフランス法に基づく、合併本質観（現物出資説）と結びついた合併の会計処理を行う合併会計制度群
（属する国：フランス、ブラジル）

ⅲ）ドイツ型　：　合併本質観（人格合一説）と結びついた合併の会計処理を行う合併会計制度群
（属する国：（西）ドイツ、スイス、スペイン、イタリア、アルゼンチン、メキシコ、日本）

[津守常弘先生のコメント]

中川先生の合併会計制度の比較会計制度論的考察について、津守先生からその背景や意義に関して、次のようなコメントをいただいた。

「*（中川先生の研究には、）歴史的な背景があったのではないかと思っています。まず、中川先生が研究活動を始められた1960年代はアメリカの第三次合同運動があった時期ですよね。中川先生は合併会計に非常に関心をお持ちになったのではないかなと私は考えております。*」（インタビュー240-241頁）

「*（カナダとイギリスについては、）カナダの場合は、法制度的にはかなりイギリスの影響を受けていますが、カナダで活躍されている方はアメリカ人。だから実務はアメリカ寄りになる。やっぱりその 2 つが影響しておりまして、合併会計の問題にしましても、持分プーリング方式についてカナダは認める。イギリスは本来認めないのですよね。今はもう、これは否定の方向にいっていますが、70 年代というのはどっちでも良かった。買収しているにもかからず持分プーリング法で処理することもあり、持分プーリングしているのに買収法で処理することもあった。それによって利益が過大に計上される、のれんが計上されませんから、そこで問題になる。イギリスの場合は、非常に柔軟な考え方がありますが、会計制度自体は会社法の影響が強いですから、こう（クロス）した処理方法はできない。そういう意味では中川先生の研究は非常に意味があって、繰り返し同じような研究の組み直しをやっているので、一見したところまた同じようなことを言っているなと見えるかも知れませんが、その時点時点で勿論意味があると私は肯定的に評価しています。*」（インタビュー243頁）

③ 会社会計制度の比較研究制度論的考察に関するもの

[『ブラジル企業会計制度論』たまいらぼ、1976年]

本書の趣旨は、その序において次のように明解である。

「本書はブラジルにおける企業会計制度を比較会計制度研究の一環として取り上げるものである。筆者は前著『合併会計』において『比較会計学』ないし『比較会計制度論』を提唱した。筆者のいう比較会計制度論は、研究対象とする各国の会計制度をその特徴

に即して比較考察し、かかる特徴をその国の社会・経済・文化などの背景にまで遡って分析することを骨子とする。本書は、このような比較会計制度的な見地にたってブラジルの企業会計制度を考察している。」（中川（美）[1976]「序」1 頁）

本書は、中川先生が常に心がけてきたといわれる「up-to-date な資料の入手」による「最近の研究成果」として、1980（昭和 55）年に**[『新ブラジル企業会計制度の研究』国際商事法研究所、1980 年]**となって発行されている。

[『イギリスの会計制度—比較制度論的研究』千倉書房、1982 年]
[『西ドイツの会計制度—イギリスとの対比において』千倉書房、1985 年]

両著書は、「著者の主張する比較会計制度論の立場にたった外国の会計制度に関する研究の一環となすものであり、著者の研究の一里塚を示すものである。」（中川（美）[1985]「序」1 頁）。

イギリスについては「イギリスは会計学発祥の地である。イギリスの会計制度に関心を持ったのは、こんなことにも原因があったように思われる。」（中川（美）[1982]「序」1 頁）と述べられている。

一方、「西ドイツの会計制度を、イギリスの会計制度との比較において考察した」のが、後者であり、その意図を次のように説明しておられる。

「西ドイツの場合には、企業の資金調達に銀行が支配的な役割を果たしており、商事法上、債権者保護のの規定が整備されている。片やイギリスにおいては、証券市場が発達し、法は、資金の提供者である不特定多数の株主を保護する立場、をとっている。西ドイツが制定法中心の国であるのに対して、イギリスは判例法中心の国である、などなど。このように両国は種々の点で対照的な性格を有し、これらの違いは、当然、両国の会計制度にも反映されている。西ドイツの会計制度の特徴をつかむために、イギリスの会計制度と対比させたのは、1 つには両者がこのように対照的な関係にあることによる。いま 1 つには、著者がすでに『イギリスの会計制度』（千倉書房）を公表しており、イギリスにおけるその後の動きをフォローする意味もあった。」（中川（美）[1985]「序」1 頁）

[『会社会計制度の比較研究—12 ヵ国を対象として—』千倉書房、1988 年]

本書は、このような中川先生の「比較会計制度論の立場にたった外国の会計制度に関する 1 つの区切り」として公刊されたものであり、その意図は次のように説明されている。

「本書は、これまでの著者の研究成果を踏まえ、さらに、本年の夏、海外に出かけた際に収集した資料も用いて、アメリカ、イギリス、西ドイツ、ブラジル、メキシコおよび日本の 12 ヵ国について会社会計制度の比較研究を試みたものである。著者は、法や制度の継受という観点から当面の研究対象を欧米、ラテンアメリカ、英連邦諸国に限定しているが、本書では、そのうち、経済・法制面でわが国と比較的関係の深い 12 ヵ国を取り

上げて比較考察を行っている」（中川（美）[1988]「序」1 頁）

そして、その 1 つの区切りをつける意味もあって 12 ヵ国の会社会計制度について、次のような分類を試みておられる。図式を見ると、次の図表Ⅴ-5-2 のようである。

図表Ⅴ-5-2　12 ヵ国の会計制度の分類

（出所：中川（美）［1988］212 頁）

前述のように「1 つの区切り」をつけた後も、精力的に比較会計制度論的考察を続けられ、[『EU5 ヵ国の会計および監査制度』千倉書房、1991 年]、[『スペイン・イタリアの会計制度』千倉書房、1994 年]、[『イベロアメリカの会計制度―メキシコ・アルゼンチン』千倉書房、1996 年]が刊行されている。

さらに、先生の比較会計制度論の立場から資産評価の問題に焦点をあて考察した著書が[『複眼的資産評価論』千倉書房、2003 年]である。本書の意図は次のとおりである。

「まず、米国会計学成立の先達の資産評価に関する学説を取り上げた後、大陸法系諸国および英米法系諸国における会計制度と資産評価の問題を大局的かつ主要国別に考察し、ついで大陸法系諸国、英米法系諸国およびラテンアメリカ諸国の合併の制度と合併に際しての資産評価の問題を、同様の手法で取り上げている。

資産評価の問題は、今日、国境を越えて議論されており、国益も絡み、国内における大会社・中小会社という会社の二極化とも関連した問題である。本書において著者は、資産評価の問題を、著者のこれまでの研究成果を踏まえて、歴史的な流れのなかでとら

えるとともに、できるかぎり各国の up-to-date な問題にも触れるように配慮した。」（中川（美）[2003]「序」1 頁）

① [『5 か国語対照ビジネス用語辞典(ポ英仏独→日)』たまいらぼ、1976 年]
[『ポ和(英仏独日 5 か国語)ビジネス語辞典』たまいらぼ、1991 年]

本辞典は、中川和彦先生・中川美佐子先生が監訳者となって編まれたものであり、その監訳者のことばとして次のように記されている。

「昨年夏、ブラジルを中心にラテン・アメリカ関係図書の出版を手がけている『たまたいぼ』の主宰者玉井氏が来訪され、本辞典の出版について意見を求められた。これは私共の一方が商法・経済法を、他方が会計学を専攻する者であるが、それぞれの専攻分野において比較法あるいは比較会計制度研究を進めるに際して、ブラジルの文献・資料に多少ともなじんでいることによるものであろう。…（中略）…

私共は、次のような理由から本辞典の刊行を望ましいものと思った。

第一に、葡和辞典に採録されているいわゆるビジネス用語の数が少なく、ビジネス関係の文献を読むにあたっての多くの不便が、本辞典によってある程度解消されるのではなかろうか、ということ。第二に、本辞典が葡英仏独 4 ヵ国語の対照形式をとっていることは、英仏独語の既習者にとって、場合により葡和のみよりも便利と思われるからである。…（中略）…

やり始めてみると、本辞典の翻訳は大変な仕事であった。特に、四ヵ国語の語意が少しずつずれているものがあり、結果的には、ポルトガル語の語意を重視することにした。」（中川（和）・中川（美）[1976/1991]「監訳者のことば」）

[津守常弘先生のコメント]

このような辞典の発行に関連して、津守先生から次のようなコメントをいただいた。

「*（中川先生のご研究の）1 つの背景として、ご主人が成城大学におられた中川和彦先生で、商事法関係の権威ですよね。この時代にはすでに第一線で活躍なさっていました。お二人で辞典を発行されていますよね。二人三脚と言って良いのか分かりませんが、お二人は非常に呼吸の合ったご研究をなさっていました。それで、英米、仏、独にくわえて、さらにイベリア半島、ラテン・アメリカなどを選ばれたのではないか、と私は解釈しています。*」（インタビュー241 頁）

以上を含む、中川先生の著書・論文等をご提供いただいた業績一覧を踏まえ、国立国会図書館、国立情報学研究所等のデータベースで確認した結果をくわえてまとめると、次頁以降の図表Ⅴ-5-3 となる。なお、論文タイトルは国立情報学研究所の表記にあわせている。

図表Ⅴ-5-3　中川美佐子先生著作目録

単著

番号	西暦	和暦	年	月	著書名	出版社	備考
1	1973	昭和	48	12	合併会計：主要6ヵ国の比較制度論的研究	千倉書房	
2	1976	昭和	51	12	ブラジル企業会計制度論	たまいらぼ	
3	1978	昭和	53	11	合併会計制度論	千倉書房	
4	1980	昭和	55	4	新ブラジル企業会計制度の研究	国際商事法研究所	
5	1982	平成	57	4	イギリスの会計制度：比較制度論的研究	千倉書房	
6	1985	平成	60	10	西ドイツ会計制度論：イギリスとの対比において	千倉書房	
7	1988	平成	63	2	会社会計制度の比較研究：12カ国を対象として	千倉書房	
8	1991	平成	3	5	EC5カ国の会計および監査制度	千倉書房	
9	1994	平成	6	1	スペイン・イタリアの会計制度	千倉書房	
10	1996	平成	8	5	イベロアメリカの会計制度：メキシコ・アルゼン	千倉書房	
11	2000	平成	12	2	会社合併の源流および米・英・加・日の合併会計	千倉書房	
12	2003	平成	15	3	複眼的資産評価論	千倉書房	

共著

番号	西暦	和暦	年	月	タイトル	出版社	共著者等	執筆箇所
1	1974	昭和	49	8	会社の計算(下巻)	商事法務研究会	吉永栄助・飯野利夫監修	第8章第2節「合併」
2	1974	昭和	49	8	経営法学(経営学全書39)	丸善	吉永栄助編著	第5章「企業会計法」
3	1982	昭和	57	5	進展する企業法・経済法(吉永栄助先生古稀記念)	国際商事法研究所	喜多了祐・中川和彦代表編集	第4章「比較会計制度論再考—総合的な会計制度研究のために—」
4	1982	昭和	57	6	財務会計の基礎知識(初版)	中央経済社	中村忠編著	第5章「資本会計」
5	1983	昭和	58	3	会社合併分割・分割の会計	中央経済社	荒川邦寿編著	第8章「合併・分割会計の国際比較」
6	1984	昭和	59	7	国際会計論	東洋経済新報社	染谷恭次郎編著	第2章第6節「ブラジルの会計制度」

翻訳

番号	西暦	和暦	年	月	著書名	出版社	共著／単著	共著者	備考
1	1976	昭和	51	7	5か国語対照ビジネス用語大辞典：ポ英仏独→日	たまいらぼ	共著	中川和彦	Iris Strohschoen原著
2	1991	平成	3	9	ポ和(英仏独日5か国語)ビジネス語辞典：商工業,金融,法律,貿易,会計およびコレポン等に必要な用語を網羅	たまいらぼ	共著	中川和彦	Iris Strohschoen原著

学術論文

番号	西暦	和暦	年	月	タイトル	雑誌名等	巻号等	備考
1	1970	昭和	45	4	アルゼンチンにおける企業会計原則	海外商事法務	94	
2	1970	昭和	45	6	コングロマリット的合併の会計処理に関する一考察--持分プーリング方式をめぐって-上-	旬刊商事法務研究	527	
3	1970	昭和	45	7	コングロマリット的合併の会計処理に関する一考察--持分プーリング方式をめぐって-下-	旬刊商事法務研究	530	
4	1970	昭和	45	9	続コングロマリット的合併の会計処理に関する一考察	旬刊商事法務研究	536	
5	1970	昭和	45	9	メキシコにおける企業会計制度の一研究	経済系	84	関東学院大学
6	1970	昭和	45	10	アルゼンチンにおける監査制度-上-	月刊監査役	16	
7	1970	昭和	45	11	アルゼンチンにおける監査制度-下-	月刊監査役	17	
8	1970	昭和	45	11	アルゼンチン所得税法における会計規定	経済系	85	関東学院大学・資料
9	1970	昭和	45	12	補足資料：アルゼンチンにおける計算書類規則	ラテンアメリカ時報	13(36)	
10	1971	昭和	46	2	合併の会計処理に関する新基準--米国会計原則意見書第16号「企業合同」について-上-	旬刊商事法務研究	548	
11	1971	昭和	46	2	合併の会計処理に関する新基準--米国会計原則意見書第16号「企業合同」について-中-	旬刊商事法務研究	549	
12	1971	昭和	46	2	合併の会計処理に関する新基準--米国会計原則意見書第16号「企業合同」について-下-	旬刊商事法務研究	551	
13	1971	昭和	46	3	メキシコにおける会計原則の一考察	経済系	87	関東学院大学
14	1971	昭和	46	5	米国会計原則委員会意見書第16号「企業合同」の解説	産業経理	31(5)	
15	1971	昭和	46	7	暖簾の会計処理について	旬刊商事法務研究	567	APBの意見書第17号「無形固定資産」の
16	1971	昭和	46	8	合併の会計処理について--会計学上の現物出資説・人格合一説なる用語の批判的検討	経済系	88	関東学院大学
17	1971	昭和	46	11	ペイトン学説の一研究--資産評価論,とくに増価の問題を中心にして	経済系	89	関東学院大学
18	1972	昭和	47	1	英国における合併の会計処理に関する考察--合併の会計制度に関する比較研究	経済系	90	関東学院大学
19	1972	昭和	47	3	ラテン・アメリカ主要国における会計制度	企業会計	24(3)	各国の会計制度とその特色(特集)
20	1972	昭和	47	3	会計における真実について--マックニールとリトルトンの所説を中心にして	経済系	91	関東学院大学
21	1972	昭和	47	3	スペインにおける監査制度	月刊監査役	31	

学術論文

番号	西暦	和暦	年	月	タイトル	雑誌名等	巻号等	備考
22	1972	昭和	47	4	メキシコにおける監査制度	ラテン・アメリカ論集	5	ラテン・アメリカ政経学会
23	1972	昭和	47	6	米仏における会社分割--税制を中心として	産業経理	32(6)	会社分割の諸問題(特集)
24	1972	昭和	47	7	ウィリアム・アンドリュー・ペイトン(人と学説)	産業経理	32(7)	
25	1972	昭和	47	7	フランスにおける合併の会計制度--合併の会計制度に関する比較研究	経済系	92	関東学院大学
26	1972	昭和	47	9	カナダにおける合併の会計制度--合併の会計制度に関する比較研究	経済系	93	関東学院大学
27	1972	昭和	47	11	ラテン・アメリカ法の手引き-19-メキシコ会社法の概要-10--会社の計算	海外商事法務	125	
28	1972	昭和	47	11	企業の社会監査	旬刊商事法務	614	商事法務トピックス
29	1972	昭和	47	11	西独における合併の会計制度--合併の会計制度に関する比較研究	経済系	94	関東学院大学
30	1973	昭和	48	3	米国における合併の会計制度--合併の会計制度に関する比較研究	経済系	95	関東学院大学
31	1973	昭和	48	3	企業の社会監査をめぐる問題の提起	旬刊商事法務	623	
32	1973	昭和	48	6	実価法の理論と適用	産業経理	33(6)	実価法の理論と適用(特集)
33	1973	昭和	48	7	APB意見書第16号「企業合同」に関する批判--ワイアットの見解を中心にして	経済系	96	関東学院大学
34	1973	昭和	48	7	英国における会社法改正の動き	旬刊商事法務	636	
35	1973	昭和	48	8	英国の会社法改正に対する株式取引所の見解	旬刊商事法務	639	
36	1973	昭和	48	9	社会的責任会計に関する一考察--マーリンの所説を中心にして	経済系	97	関東学院大学
37	1973	昭和	48	11	アルゼンチン新会社法における監査制度	月刊監査役	51	
38	1973	昭和	48	12	アルゼンチン新会社法における株式会社の会計規定	経済系	98	関東学院大学
39	1974	昭和	49	2	アルゼンチンにおける株式会社の監査制度--改正と問題点	経済系	99	関東学院大学
40	1974	昭和	49	4	スペインおよび中南米諸国の企業会計-1- スペインにおける企業会計制度-1-	国際商事法務	2(4)	
41	1974	昭和	49	5	4カ国における棚卸資産の会計制度	経済系	100	関東学院大学
42	1974	昭和	49	5	スペインおよび中南米諸国の企業会計-2-スペインにおける企業会計制度-2-	国際商事法務	2(5)	

学術論文

番号	西暦	和暦	年	月	タイトル	雑誌名等	巻号等	備考
43	1974	昭和	49	8	スペインおよび中南米諸国の企業会計-3-スペインにおける企業会計制度-3完-	国際商事法務	2(8)	
44	1974	昭和	49	9	スペインおよび中南米諸国の企業会計-4-ブラジルの企業会計制度	国際商事法務	2(9)	
45	1974	昭和	49	10	英国における連結財務諸表--制度論的考察-1-	経済系	101	関東学院大学
46	1974	昭和	49	12	スペインおよび中南米諸国の企業会計-5-スペインにおける企業会計制度-4-改正商法に基づく会計規定	国際商事法務	2(12)	
47	1975	昭和	50	2	スペインおよび中南米諸国の企業会計-6-ヴェネズエラにおける企業会計制度-1-	国際商事法務	3(2)	
48	1975	昭和	50	3	英国における連結財務諸表--制度論的考察	経済系	102・103	関東学院大学
49	1975	昭和	50	5	スペインおよび中南米諸国の企業会計-7-ヴェネズエラにおける企業会計制度-2-	国際商事法務	3(5)	
50	1975	昭和	50	6	ブラジルにおける公表財務諸表	経済系	104	関東学院大学・研究ノート
51	1975	昭和	50	6	スペインおよび中南米諸国の企業会計-8-ブラジルの企業会計制度-2-	国際商事法務	3(6)	
52	1975	昭和	50	7	スペインおよび中南米諸国の企業会計-9-ブラジルの企業会計制度-3-	国際商事法務	3(7)	
53	1975	昭和	50	9	スイスにおける合併の会計制度-1-	経済系	105	関東学院大学
54	1975	昭和	50	9	スペインにおける改正外資法	国際商事法務	3(9)	
55	1975	昭和	50	10	スペインおよび中南米諸国の企業会計-10-ブラジルの企業会計制度-4-	国際商事法務	3(10)	
56	1975	昭和	50	11	スペインおよび中南米諸国の企業会計-11-ブラジルの企業会計制度-5-	国際商事法務	3(11)	
57	1975	昭和	50	12	スペインおよび中南米諸国の企業会計-12-スイスにおける合併の会計制度-2-	経済系	106	関東学院大学
58	1975	昭和	50	12	スペインおよび中南米諸国の企業会計-13-ブラジルの企業会計制度-6-株式法参考草案にみられる計算規定-1-	国際商事法務	3(12)	
59	1976	昭和	51	2	ブラジルの企業会計制度-7-株式法参考草案にみられる計算規定-2-	国際商事法務	4(2)	
60	1976	昭和	51	3	ブラジルにおける合併の会計制度	経済系	107	関東学院大学・山崎仁教授退職記念
61	1976	昭和	51	4	スペインおよび中南米諸国の企業会計-14-アルゼンチンにおける企業会計制度-1-	国際商事法務	4(4)	

学術論文

番号	西暦	和暦	年	月	タイトル	雑誌名等	巻号等	備考
62	1976	昭和	51	5	スペインおよび中南米諸国の企業会計-15-アルゼンチンにおける企業会計制度-2-	国際商事法務	4(5)	
63	1976	昭和	51	6	APB意見書第16号に対する批判その後	経済系	108	関東学院大学・研究ノート
64	1976	昭和	51	6	スペインおよび中南米諸国の企業会計-16-アルゼンチンにおける企業会計制度-3-	国際商事法務	4(6)	
65	1976	昭和	51	7	ブラジルにおける監査制度-1-	月刊監査役	82	
66	1976	昭和	51	8	ブラジルにおける監査制度-2-	月刊監査役	83	
67	1976	昭和	51	9	ブラジル所得税法における株式会社の会計規定	経済系	109	関東学院大学・研究ノート
68	1976	昭和	51	9	スペインおよび中南米諸国の企業会計-17-アルゼンチンにおける企業会計制度-4-	国際商事法務	4(9)	
69	1976	昭和	51	11	スペインおよび中南米諸国の企業会計-18-アルゼンチンにおける企業会計制度-5-	国際商事法務	4(11)	
70	1976	昭和	51	12	企業合同の会計処理に関する1つの見解	経済系	110	関東学院大学・研究ノート
71	1977	昭和	52	1	メキシコにおけるインフレ会計	産業経理	37(1)	
72	1977	昭和	52	3	メキシコの会計原則に関する研究--個定資産の会計原則-1-	経済系	111	関東学院大学・研究ノート
73	1977	昭和	52	4	ブラジル新株式会社の会計規定	国際商事法務	5(4)	
74	1977	昭和	52	6	メキシコの会計原則に関する研究--固定資産の会計原則-2-	経済系	112	関東学院大学
75	1977	昭和	52	7	ブラジル新株式会社法における企業結合の諸形態	国際商事法務	5(7)	
76	1977	昭和	52	8	インフレ会計考	税経通信	32(9)	
77	1978	昭和	53	2	メキシコにおける合併の会計制度	産業経理	38(2)	
78	1978	昭和	53	3	メキシコ会計原則の研究--無形固定資産・繰延資産の原則	経済系	115	関東学院大学・故加茂儀一教授追悼号
79	1978	昭和	53	3	英国における企業内容開示制度	関東学院大学経済研究所年報	1	
80	1978	昭和	53	4	ブラジル新株式会社法における監査制度	月刊監査役	104	
81	1978	昭和	53	6	アルゼンチンにおける合併の会計制度	経済系	116	関東学院大学
82	1978	昭和	53	9	メキシコの会計原則--資本原則	経済系	117	関東学院大学
83	1978	昭和	53	12	ブラジルの貨幣価値修正会計に関する研究	會計	114(6)	
84	1979	昭和	54	3	メキシコの会計原則--偶発事象および将来の債務	経済系	119	関東学院大学
85	1979	昭和	54	3	ブラジルにおける改正所得税法--株式会社法との関連において-1-	国際商事法務	7(3)	

学術論文

番号	西暦	和暦	年	月	タイトル	雑誌名等	巻号等	備考
86	1979	昭和	54	5	ブラジルにおける改正所得税法--株式会社法との関連において-2-	国際商事法務	7(5)	
87	1979	昭和	54	5	比較会計制度論について--「合併会計制度論」理解のために	産業経理	39(5)	
88	1979	昭和	54	5	ブラジル企業会計制度の研究--新株式会社法にもとづいて	経済学部30周年記念論文集		関東学院大学
89	1979	昭和	54	6	比較会計制度論考--国際会計論との対比において	経済系	120	関東学院大学・林要教授退職記念号
90	1979	昭和	54	12	日米における合併の会計処理について	経済系	122	関東学院大学
91	1980	昭和	55	3	Quo Vadis?--イギリスの企業内容開示制度	経済系	123	関東学院大学・加瀬正一教授退職記念号
92	1980	昭和	55	4	スペインにおける合併の会計制度	国際商事法務	8(4)	
93	1980	昭和	55	7	合併会計制度の比較研究--11カ国を対象として	企業会計	32(7)	企業結合・合併会計の問題点(特集)
94	1980	昭和	55	7	スペインの会計制度に関する一考察--プラン・ヘネラール・デ・コンタビリダーを中心として	経済系	124	関東学院大学・高島善哉教授退職記念号
95	1980	昭和	55	10	イギリスにおける会計制度-1-	経済系	125	関東学院大学
96	1980	昭和	55	11	イギリスにおける会計制度-2-	経済系	126	関東学院大学
97	1981	昭和	56	3	イギリスにおける会計制度-3-	経済系	127	関東学院大学・風間龍教授定年記念号
98	1981	昭和	56	3	A Comparative Study of Merger Accounting Systems in 11 Countries	Kanto Gakuin University Economic Review	3	
99	1981	昭和	56	3	ブラジル企業会計に関する覚書-1--会計帳簿とドゥプリカータ	月刊監査役	145	
100	1981	昭和	56	4	ブラジル企業会計に関する覚書-2-	月刊監査役	146	
101	1981	昭和	56	5	ブラジル企業会計に関する覚書-3-	月刊監査役	147	
102	1981	昭和	56	5	メキシコにおける商法・会社法の改正--会計規定を中心として	国際商事法務	9(5)	
103	1981	昭和	56	5	ブラジル企業会計に関する覚書-4-	月刊監査役	148	
104	1981	昭和	56	7	イギリスにおける会計制度-4-	経済系	128	関東学院大学
105	1981	昭和	56	7	ブラジル企業会計に関する覚書-5-	月刊監査役	150	
106	1981	昭和	56	8	ブラジル企業会計に関する覚書-6-	月刊監査役	151	
107	1981	昭和	56	9	ブラジル企業会計に関する覚書-7-	月刊監査役	152	
108	1981	昭和	56	10	ブラジル企業会計に関する覚書-8-	月刊監査役	153	
109	1981	昭和	56	10	シンガポールにおける会計制度	経済系	129	関東学院大学
110	1981	昭和	56	11	国際会計基準ん公開草案第22号「企業結合の会計処理(案)」について	旬刊経理情報	296	

学術論文

番号	西暦	和暦	年	月	タイトル	雑誌名等	巻号等	備考
111	1982	昭和	57	1	イギリスにおける合併の新判例とその後の法改正--Shearer対Bercain事件をめぐって	国際商事法務	10(1)	
112	1982	昭和	57	3	企業結合の会計処理に関する問題--取得日における親会社の会計処理について	経済系	131	関東学院大学
113	1981	昭和	56	11	中南米の会計制度	体系近代会計学X 国際会計基準	第6章	中島省吾責任編集、中央経済社
114	1982	昭和	57	6	会社分割の法制と会計--アルゼンチンの場合	国際商事法務	10(6)	
115	1982	昭和	57	7	英国1981年会社法の概要-1-	国際商事法務	10(7)	
116	1982	昭和	57	8	英国1981年会社法の概要-2-	国際商事法務	10(8)	
117	1982	昭和	57	9	英国1981年会社法の概要-3-	国際商事法務	10(9)	
118	1982	昭和	57	10	ラテンアメリカとイギリス-1-ラテンアメリカ会計発達史プロローグ	経済系	133	関東学院大学
119	1982	昭和	57	11	英国1981年会社法の概要-4-	国際商事法務	10(11)	
120	1982	昭和	57	12	英国1981年会社法の概要-5-	国際商事法務	10(12)	
121	1983	昭和	58	1	英国1981年会社法の概要-6-	国際商事法務	11(1)	
122	1983	昭和	58	2	英国1981年会社法の概要-7-	国際商事法務	11(2)	
123	1983	昭和	58	3	真実かつ公正な概観について--イギリスの会計思考に関する一考察	経済系	135	関東学院大学・赤堀邦雄教授定年記念号
124	1983	昭和	58	3	英国1981年会社法の概要-8-	国際商事法務	11(3)	
125	1983	昭和	58	4	英国1981年会社法の概要-9-	国際商事法務	11(4)	
126	1983	昭和	58	5	英国1981年会社法の概要-10-	国際商事法務	11(5)	
127	1983	昭和	58	6	英国1981年会社法の概要-11-	国際商事法務	11(6)	
128	1983	昭和	58	7	ラテンアメリカとイギリス-2-ラテンアメリカ会計発達史プロローグ	経済系	136	関東学院大学
129	1983	昭和	58	7	英国1981年会社法の概要-12完-	国際商事法務	11(7)	
130	1983	昭和	58	10	真実かつ公正な概観について-続-	経済系	137	関東学院大学・研究ノート
131	1983	昭和	58	10	イギリスにおける企業結合会計	国際商事法務	11(10)	
132	1984	昭和	59	2	イギリス企業結合会計再論--ドイツ人の視点	国際商事法務	12(2)	
133	1984	昭和	59	3	西独の会計制度に関する一考察--正規の簿記の諸原則を中心として	関東学院大学経済研究年報	7	
134	1984	昭和	59	5	企業評価と合併比率 (会社合併の法務と会計--大小会社区分立法審議に関連して)	企業会計	36(5)	
135	1984	昭和	59	7	英国1981年会社法における会計規定-上-	国際商事法務	12(7)	
136	1984	昭和	59	8	英国1981年会社法における会計規定-中-	国際商事法務	12(8)	

学術論文

番号	西暦	和暦	年	月	タイトル	雑誌名等	巻号等	備考
137	1984	昭和	59	9	英国1981年会社法における会計規定-下-	国際商事法務	12(9)	
138	1984	昭和	59	10	西独の会計制度に関する研究-1-	経済系	141	関東学院大学
139	1985	昭和	60	1	西独の会計制度に関する研究-2-	経済系	142	関東学院大学
140	1985	昭和	60	4	西独における会計立法の動向-1---1983年貸借対照表指令法政府草案	経済系	143	関東学院大学
141	1985	昭和	60	7	西独における会計立法の動向-2-	経済系	144	関東学院大学
142	1985	昭和	60	10	比較会計制度論とともに--わが研究の軌跡	會計	128(4)	
143	1985	昭和	60	10	英国1985年会社法--改正点をめぐって	国際商事法務	13(10)	
144	1985	昭和	60	10	イタリアにおける合併および合併会計制度に関する試論	産業経理	45(3)	
145	1986	昭和	61	1	イタリアにおける株式会社会計の研究	経済系	146	関東学院大学
146	1986	昭和	61	3	西ドイツにおける経済監査士法改正と弁護士	国際商事法務	14(3)	
147	1986	昭和	61	4	西ドイツにおけるEC第4次指令等の国内法化--1983年政府草案後の動向	経済系	147	関東学院大学
148	1986	昭和	61	7	忠実性の原則とイタリア	経済系	148	関東学院大学
149	1986	昭和	61	8	ブラジルにおけるコレソン・モネタリア制度の撤廃について	国際商事法務	14(8)	
150	1986	昭和	61	10	イギリスにおける企業結合の会計基準について	経済系	149	関東学院大学
151	1986	昭和	61	11	イタリアの監査制度-上-	月刊監査役	224	
152	1986	昭和	61	12	イタリアの監査制度-下-	月刊監査役	225	
153	1987	昭和	62	4	英米の会計制度の比較研究	経済系	151	関東学院大学
154	1987	昭和	62	10	アルゼンチン,ブラジルおよびメキシコの帳簿制度に関する比較考察	産業経理	47(3)	
155	1988	昭和	63	7	イタリアにおける合併会計制度の研究	経済系	156	関東学院大学
156	1988	昭和	63	9	イタリアにおける上場会社の会計および監査制度	国際商事法務	16(9)	
157	1988	昭和	63	10	イタリアにおける半期報告書制度	国際商事法務	16(10)	
158	1989	平成	元	2	イギリスにおける暖簾会計	国際商事法務	17(2)	
159	1989	平成	元	4	曲がり角に立つイギリスの会計基準--のれん会計を中心として	自然・人間・社会	10	
160	1989	平成	元	6	EEC第4次指令のイタリアにおける国内法化--国内法化のための法律案における会社の計算	国際商事法務	17(6)	
161	1989	平成	元	10	スペインにおける上場会社の財務諸表	国際商事法務	17(10)	
162	1990	平成	2	1	イギリスにおける会計基準の設定について	経済系	162	関東学院大学
163	1990	平成	2	2	スペインの商事法改正と会計および監査制度-1-	国際商事法務	18(2)	

学術論文

番号	西暦	和暦	年	月	タイトル	雑誌名等	巻号等	備考
164	1990	平成	2	3	スペインの商事法改正と会計および監査制度-2-	国際商事法務	18(3)	
165	1990	平成	2	4	スペインの商事法改正と会計および監査制度-3-	国際商事法務	18(4)	
166	1990	平成	2	4	イギリスにおける真実かつ公正な概観原則について	産業経理	50(1)	
167	1991	平成	3	7	スペインにおける監査制度--会計監査法の規定を中心として	経済系	168	関東学院大学
168	1992	平成	4	4	EC指令実施のためのイタリア法の改正--イタリア法における会社の計算-1-	国際商事法務	20(4)	
169	1992	平成	4	5	EC指令実施のためのイタリア法の改正--イタリア法における会社の計算-2-	国際商事法務	20(5)	
170	1992	平成	4	6	EC指令実施のためのイタリア法の改正--イタリア法における会社の計算-3-	国際商事法務	20(6)	
171	1992	平成	4	10	スペインの新プラン・ヘネラール・デ・コンタビリダー--スペインの会計制度に関する一研究	経済系	173	関東学院大学
172	1993	平成	5	7	カナダの会社会計制度-1-	国際商事法務	21(7)	
173	1993	平成	5	8	カナダの会社会計制度-2-	国際商事法務	21(8)	
174	1993	平成	5	9	カナダの会社会計制度-3-	国際商事法務	21(9)	
175	1994	平成	6	1	メキシコにおける会計・監査制度	経済系	178	関東学院大学
176	1994	平成	6	7	メキシコにおける監査制度--コーポレート・ガバナンスに関連して	月刊監査役	335	
177	1994	平成	6	8	アルゼンチンにおける会社会計制度の現状-1-	国際商事法務	22(8)	
178	1994	平成	6	9	アルゼンチンにおける会社会計制度の現状-2-	国際商事法務	22(9)	
179	1994	平成	6	10	アルゼンチンにおける会社会計制度の現状-3-	国際商事法務	22(10)	
180	1994	平成	6	11	アルゼンチンにおける会社会計制度の現状-4-	国際商事法務	22(11)	
181	1994	平成	6	12	スペインにおける監査制度とコーポレート・ガバナンス	月刊監査役	342	各国監査制度とその機能15
182	1995	平成	7	7	メキシコにおける会計発達小史	會計	148(1)	
183	1995	平成	7	7	会社分割と分割会計--メキシコの場合	産業経理	55(2)	
184	1996	平成	8	12	ポルトガルの企業会計制度に関する一考察-上-	国際商事法務	24(12)	
185	1997	平成	9	1	ポルトガルの企業会計制度に関する一考察-中-	国際商事法務	25(1)	
186	1997	平成	9	2	ポルトガルの企業会計制度に関する一考察-下-	国際商事法務	25(2)	
187	1997	平成	9	7	カナダの会計制度に関する一考察	経済系	192	関東学院大学
188	1998	平成	10	2	カナダにおける会社合併および合併の会計制度-上-	国際商事法務	26(2)	

学術論文

番号	西暦	和暦	年	月	タイトル	雑誌名等	巻号等	備考
189	1998	平成	10	3	カナダにおける会社合併および合併の会計制度-下-	国際商事法務	26(3)	
190	1998	平成	10	9	ブラジルの会計制度--法改正・会計基準を中心として-上-	国際商事法務	26(9)	
191	1998	平成	10	10	ブラジルの会計制度--法改正・会計基準を中心として-下-	国際商事法務	26(10)	
192	1999	平成	11	9	国際会計研究と比較会計制度論	現代会計の国際的動向と展望	第Ⅴ部第2章	津守常弘教授還暦・退官記念著作編集委員会編、九州大学出版会
193	2000	平成	12	3	イタリアにおける新監査制度--有資格者による財務諸表の法定監査-上-	国際商事法務	28(3)	
194	2000	平成	12	4	イタリアにおける新監査制度--有資格者による財務諸表の法定監査-下-	国際商事法務	28(4)	
195	2001	平成	13	3	カナダ・ケベック州の会社および会社会計制度--ケベック会社法に基づいて	国際商事法務	29(3)	
196	2003	平成	15	11	フランスにおけるコーポレート・ガバナンスに関する一考察--金融保護法を中心として	国際商事法務	31(11)	
197	2004	平成	16	6	ドイツにおけるコーポレート・ガバナンスに関する一考察--ドイツ企業統治規範を中心として-上-	国際商事法務	32(6)	
198	2004	平成	16	7	ドイツにおけるコーポレート・ガバナンスに関する一考察--ドイツ企業統治規範を中心として-下-	国際商事法務	32(7)	

その他

番号	西暦	和暦	年	月	タイトル	雑誌名	巻号	備考
1	1978	昭和	53	3	ラ米紀行--ラ米の会計事情を尋ねて-1-	會計	113(3)	
2	1978	昭和	53	4	ラ米紀行--ラ米の会計事情を尋ねて-2-	會計	113(4)	
3	1978	昭和	53	5	ラ米紀行--ラ米の会計事情を尋ねて-3-	會計	113(5)	
4	1978	昭和	53	6	ラ米紀行--ラ米の会計事情を尋ねて-4-	會計	113(6)	
5	1978	昭和	53	7	ラ米紀行--ラ米の会計事情を尋ねて-5-	會計	114(1)	
6	1978	昭和	53	8	ラ米紀行--ラ米の会計事情を尋ねて-6-	會計	114(2)	
7	2005	平成	17	11	どんぐり:私の童話集			退職を記念して自費出版した童話集

（3）インタビュー調査結果

中川美佐子先生に関して、中川先生ご自身とご親交のあった津守常弘先生にインタビュー調査を行った。中川先生は平成 27（2015）年 10 月 26 日に成城のアルプスにおいてインタビュー調査を実施し、さらに平成 28（2016）年 8 月 7 日に同所において、原稿確認を兼ねて再度インタビュー調査を実施した。インタビュイーは、井原理代、澤登千恵、津村怜花の 3 名である。また、津守先生には、平成 28（2016）年 6 月 10 日に、ご勤務先である九州情報大学（大宰府キャンパス）においてインタビュー調査を実施した。インタビュイーは井原理代、津村怜花の 2 名である。

これらのインタビュー調査の結果を、前述のとおり、①研究継続に対する原動力、②女性研究者としての苦労や職場での様子、③家庭と職場（関東学院大学）との両立への工夫や家庭での様子という 3 項目に整理してまとめると、以下のとおりとなる。

① 研究継続に対する原動力

[中川先生インタビュー]

――一橋大学商学部へ進学された経緯を教えてください。

（大学進学前のことになりますが、）私が学校生活で一番楽しかったのは、まだ制度ががんじがらめになっていなかった中学・高校時代です。中学のホームルームにはクラス担任の先生も出席されていましたが、生徒が中心で伝達事項を報告したり自由に話し合ったりしていました。高校では、科目の選択上、一度に数学を 2 つも取り、芸術や家庭科を取らないようなこと（そんなことをしたのは私 1 人でしたが）もできたのです。

一橋大学を選んだのは環境が良く、競争倍率が高かったからです。進学適正審査の時は、経済学部が第一志望でしたが、実学を嫌う私の性格を危惧した家族が、商学部でなければ学費を出さないといい、商学部の倍率がたまたま経済学部と同じく高かったことから妥協して、第一志望を商学部に変更したのです。入学後は他学部の科目も自由に選択できましたし、事実、学部時代は、他学部の科目と選択する方が多かったかも知れません。

（大学で師事したのは）飯野利夫先生。当時はすごく理路整然とした良い論文を書かれていたので、飯野先生のゼミに、って思ったのです。

――研究者になろうと思われたきっかけがあれば、教えてください。

当時の社会は学歴社会といわれていたように、男性の場合には、良い大学を出て保証人さえいれば良い会社に就職できたのです。ところが女性の場合には職場の花として扱われ

ていた時代ですから、定年が 20 代に設定され、会社は、通常、高卒か短大卒を採用していたのです。私の頃は、4 年制枠の女性を試しに使ってみようという時期も終わっておりましたから、大学宛の募集要項には「女子お断り」と書いてありました。書いてない会社に問い合わせてもらうと、女子学生がいるとは思わなかった、という返事がかえってきた時代です。

（このような中、先輩に紹介されて入社した）社内は家庭的な暖かい雰囲気でしたが、当時の鉱山会社では、母体保護のためとかで女性がトロッコに乗って坑内に入ることはできず、正社員としては扱われませんでした。それでも世間知らずの私にはいい社会見学の会社になったと思います。

――その後、進学された一橋大学大学院商学研究科での大学院生活についてお聞かせください。

博士課程の時、学園紛争の最中に海外から帰国したのですが、飯野教授はすでに辞表を提出されていました。「同じ人間が同じ大学に永く務めることは良くない」との理由からで（私に対する説明は）、他には何の説明もありませんでした。学内にはいろいろな情報がとびかい、理解できないまま、指導教官を変更せざるを得ませんでした。そこで、幅広いテーマに興味を持たれ、人間性豊かな番場嘉一郎教授にご指導を仰ぐことにしたのです。

――中川先生は比較会計制度をご専門として研究されていますが、このテーマを選ばれ、研究を継続された理由を教えていただけますか。

当時はグローバルな統一基準などなく、会計も監査も国によって全く異なっておりました。このことが国内では全く認識されず、監査役の制度はどの国にもあり、会計原則もどの国にもあると考えられていたのです。「企業会計原則」は米国の会計原則の影響を受けていますが、米国には監査役の制度はありません。日本が新しい問題に直面するたびに、外国の制度に関心が集まったことも事実です。

社会科学に関しては後発国であった日本は、古くはヨーロッパ大陸諸国の制度を、ついで英米諸国の制度を継受してきました。この点ではラテン・アメリカ諸国も似たような状況でした。そこで、ヨーロッパ大陸や英米、ラテン・アメリカの会計・監査制度を比較研究の対象にしようと思い立ったのです。その方法論として提唱したのが比較会計制度論です。当時の日本でも、必要に応じて、アメリカの文献等を翻訳して各国の制度を紹介したりしていましたが、このような、他の制度との関係を無視した断片的な紹介には満足しなかったのです。

――当時、海外へ渡航することは大変だったのではありませんか？

60 年代は固定相場制を採っており、持ち出す金額も制限されていました。ラテン・アメリカではオスタル（hostal）や家具付アパートに住んで滞在費を節約し、ヨーロッパでは空港に着いてからホテルを予約することもありました。

――渡航先での資料収集は大変だったのではありませんか？

資料は、原典主義にこだわっていたため、日本にいて入手できないものは直接現地に赴いて集めました。特殊分野の用語は辞書には載っておらず、資料の解読には苦労しましたが、語学が好きでしたから、苦にはなりませんでした。研究所や取引所、関係団体等でも情報を収集しました。それで必要な資料の目星をつけて、資料を収集するため書店を回りましたが、資料を置いている書店を探すのは大変でした。

――先生のご研究への原動力は何だったのでしょうか。

当時、大学院ではドイツ学説の研究が主流でしたが、私は米国のリトルトンやペイトンを取り上げました。ドイツ語は第 2 語学として選択した、抒情的で好きな言語だったのですが、会計に関するかぎり、米国の時代が到来する考えていたからです。学説研究は、研究生活の入り口においては、きわめて重要だと思います。ただ私は学説の再構築にはあまり興味がなく、それ位なら理論を自分で構築すればいいと考えておりました。当時、外国の制度の研究といえば、平面的な紹介に終始していて、研究といえるほどのものはありませんでした。そこで、好きな語学を活かして原典をひもとき体系化することにより、新しい理論を構築しようと試みたのです。結果的にこのような研究が役に立ったといわれれば望外の仕合せです。

[津守先生インタビュー]

――中川先生の比較会計制度論というご研究は、各国の会計制度の比較研究の方法論を構築し、その枠組み・視点から研究をすすめられたと解釈してよろしいでしょうか？また、ご研究の背景をどのように理解したらよいでしょうか？

歴史的な背景があったのではないかと思っています。まず、中川先生が研究活動を始められた 1960 年代はアメリカの第三次合同運動があった時期ですよね。中川先生は合併会計

に非常に関心をお持ちになったのではないかなと私は考えております。もう 1 つの背景として、ご主人が成城大学におられた中川和彦先生で商事法関係の権威ですよね。この時代にはすでに第一線で活躍なさっていました。お二人で辞典を発行されていますよね。二人三脚と言って良いのか分かりませんが、お二人は非常に呼吸の合ったご研究をなさっていました。それで、英米、仏、独にくわえて、さらにイベリア半島、ラテン・アメリカなどを選ばれたのではないか、と私は解釈しています。

――国際会計基準の制定および各国への導入と、中川先生のご研究とはどういうふうに関係づけられますか？

私なりの理解ですけれど、私が日本会計研究学会で記念講演をさせていただいたときにも研究方法一般に関連する問題として触れたのですが、いわゆる会計の国際化、グローバリゼーションということをよく言いますけれど、グローバルの意味が、私達日本人の考えるものと、例えばイギリスやアメリカの人達が考えるものとは違うように私は思います。イギリスやアメリカの人達はかれらが考えている制度を地球の隅々にまでいきわたらせる、という意味でグローバリゼーションと言っているように思うのです。その場合の国際化というのは、できる限り皆が統一的にと言う方向に行きますよね。それが必ずしもうまくいっているわけではありませんが。それに対して、中川先生の場合は、そういう目で比較論をやっているわけではないような気がするのですね。多様性というものを考えたうえで比較論をやっておられるわけで、我々にとってもありがたいことじゃないかなと思います。

――各国の会計制度の違いを明確に把握することと、会計基準の統一化の関係をどのように考えたらよいでしょうか。難しいと思ってよいのでしょうか。

難しいと思っていらっしゃるでしょうね。そうじゃないかなぁ。中川先生が『会社会計制度の比較研究―12 ヶ国を対象として』（1988 年 2 月）でまとめられた類型[129]は、（私の）還暦・退官記念著作（『現代会計の国際的動向と展望』）の第Ⅴ部第 2 章の先生のご論稿にもこれとほぼ同じ図が出てくるのです。両者は全体としてあまり大きくは変わらないのですが、その間にソ連の崩壊やベルリンの壁の崩壊があったり、特にドイツの場合は非常に大きく変わった。一番下に西ドイツと書かれていますが、新しい図ではドイツ型というのがあって、それほど変わっていないという評価だろうと。しかしイベロアメリカといって

[129] 会計制度について、中川先生は民間部門主導型株主志向のイギリス型（イギリス、オーストラリア、カナダ）とアメリカ型（アメリカ、カナダ、メキシコ）、政府主導型債権者保護のフランス型（アルゼンチン、ブラジル、フランス、スペインインタリア）とドイツ型（ドイツ、イタリア、日本）に区分している（中川[2000] 224 頁）。

も宗主国が違うところがありますから、宗主国の影響、特に証取法の影響が非常に強いですからね、また商法の関係もありますから、簡単に同じようになることはありえないのだと思います。その結果、このような分類になっているのだと思います。中川先生の上掲の著書の第 1 章第 2 節のところに、比較会計制度論と国際会計論の異同について説明なさっていますが、おそらく、中川先生が考えられたのは、国際会計論というよりも比較会計制度論と言うスタンスではないかと思っています。厳密な意味で国際会計論としては展開されるという立場ではなかったと（認識しています）。

――中川先生に津守先生の還暦・退官記念著作に執筆していただいた経緯を教えていただけますか？

大変失礼なことですが、私、あまりよく覚えていないのです。原稿をいただいたのはおそらく 1998 年の段階だったと思うのですが、私はあまり中川先生と直接お話する機会がなかったのですよ。ですが、当時、私の住居と中川先生のお宅とは近かったのです。私は桜上水 1 丁目にいたのですが、そこから西のほうに行くと、環状 8 号線を超えたところが（中川先生がお住まいの）千歳台で。おそらくご主人が成城（大学にご勤務）だから住まれていたのでしょう。近いからと言って訪ねて行ったわけではないのですが、気持ちの上では非常に親しみがありました。還暦・退官記念著作の編集委員は私の京都大学の後輩だった西田くんと、今京都大学に行っている徳賀くんなんですよね。彼らに僕が頼んでくれんかとお願いしたのかもしれませんね。テーマがテーマでしたからね。

――今のような国際化、調和化が進んでいくと、比較会計制度論を展開するのは難しくなってくるのでしょうか？

必ずしも僕はそうではないような気がします。国際化は、できるだけ同じ方向にいくことが望ましいと思いながらやはりそうはいかない。だからそういう意味ではまさにエンドースメントであって、それぞれの国が国際化の枠組みについて理解を示し、できる限りそれに近づいていく努力をする部分としない部分がある。その典型は中国なんかそう思うのですが、いち早くエンドースメントを受け入れて、いっこうにそうではないですね。そういう動きが許されるようになってきている。近年の国際基準のフレームワークの議論を見ていますと、従来の発想が途切れたのではないかという気さえしますよね。

――現時点に立って、中川先生のご研究をどのように意義づけ、あるいは位置づけられる

のでしょうか？国際会計との関係で考えられるのでしょうか？

そうですね。受け止め方は、日本の今の議論は、国際基準とできる限り同じ方向へ近づけないところがあると分かっていながら近づくということを前提に研究が行われていると思うのです。中川先生の場合はそうはなり得ないのではないでしょうか。出発点が違いますから。中川先生も書かれていますけれど、カナダの場合は、法制度的にはかなりイギリスの影響を受けていますが、カナダで活躍されている方はアメリカ人。だから実務はアメリカ寄りになる。やっぱりその 2 つが影響しておりまして、合併会計の問題にしましても、持分プーリング方式についてカナダは認める。イギリスは本来認めないのですよね。今はもう、これは否定の方向にいっていますが、70 年代というのはどっちでも良かった。買収しているにもかからず持分プーリング法で処理することもあり、持分プーリングしているのに買収法で処理することもあった。それによって利益が過大に計上される、のれんが計上されませんから、そこで問題になる。イギリスの場合は、非常に柔軟な考え方がありますが、会計制度自体は会社法の影響が強いですから、こう（クロス）した処理方法はできない。そういう意味では中川先生の研究は非常に意味があって、繰り返し同じような研究の組み直しをやっているので、一見したところまた同じようなことを言っているなと見えるかも知れませんが、その時点時点で勿論意味があると私は肯定的に評価しています。

② 女性研究者としての苦労や職場での様子

[中川先生インタビュー]

――まずは ICU、その後、関東学院大学と着実にキャリアを積まれていらっしゃいますが、ご着任の経緯をお話いただけますか？

ICU に行ったのは、私がキャリアを積むことが必要と考えられた久武雅夫[130]先生のご尽力によるものです。価値観の研究チームの一員として、Troyer[131]先生を中心としたディスカッションに参加させていただきました。関東学院大学に就職したのは、新しく学部をつくるときに必要な人材ということで声をかけていただいたからです。財務諸表論の担当者としてでした。会計研究学会へは片野先生と番場先生の推薦で入会しました。

[130] 久武雅夫（1903-2003）先生のご専門は国際政治学。1965（昭和 40）年に同大学を定年退官され、名誉教授のの称号を受けられた。

[131] Maurice E. Troyer（？-1997）教授のご専門は教育心理学。ICU の学務副学長を務められた。同大学に 17 年間勤務され、1966（昭和 41）年 3 月の退職とともに同大学の名誉人文学博士の称号を受けられている。

――職場での環境などを教えてください。

（学園紛争の頃思い出として､）1 時間目の講義に 15 分ほど遅れて教室に入っていったとき、大教室には 2 人だけが待っていて、ゼミ形式で行った。その時の講義の様子を、社会人となった彼らの 1 人が大学の同窓会（燦葉会）雑誌に、懐かしい思い出として書いています。

――先生は社会貢献活動など、参議院の法務委員会「土地の再評価」に招聘されていたこともおありのようですが、学外でのお仕事をお引受けされる経緯など教えていただけますか。

参議院法務委員会に参考人として出席したのは当時、早稲田大学の総長を務めておられた奥島（孝康）[132]先生のご推挙によるもの時いております。地域委員の方は、たまたまある委員会の会長をされていた方に推されて委員になったら、あとは芋づる式にお願いされたということです。

③　家庭と職場との両立への工夫や家庭での様子

[中川先生インタビュー]

――ご主人とのご関係をうかがってもよろしいでしょうか。

夫と知り合ったのは、大学（一橋大学）の大学院雑誌を編集する仲間としてです。夫は法学研究科に所属し、話好きでしたが、私はどちらかというと無口な方なので、相互補完関係にあると考えたのです。夫は法律を中心にラテン・アメリカの研究をしていましたが、夫は夫で自分の世界を持っていました。家庭生活は 2 人とも本に囲まれて、学生時代の延長のようなものでした。

――先生はたくさんの論文をお書きになっていらっしゃいますが、どのように家庭と職場との両立をはかられていたのですか？

[132] 奥島孝康（1939-　）先生は、早稲田大学名誉教授。早稲田大学法学部長・総長時代には学内改革を実施し、大学院研究科等を新設された。現在、白鴎大学学長を務められている。

（当時から）論文は手書きです。（関東学院）大学までは乗り換えが多く、片道 2 時間半かかります。その上、担当科目が多かったこともあっていろいろな研究会のお誘いを断らざるをえなかったことはかえすがえすも残念です。電車やバスの中では眠っていることが多かったと思います。

家庭において夫は、家事はあまりしませんでした。現役時代は、買い物なども私の担当でした。

[津守先生インタビュー]

――中川先生のお人柄やプライベートな側面をご存知でしたら、お教えいただけませんか。

（スタディ・グループで一緒でしたが）でしゃばってものを言ってこられる方ではなく、いつも静かに座っておられる。非常に端正な人ですよね。身なりがとてもおしゃれな方で、研究会の時にも帽子をかぶって正装していらしてね。

仕事ばっかりやっておられましたからね。よくこんなに書かれるものだと感心していました。しかし、中川先生に贈っていただいた随筆集を拝読して、改めて中川先生には文学的な才能がおありだと思いました。研究の合間のつれづれに書かれたのでしょうか、単なる随筆ではなく、文学的な小品を含む随筆集だったのです。読んで感銘を受けました。中川先生の印象が変わりました。（いただいたのは）2000 年になってからだったかな。記憶に間違いないと思うのですけれどね。すごく才能があるなと思って。

（4）小括

以上、歴史研究として対象とした中川先生の足跡と業績について考察してきたが、その結果、①研究者になられた、また専門分野・研究テーマ専攻のきっかけ、②研究継続の原動力と研究業績、③学内行政、ならびに社会貢献活動、④研究教育（仕事）と家庭の両立という形でまとめると、次のようにいえると考える。

① 中川先生の研究者となられたきっかけは、学部卒業後、就職された民間企業での仕事の限界を見極め、大学院へ進学されたという経緯から、ご自身の強い意思によるところが大きく、また、大学院進学後の研究環境から、ご自身の心の葛藤と判断で新しい比較会計制度論に取り組むようになったと伺う。

その意味で、比較会計制度論研究者、中川先生の道筋はご自身の闘いの跡である。

② そうして取り組み始められた比較会計制度論を一貫して構築、提唱され、原典主義と「up-to-date」な資料に基づく膨大なご労作の成果を出しておられる。

その研究継続と業績の原動力としては、なによりも比較会計制度論という新しい分野の開拓という強い意思があり、くわえてラ米法研究の権威であられるご夫君の和彦

先生との刺激ある関係も窺える。

③　学内行政については、各種役割を務められた後、おそらく当時、女性として珍しい、経営学科長も務められている。また、学外では、行政等における女性委員の要請に応えて、各種の委員を務められている。

④　ご家庭は、大学院時代の雑誌編集を一緒に担った和彦先生とともに築かれ、わが国では少ないラ米関係研究を中心に相互に理解し合えるものであった。中川先生の家庭生活は、学生時代の延長のようで、「夫は、家事はあまりしませんでした」と楽しそうな語り口でご自身が工夫しながら一手に引き受けたと話された。その越しかたの語りには、やはり仕事と家庭との充実した両立が強く感じられたところである。

６　総括

以上、歴史研究として、日本会計研究学会の初期に入会され、女性研究者として開拓の道を歩まれた、能勢先生、眞野先生、山浦先生および中川先生について、その足跡と業績を辿り考察してきた。

この 4 人の先生方は、いずれも大いなる研究業績をあげられている。能勢先生は、わが国における社会会計研究を構築された第一人者として、眞野先生は、ペイトン学説研究一筋に成果を挙げられた研究者として、山浦先生は、ジャン・フーラスティエ思考に基づく独自のフランス会計学研究を結実させた研究者として、さらに中川先生は自らの比較会計制度論を構築、提唱された研究者として、それぞれ日本会計研究学会に多大なる貢献と貴重な足跡を残されている。

このような業績と足跡を前にして、思うことが 2 点ある。

その 1 つは、研究者になられた、また専門分野・研究テーマ専攻のきっかけは、異なっても、いったん取り組み始めた専門分野・研究テーマには、生涯揺ゆるぎなく、一貫して心血を注ぎ継続していることである。

研究に対するその揺るぎなさと継続性の大切さを、何よりも教えられたところである。

いま 1 つは、そのような研究継続と業績、また時に学内行政のために、それぞれにご夫君、ないしご家庭が大切な力になっていると窺えることである。あえて言えば、能勢先生は互いに理解し支え合える研究者仲間と、眞野先生は敬愛し、その志を受け止めた恩師と、山浦先生は学内行政の奮闘を理解し支える同僚と、そして中川先生は学生時代からの関係のままに先輩と、それぞれパートナーになっておられる。そこには、それぞれに異なる形の、ある意味で魅力的な研究教育（仕事）と家庭との両立がみられる。

そしてこのことは、研究生活のためにふさわしい環境づくりは、こうした家庭との両立の形に止まらず、それぞれにもっと多様でありうることを示唆していると思われる。

このように思うと、4 人の先駆の先生方は、大いなる苦難も苦闘もあったと察せられるが、それぞれにパワフルに乗り越えられ、時に健気に、また、楽しげに人生を送られている。その人生の見事さが胸に迫る。

いま、われわれは、先駆の先生方が精一杯に、あらん限りの力を持って歩まれた足跡と業績を深く心に刻み、しっかり引き継いで研鑽を誓うところである。

【参考文献】

＜著書・論文・その他＞

合崎堅二・能勢信子［1971］『企業会計と社会会計』森山書店。

新井清光［1989］「番場先生を偲ぶ」『企業会計』41（8）：88。

新井益太郎［2007］「飯野利夫先生のご逝去を悼む」『産業経理』67（3）：72-73 頁。

安藤英義［2007］「飯野利夫先生を偲んで」『産業経理』67（3）：74-75 頁。

伊賀隆［1988］「松田和久先生：人と学問」『國民經濟雑誌』158（4）：121-139 頁。

池上和夫［2001］「津守常弘先生定年退職記念号に寄せて」『商経論叢』32（4）：ⅰ-ⅱ頁。

石垣健一［1980］「矢尾次郎先生：人と学問」『國民經濟雑誌』142（4）：133-150 頁。

石川弘道［2006］「山浦瑛子教授定年退職記念号に寄せて」『高崎経済大学論集』48（4）：ⅴ-ⅵ頁。

石川弘道［2014］「山本喜則教授退職記念号に寄せて」『高崎経済大学論集』56（4）：ⅰ-ⅱ頁。

一瀬智司［1975］「久武雅夫先生の古稀を記念して」『国際基督教大学学報Ⅱ-B　社会科学ジャーナル』13：3 頁。

上村久雄他［1999］「会計学ランダム・ウォーク―上村久雄教授にきく」『研究年報経済学』55（3）：493-520 頁。

内田昌利［2014］「最終講義によせて」『北海学園大学経営論集』11（4）：275-284 頁。

大堺利實［1999］「回顧と展望」『経営経理研究』62：3-8 頁。

大沼邦弘［2003］「献呈の辞」『成城法学』70：1 頁。

大沼盛男［1985］「追悼のことば」『北海学園大学経済論集』33（3）。

興津裕康・原田満範・中野常男・内藤文雄［1992］「＜インタビュー＞会計学とともに 35 年：武田隆二先生の人と学問」『國民經濟雑誌』166（5）：111-138 頁。

興津裕康［2009］「武田隆二先生のご逝去を悼む」『企業会計』61（7）：161-162 頁。

桂昭政［2000］「能勢信子著『非市場活動の國民経済計算―教育・福祉・環境の収支バランス』（同文舘、1999 年）」『統計学』78：58-62 頁。

唐澤達之［2014］「山本喜則教授退職記念号に寄せて」『高崎経済大学論集』56（4）：ⅲ-ⅳ頁。

川喜田二郎［1966］「二十一世紀人類の課題　フーラスティエ　四万時間」『展望』87：137-139 頁。

川口順一［2007］「回想の飯野利夫先生」『産業経理』67（3）：73-74 頁。
木下重教［1997］「故眞野脩先生を悼む」『北海道情報大学学内報　ななかまど』6：2-3 頁。
黒澤清［1989］「番場嘉一郎先生を偲んで」『企業会計』41（8）：86-87 頁。
久野光朗［1985］「C. E. Sprague の勘定学説―アメリカ簿記論の完成―」『北海学園大学経済論集』33（3）：1-16 頁。
久野光朗［1997］「大学院研究科長への就任にあたって」『北海道情報大学学内報　ななかまど』6：4 頁。
ゲアハード・ステューヴェル著・能勢信子訳［1967］『社会会計の構造』同文舘出版。
ゲアハード・ステューヴェル著・能勢信子訳［1987］『国民経済計算』同文舘出版。
ゲアハード・ステューヴェル著・能勢信子・小西康生訳［1991］『経済指数の理論：指数問題とその解』同文舘出版。
神戸大学会計学研究室編［1964］『所得会計論』中央経済社。
神戸大学経済経営研究所編［1990］『能勢信子教授退官記念論文集』神戸大学経済研究所。
神戸大学百年史編集委員会編［2005］『神戸大学部局史』神戸大学。
古賀智敏・河﨑照行［2009］「武田隆二先生を偲んで―ご功績とお人柄」『企業会計』61（7）：164-165 頁。
木暮至［2006］「山浦瑛子先生定年退職にあたって」『高崎経済大学論集』48（4）：iii-iv 頁。
小関藤一郎［1975］「J.フーラスティエ著『余暇―何をするためか』」『日本労働協会雑誌』17（1）：60-64 頁。
後藤純一［2007］「献辞」『経済経営研究年報』57。
小西康生［1990］「能勢信子先生：人と学問」『國民經濟雑誌』162（5）：85-102 頁。
小室豊允［1999］「研究と教育を両立させた偉大な二人の学者：能勢信子先生、中村一雄先生のこと」『経済情報学論集』13：1-2 頁。
斉藤静樹［2009］「武田隆二先生を悼む」『企業会計』61（7）：160-161 頁。
酒井正三郎［1962］「能勢信子著「社会会計論」」『國民經濟雑誌』106（3）：99-106 頁。
酒井正三郎［1964］「私の学問遍歴とその道標」『經濟科學』11（4）：1-28 頁。
佐藤明［1971］「新庄博先生記念論文集の発刊に際して」『商学論究』18（1）：i 頁。
佐藤治［2012］「酒井正兵衛（正三郎）先生を偲ぶ」名古屋大学望洋会（東京望洋会）http://members3.jcom.home.ne.jp/akt51naka44/bouyou/tenki/tenki-sato121226.html 2015 年 8 月 3 日アクセス。
篠原三代平［2007］「飯野利夫君を偲ぶ」『産業経理』67（3）：71-72 頁。
嶋和重［2004］「大堺利實先生を偲ぶ」『経営経理研究』73：145-147 頁。
清水昌三［1980］「巻頭言」『千葉商大論叢』18（2）。
下村和雄［1995］「山本泰督先生：人と学問」『國民經濟雑誌』171（1）：111-128 頁。
新庄博［1963］「序」能勢信子・小玉佐智子『家族経済学』有斐閣：1-5 頁。
税務経理協会編［1999］『インタビュー　国際会計基準』税務経理協会。

田中章義代表編集［1990］『インタビュー　日本における会計学研究の発展』同文舘。
田中昭五［1981］「小野武四郎博士記念号刊行によせて」『経濟學論究』35（2）。
谷端長・武田隆二［1970］「山下先生：人と学問」『國民經濟雑誌』122（4）：103-118 頁。
田村弘候［2013］「ガンバル OB・OG をクローズアップ　卒業生奮闘記」『豊平會報』67：12 頁。
田谷博吉［1980］「追悼の辞」『阪南論集　社会科学編』15（2・3）。
辻川尚起［2006］「1998 年土地再評価法の設定過程分析」『香川大学經濟論叢』78（2）：207-228 頁。
都留春夫［1967］「Troyer 先生の横顔」『国際基督教大学学報Ⅰ-A　教育研究』12：207-209 頁。
富岡幸雄［2009］「優大華麗な武田会計学の顕著な功績を称賛し、御逝去を悼む」『企業会計』61（7）：162-164 頁。
中川和彦・中川美佐子監訳［1976］『5 か国語対照ビジネス用語大辞典（ポ英仏独→日）』たまいらぼ。
中川和彦・中川美佐子監訳［1991］『ポ和（英仏独日 5 か国語）ビジネス語辞典』たまいらぼ。
中川美佐子［1973］『合併会計―主要 6 ヵ国の比較制度論的研究―』千倉書房。
中川美佐子［1976］『ブラジル企業会計制度論』たまいらぼ。
中川美佐子［1978a］「ラ米紀行（その 1）―ラ米の会計事情を尋ねて―」『會計』113（3）：157-162 頁。
中川美佐子［1978b］「ラ米紀行（その 2）―ラ米の会計事情を尋ねて―」『會計』113（4）：158-163 頁。
中川美佐子［1978c］「ラ米紀行（その 3）―ラ米の会計事情を尋ねて―」『會計』113（5）：144-149 頁。
中川美佐子［1978d］「ラ米紀行（その 4）―ラ米の会計事情を尋ねて―」『會計』113（6）：167-172 頁。
中川美佐子［1978e］「ラ米紀行（その 5）―ラ米の会計事情を尋ねて―」『會計』114（1）：158-163 頁。
中川美佐子［1978f］「ラ米紀行（その 6）―ラ米の会計事情を尋ねて―」『會計』114（2）：158-1623 頁。
中川美佐子［1978g］『合併会計制度論』千倉書房。
中川美佐子［1980a］『新ブラジル企業会計制度の研究』たまいらぼ。
中川美佐子［1980b］「合併会計制度の比較研究―11 ヵ国を対象として―」『企業会計』32（7）：35-42 頁。
中川美佐子［1982］『イギリスの会計制度―比較制度論的研究―』千倉書房。
中川美佐子［1983］「会社合併・分割の国際比較」荒川邦寿編著『会社合併・分割の会計』

第 8 章。
中川美佐子［1985］『西ドイツ会計制度論―イギリスとの対比において―』千倉書房。
中川美佐子［1988］『会社会計制度の比較研究―12 カ国を対象として』千倉書房。
中川美佐子［1991］『EC5 ヵ国の会計および監査制度』千倉書房。
中川美佐子［1994］『スペイン・イタリアの会計制度』千倉書房。
中川美佐子［1996］『イベロアメリカの会計制度―メキシコ・アルゼンチン―』千倉書房
中川美佐子［2000］『会社合併の源流および米・加・日の合併会計』千倉書房。
中川美佐子［2003］『複眼的資産評価論』千倉書房。
中川美佐子［2005］『どんぐり―私の童話集―』（自費出版）。
中島省吾［1989］「番場嘉一郎先生をしのんで」『企業会計』41（8）：87。
中谷武［1990］「置塩信雄教授の経済学」『國民經濟雜誌』162（3）：115-135 頁。
中野常男編著［2007］『複式簿記の構造と機能　過去・現在・未来』同文舘出版。
中村忠［1989］「番場先生のことども」『企業会計』41（8）：89。
西川清治［1962］「能勢信子著「社会会計論」」『経済学雑誌』46（5）：56-62 頁。
日本会計研究学会［1973-1985］『日本会計研究学会会報』（昭和 47 年度-59 年度）日本会計研究学会。
日本会計研究学会スタディ・グループ［2006］「複式簿記システムの構造と機能に関する研究」。
日本学術会議学術体制常置委員［2005］「学術体制常置委員会報告　女性研究者育成の観点から見た大学院教育の問題点」。
日本簿記学会簿記理論研究部会［2012］「現代簿記論に関する研究（最終報告）」。
根井雅弘［1988］「新・評伝シリーズ①　正統から異端へ―ジョン・ヒックスの生涯」『経済評論』37（5）：65-83 頁。
能勢哲也［1999a］「はしがき」能勢信子『企業会計の経済学』アロエ印刷：ⅰ-ⅳ頁。
能勢哲也［1999b］「はしがき」能勢信子『社会会計の構造と発展』六甲出版：ⅰ-ⅳ頁。
能勢哲也［1999c］「はしがき」能勢信子『非市場活動の國民経済計算：教育・福祉・環境の収支バランス』同文舘出版：ⅰ-ⅳ頁。
能勢哲也［1999d］「はしがき」能勢信子『日本経済の社会会計分析』有斐閣学術センター：ⅰ-ⅳ頁。
能勢哲也［2000］『夏の日の翔び去る如く―信子のアルバム』近代文芸社。
能勢哲也［2007］『オックスフォードカレッジライフ』近代文芸社。
能勢信子［1961］『社会会計論』白桃書房。
能勢信子・小玉佐智子［1963］『家族経済学』有斐閣。
能勢信子・武田隆二［1967］「渡辺先生：人と学問」『國民經濟雜誌』116（4）：84-111 頁。
能勢信子［1967］「渡辺進博士略歴・著作目録」『國民經濟雜誌』116（4）：112-120 頁。
能勢信子［1974］「学問と人　ヒックス教授のプロフィール」『産業経理』34（12）：8-13

頁。
能勢信子・小玉佐智子［1981］『家族経済学　女性の英知を養う』有斐閣。
能勢信子［1990］「学園の窓　六甲台を去るに当たって」『凌霜』306：7-9 頁。
能勢信子編著［1990］『経済会計の発展―会計思考の新展開―』同文舘。
能勢信子編著［1991］『国際比較研究モノグラフ』神戸大学経済経営研究所。
能勢信子［1999a］『企業会計の経済学』アロエ印刷。
能勢信子［1999b］『社会会計の構造と発展』六甲出版。
能勢信子［1999c］『非市場活動の國民経済計算：教育・福祉・環境の収支バランス』同文舘出版。
能勢信子［1999d］『日本経済の社会会計分析』有斐閣学術センター。
能勢信子［2001a］「社会会計」神戸大学会計学研究室編『会計学辞典』第 5 版 同文舘出版：638-640 頁。
能勢信子［2001b］「社会会計における評価」神戸大学会計学研究室編『会計学辞典』第 5 版同文舘出版：640-641 頁。
能勢信子［2001c］「社会会計の国際的標準化」神戸大学会計学研究室編『会計学辞典』第 5 版　同文舘出版：641 頁。
能勢信子［2001d］「社会会計マトリックス」神戸大学会計学研究室編『会計学辞典』第 5 版同文舘出版：641-642 頁。
能勢信子［2001e］「社会プログラム」神戸大学会計学研究室編『会計学辞典』第 5 版 同文舘出版：644 頁。
能勢信子［2001f］「社会報告」神戸大学会計学研究室編『会計学辞典』第 5 版 同文舘出版：644-645 頁。
能勢信子教授退官記念論文集刊行委員会編［1990］『経済会計の発展―会計思考の新展開―』同文舘。
則武保夫・藤田正寛・大野喜久之輔［1966］「新庄先生：人と学問」『國民經濟雑誌』114（3）：99-121 頁。
福田正夫［1989］「追悼　サー・ジョン・ヒックス」『経済セミナー』415：70-72 頁。
藤井虎雄［1955］「廿世紀の偉大な希望　J・フーラスティエの著書のおしへるもの」『新論』1（5）：160-163 頁。
藤田誠一［1989］「則武保夫先生：人と学問」『國民經濟雑誌』160（3）：117-137 頁。
藤田正寛［1999］「能勢信子先生を偲んで」『経済情報学論集』13：3-9 頁。
ベルナルド・コラス編著・藤田晶子訳［2007］『世界の会計学者　17 人の学説入門』中央経済社。
北條勇作［2006］「山浦瑛子教授定年退職記念号発刊に寄せて」『高崎経済大学論集』48（4）：ⅰ-ⅱ頁。
美馬孝人［1992］「大沼盛男先生の還暦を祝して」『北海学園大学経済論集』39（2）：ⅰ-ⅱ

頁。
眞野ユリ子［1978］『損益計算書論―ペイトン学説研究―』森山書店。
森　昭夫・榊原茂樹［1985］「小野二郎先生：人と学問」『國民經濟雑誌』152（4）：117-138 頁。
森　茂也［1975］「酒井正兵衛教授にささげる」『アカデミア　経済経営学編』49：別 1-2 頁。
矢尾次郎［1957］「田中金司先生の学問」『國民經濟雑誌』96（5）：81-96 頁。
矢尾次郎［1958］「田中金司先生の學問」『バンキング』121：119-128 頁。
山浦瑛子訳［1973］『フランス会計学』白水社（Jean Fourustié[1943]*La Comptabilité*, Presses Universitaires de France）。
山浦瑛子［1975］「（報告）ボルドーの想い出」『高崎経済論集』17（3・4）：181-193 頁。
山浦瑛子［1988］『入門原価計算』創成社。
山浦瑛子［1989］『財務会計概論』創成社。
山浦瑛子［1993］『実務にすぐ使える財務管理』創成社。
山浦瑛子［1994a］「フランス会計学研究：会計と経済の接点をジャン・フーラスティエ思考（会計思考・経済思考・社会思考）に探る」博士論文（拓殖大学）。
山浦瑛子［1994b］「企業活動と地域社会貢献活動」『日経連タイムス』（1994 年 10 月 27 日）：2 頁。
山浦瑛子［1994c］「環境監査―実態調査にみるわが国化学業界の環境監査について―」『高崎経済大学付属産業研究所紀要』30（1）：18-36 頁。
山浦瑛子［1995］「環境と企業経営の接点としての『環境監査』」『NOVITAS』（高崎経済大学）4：1-22 頁。
山浦瑛子［1997］『フランス会計論』創成社。
山浦瑛子［1998］「環境倫理の時代の環境監査」高崎経済大学付属産業研究所編『新経営・経済時代への多元的適応』日本経済評論社。
山浦瑛子編著［2000］『21 世紀社会の企業情報―諸企業情報の変貌を見据えて』創成社。
山浦瑛子［2003］『変革期の財務会計論』創成社。
山田家正［1997］「久野光朗名誉教授記念号の発刊によせて」『商學討究』47（2・3）：1-2 頁。
吉田義三［1973］「西川清治教授退官記念号の発刊にあたって」『經濟學雑誌』69（1・2）。
早稲田大祭 2015「卒業生インタビュー～奥島孝康先輩～」
http://hakuoh.jp/about/about_02.html 2016 年 8 月 7 日アクセス。
渡邉尚［1999］「献辞」『經濟論叢』163（1）。
J. R. Hicks and Nobuko Nosse, [1974] *The Social Framework of the Japanese Economy an Introduction to Economics*, Oxford University Press（酒井正三郎監訳・山本有造訳[1976]『日本経済の構造：経済学入門』同文舘）.

Japan Knowledge「文庫クセジュ」
https://japanknowledge.com/contents/quesaisje/index.html 2016 年 7 月 2 日アクセス。
Japan Knowledge「ニッポン書物遺産：文庫クセジュ 1」
http://japanknowledge.com/articles/blogheritage/que/1.html 2016 年 7 月 2 日アクセス。
Japan Knowledge「ニッポン書物遺産：文庫クセジュ 2」
http://japanknowledge.com/articles/blogheritage/que/2.html 2016 年 7 月 2 日アクセス。
Japan Knowledge「ニッポン書物遺産：文庫クセジュ 3」
http://japanknowledge.com/articles/blogheritage/que/3.html 2016 年 7 月 2 日アクセス。
Japan Knowledge「ニッポン書物遺産：文庫クセジュ 4」
http://japanknowledge.com/articles/blogheritage/que/4.html 2016 年 7 月 2 日アクセス。

＜新聞記事＞
神戸新聞朝刊（1956 年 5 月 25 日）「おしどり助教授誕生　全国で初の経済学　学生の人気者　神大の能勢信子さん」
神港新聞夕刊（1955 年 11 月 27 日）「日曜訪問リレー対談」
神港新聞夕刊（1955 年 12 月 4 日）「日曜訪問リレー対談」
日本経済新聞朝刊（2015 年 6 月 1 日）「助太刀し合うサムライ業」
北海道新聞夕刊（1984 年 10 月 29 日）「眞野ユリ子氏」
読売新聞朝刊（1958 年 11 月 3 日）「座談会　生活文化の解剖」

＜目録等＞
「合崎堅二教授略歴・業績目録」［1993］『国学院経済学』39（3・4）：343-350 頁。
「合崎堅二先生の経歴と業績」［1986］『横浜経営研究』7（1）：105-108 頁。
「飯野利夫教授主要経歴・著作目録」［1990］『商学論纂』31（5・6）：283-296 頁。
「飯野利夫教授主要経歴・著作目録」［1995］『駿河台経済論集』4（2）：429-438 頁。
「上村久雄教授略歴および著作目録」［1994］『研究年報経済学』55（3）：521-528 頁。
「大沼盛男教授　略歴　著作目録」［1992］39（2）。
「置塩信雄教授略歴・業績目録」［1997］『大阪経大論集』47（6）：401-412 頁。
「置塩信雄博士略歴・著作目録」［1990］『國民經濟雑誌』162（3）：137-151 頁。
「小野二郎博士略歴・著作目録」［1985］『國民經濟雑誌』152（4）：139-149 頁。
「小野武四郎博士年譜・著作目録」［1981］『経濟學論究』35（2）：107-118 頁。
「会計学（北海学園大学教養部講義概要）」［1978-1984］。

「岸教授略歴・主要著作目録」［2000］『修道商学』40（2）。
「久野光朗名誉教授年譜及び主要研究業績目録」［1997］『商學討究』47（2・3）：379-393 頁。
「小西康生名誉教授略歴・著作目録」［2007］『経済経営研究』57：巻末 13-17 頁。
「小林哲夫博士略歴・著作目録」［1999］『國民經濟雑誌』180（5）：85-92 頁。
「故松田和久先生略歴・著作目録」［1995］『神戸学院経済学論集』27（1・2）：243-247 頁。
「故眞野ユリ子教授略歴・著作目録」［1985］『北海学園大学経済論集』33（3）：131-133 頁。
「酒井正兵衛（正三郎）教授著作目録」［1964］『經濟科學』11（4）：151-159 頁。
「酒井正兵衛（正三郎）教授略歴」［1964］『經濟科學』11（4）：147-150 頁。
「酒井正兵衛（正三郎）教授略歴・著作目録」［1975］『アカデミア　経済経営学編』49：267-288 頁。
「定道宏教授略歴・著作目録」［1999］『經濟論叢』163（1）：132-140 頁。
「社会会計論：社会会計の本質および適用に関する研究」（能勢信子先生　博士論文・論文内容・論文審査結果の要旨）
http://www.lib.kobe-u.ac.jp/handle_gakui/D2000012　2015 年 7 月 20 日アクセス。
「新庄博博士年譜・著作目録」［1971］『商学論究』18（4）：145-154 頁。
「新庄博博士略歴・著作目録」［1966］『國民經濟雑誌』114（3）：122-131 頁。
「第 142 回国会参議院法務委員会会議録第 6 号」［1998]1-17 頁。
「武田隆二先生のご略歴・業績」［2009］『企業会計』61（7）：166-167 頁。
「武田隆二博士略歴・著作目録」［1992］『國民經濟雑誌』166（5）：139-163 頁。
「田中金司博士略歴・著作目録」［1957］『國民經濟雑誌』96（5）：97-113 頁。
「谷端長博士略歴・著作目録」［1984］『國民經濟雑誌』150（4）：140-145 頁。
「豊田利久教授略歴・主要業績目録」［2004］『国際協力論集』12（1）：113-121 頁。
「豊田利久教授略歴・主要著作目録」［2012］『経済科学研究』16（1）。
「中川和彦先生略歴・主要業績」［2003］『成城法学』70：265-283 頁。
「中川美佐子先生　教員の個人調書」［1996］
「中川美佐子先生　業績一覧」［2006］
「西川清治教授略歴・著作目録」［1973］『經濟學雑誌』69（1・2）：156-162 頁。
「西川清治博士略歴・著作目録」［1980］『阪南論集』15（2・3）：185-190 頁。
「能勢哲也教授略歴・研究業績」［1994］『商学論集』46（3）：1-12 頁。
「能勢信子教授略歴・著作目録」［1999］『経済情報学論集』13：219-230 頁。
「能勢信子博士略歴・著作目録」［1990］『國民經濟雑誌』162（5）：103-110 頁。
「則武保夫博士略歴・著作目録」［1989］『國民經濟雑誌』160（3）：139-147 頁。
「番場嘉一郎先生略歴・著作目録」［1980］『千葉商大論叢』18（2）：465-480 頁。

「平井泰太郎教授略歴・著作目録」［1971］『立正経営論集』7：146-149 頁。
「眞野脩教授略歴・研究業績」［1994］『経済学研究』44（3）：1-11 頁。
「名誉教授番場嘉一郎略年譜」［1974］『一橋論叢』71（2）：245-251 頁。
「名誉教授番場嘉一郎主要著作目録」［1974］『一橋論叢』71（2）：252-267 頁。
「名誉人文学博士・名誉教授名簿」国際基督教大学
https://www.icu.ac.jp/about/organization/honor.html 2016 年 8 月 7 日アクセス。
「矢尾次郎博士略歴・著作目録」［1980］『國民經濟雑誌』142（4）：151-157 頁。
「矢尾次郎博士略歴・著作目録」［1987］『南山経済研究』2（1）：85-91 頁。
「山浦瑛子教授　略歴および研究業績」［2006］『高崎経済大学論集』48（4）：vii-x iii 頁。
「山浦瑛子先生　業績書」［不明］。
「山浦瑛子先生　業績書（その 2）」［不明］。
「山浦瑛子先生　業績目録」［不明］。
「山浦瑛子先生　個人調書」［不明］。
「山下勝治博士略歴・著作目録」［1970］『國民經濟雑誌』122（4）：119-133 頁。
「山本泰督教授略歴・著作目録」［1995］『國民經濟雑誌』171（1）：129-137 頁。
「山本喜則教授　履歴および研究業績」［2014］『高崎経済大学論集』56（4）：ｖ-ｘ頁。

＜論文等検索サイト＞

科学研究費助成事業データベース　KAKEN　https://kaken.nii.ac.jp/
神戸大学付属図書館　博士学位論文データベース
http://www.lib.kobe-u.ac.jp/infolib/meta_pub/G0000003gakui
国立国会図書館サーチ　http://iss.ndl.go.jp/
国立情報学研究所　CiNii Articles　http://ci.nii.ac.jp/
国立情報学研究所　CiNii Books（NACSIS Webcat）　http://ci.nii.ac.jp/books/
国立情報学研究所　CiNii Dissertations　http://ci.nii.ac.jp/d/
一橋大学機関リポジトリ　HERMES-IR　「一橋大学一覧（1949-1968）」
https://hermes-ir.lib.hit-u.ac.jp/da/handle/123456789/7370

（井原　理代、兵頭　和花子、澤登　千恵、津村　怜花）